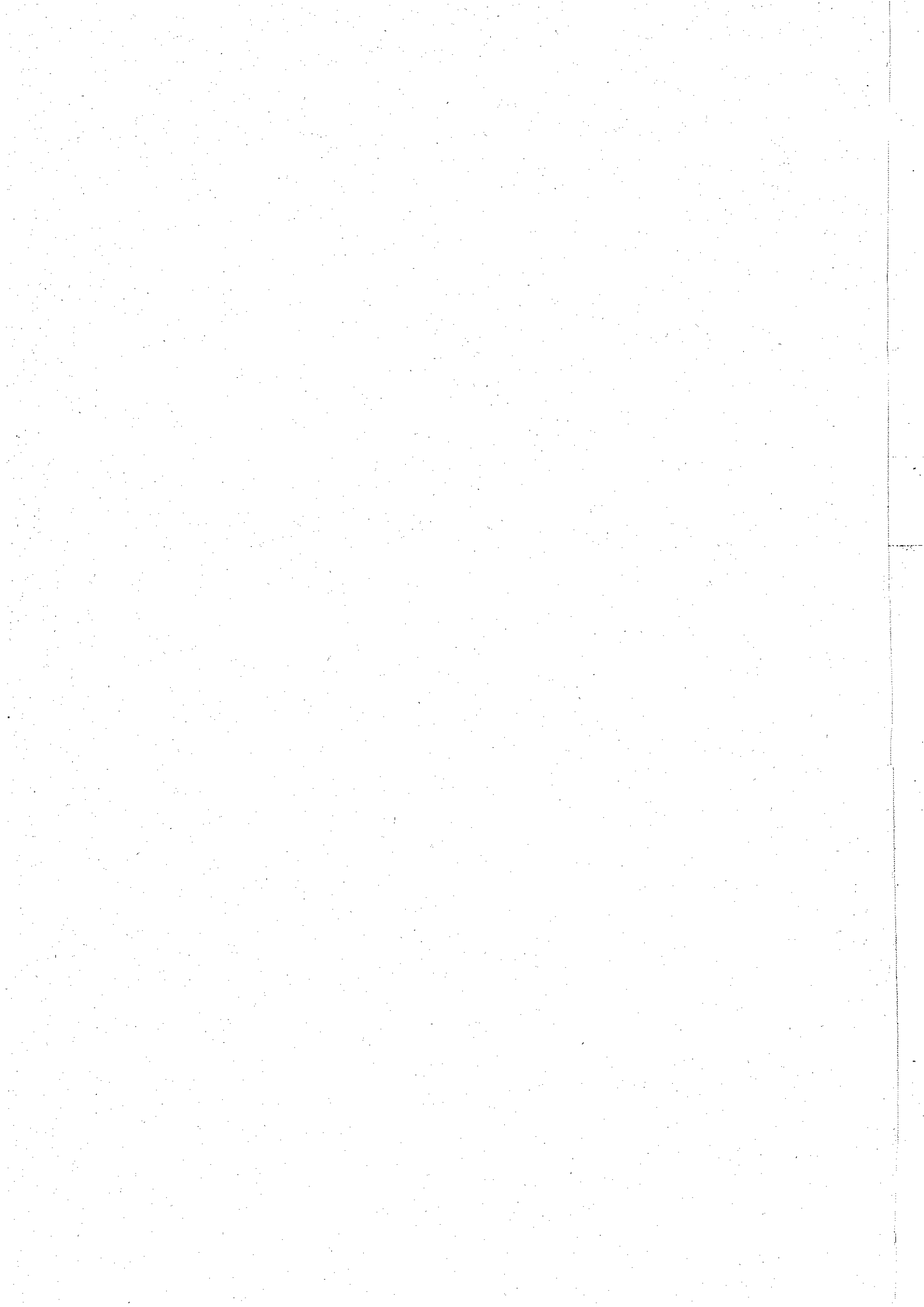


別冊

平成20年度

生活保護基準・生活保護実施要領等（案）



保 護 の 基 準



1 一般生活費認定基準表

1級地-1

第 1 類

年 齢 区 分	基 準 額
	円
0歳 ~ 2歳	20,900
3歳 ~ 5歳	26,350
6歳 ~ 11歳	34,070
12歳 ~ 19歳	42,080
20歳 ~ 40歳	40,270
41歳 ~ 59歳	38,180
60歳 ~ 69歳	36,100
70歳以上	32,340

居宅における世帯構成員の数が4人の世帯の第1類の額は、第1類の表に定める個人別の額を合算した額に0.95を乗じた額（その額に10円未満の端数が生じたときは、これを10円に切り上げるものとする。）とし、居宅における世帯構成員の数が5人以上の世帯の第1類の額は、第1類の表に定める個人別の額を合算した額に0.90を乗じた額（その額に10円未満の端数が生じたときは、これを10円に切り上げるものとする。）とする。（以下の全級地に共通）

第 2 類

基準額及び加算額		世 帯 人 員 別				
		1 人	2 人	3 人	4 人	5人以上1人 を増すごとに 加算する額
基 準 額		円	円	円	円	円
		43,430	48,070	53,290	55,160	440
地区別冬季 加算額 (11月から 3月まで)	I 区	24,350	31,530	37,630	42,670	1,640
	II 区	17,410	22,550	26,910	30,520	1,170
	III 区	11,560	14,970	17,860	20,250	780
	IV 区	8,820	11,420	13,630	15,460	590
	V 区	6,150	7,970	9,510	10,780	410
	VI 区	3,090	4,000	4,770	5,410	200

1級地-2

第 1 類

年 齢 区 分	基 準 額
	円
0歳 ~ 2歳	19,960
3歳 ~ 5歳	25,160
6歳 ~ 11歳	32,540
12歳 ~ 19歳	40,190
20歳 ~ 40歳	38,460
41歳 ~ 59歳	36,460
60歳 ~ 69歳	34,480
70歳以上	31,120

第 2 類

基準額及び加算額		世 帯 人 員 別				
		1 人	2 人	3 人	4 人	5人以上1人 を増すごとに 加算する額
基 準 額		円	円	円	円	円
		41,480	45,910	50,890	52,680	440
地区別冬季 加算額 (11月から 3月まで)	I 区	23,250	30,110	35,940	40,750	1,640
	II 区	16,630	21,540	25,700	29,150	1,170
	III 区	11,040	14,300	17,060	19,340	780
	IV 区	8,420	10,910	13,020	14,760	590
	V 区	5,870	7,610	9,080	10,290	410
	VI 区	2,950	3,820	4,560	5,170	200

2級地-1

第 1 類

年 齢 区 分	基 準 額
	円
0歳 ~ 2歳	19,020
3歳 ~ 5歳	23,980
6歳 ~ 11歳	31,000
12歳 ~ 19歳	38,290
20歳 ~ 40歳	36,650
41歳 ~ 59歳	34,740
60歳 ~ 69歳	32,850
70歳以上	29,430

第 2 類

基準額及び加算額		世 帯 人 員 別				
		1 人	2 人	3 人	4 人	5人以上1人 を増すごとに 加算する額
基 準 額		円	円	円	円	円
		39,520	43,740	48,490	50,200	400
地区別冬季 加算額 (11月から 3月まで)	I 区	22,160	28,690	34,240	38,830	1,490
	II 区	15,840	20,520	24,490	27,770	1,060
	III 区	10,520	13,620	16,250	18,430	710
	IV 区	8,030	10,390	12,400	14,070	540
	V 区	5,600	7,250	8,650	9,810	370
	VI 区	2,810	3,640	4,340	4,920	180

2級地-2

第 1 類

年 齢 区 分	基 準 額
	円
0歳 ~ 2歳	18,080
3歳 ~ 5歳	22,790
6歳 ~ 11歳	29,470
12歳 ~ 19歳	36,400
20歳 ~ 40歳	34,830
41歳 ~ 59歳	33,030
60歳 ~ 69歳	31,230
70歳以上	28,300

第 2 類

基準額及び加算額		世 帯 人 員 別				
		1 人	2 人	3 人	4 人	5人以上1人 を増すごとに 加算する額
基 準 額		円	円	円	円	円
		37,570	41,580	46,100	47,710	400
地区別冬季 加算額 (11月から 3月まで)	I 区	21,060	27,270	32,550	36,910	1,490
	II 区	15,060	19,510	23,280	26,400	1,060
	III 区	10,000	12,950	15,450	17,520	710
	IV 区	7,630	9,880	11,790	13,370	540
	V 区	5,320	6,890	8,230	9,320	370
	VI 区	2,670	3,460	4,130	4,680	180

3級地-1

第 1 類

年 齢 区 分	基 準 額
	円
0歳 ~ 2歳	17,140
3歳 ~ 5歳	21,610
6歳 ~ 11歳	27,940
12歳 ~ 19歳	34,510
20歳 ~ 40歳	33,020
41歳 ~ 59歳	31,310
60歳 ~ 69歳	29,600
70歳以上	26,520

第 2 類

基準額及び加算額		世 帯 人 員 別				
		1 人	2 人	3 人	4 人	5人以上1人 を増すごとに 加算する額
基 準 額		円	円	円	円	円
		35,610	39,420	43,700	45,230	360
地区別冬季 加算額 (11月から 3月まで)	I 区	19,970	25,850	30,860	34,990	1,340
	II 区	14,280	18,490	22,070	25,030	960
	III 区	9,480	12,280	14,650	16,610	640
	IV 区	7,230	9,360	11,180	12,680	480
	V 区	5,040	6,540	7,800	8,840	340
	VI 区	2,530	3,280	3,910	4,440	160

3級地-2

第 1 類

年 齢 区 分	基 準 額
	円
0歳 ~ 2歳	16,200
3歳 ~ 5歳	20,420
6歳 ~ 11歳	26,400
12歳 ~ 19歳	32,610
20歳 ~ 40歳	31,210
41歳 ~ 59歳	29,590
60歳 ~ 69歳	27,980
70歳以上	25,510

第 2 類

基準額及び加算額		世 帯 人 員 別				
		1 人	2 人	3 人	4 人	5人以上1人 を増すごとに 加算する額
基 準 額		円 33,660	円 37,250	円 41,300	円 42,750	円 360
地区別冬季 加算額 (11月から 3月まで)	I 区	18,870	24,440	29,160	33,070	1,340
	II 区	13,490	17,480	20,860	23,650	960
	III 区	8,960	11,600	13,840	15,690	640
	IV 区	6,840	8,850	10,560	11,980	480
	V 区	4,770	6,180	7,370	8,350	340
	VI 区	2,390	3,100	3,700	4,190	160

2 その他の扶助基準表

(1) 救護施設等

ア 基準額

級	地	別	救護施設及び これに準ずる施設	更生施設及び これに準ずる施設
			円	円
1	級	地	64,240	68,050
2	級	地	61,030	64,650
3	級	地	57,820	61,250

イ 地区別冬季加算額 (11月から3月まで)

級	地	別	I 区	II 区	III 区	IV 区	V 区	VI 区
			円	円	円	円	円	円
1	級	地	10,640	8,160	6,420	4,760	3,030	2,280
2	級	地	9,680	7,430	5,840	4,330	2,760	2,070
3	級	地	8,720	6,690	5,260	3,900	2,480	1,870

(2) 期末一時扶助費

ア 居宅

級	地	別	基準額
			円
1	級	地 - 1	14,180
1	級	地 - 2	13,540
2	級	地 - 1	12,900
2	級	地 - 2	12,270
3	級	地 - 1	11,630
3	級	地 - 2	10,990

イ 救護施設等

級	地	別	基準額
			円
1	級	地	5,070
2	級	地	4,610
3	級	地	4,160

(3) 入院患者日用品費

ア 基準額

級	地	別	基準額
1・2・3	級	地	23,150円以内

イ 地区別冬季加算額 (11月から3月まで)

級	地	別	I区及びII区	III区及びIV区	V区及びVI区
			円	円	円
1・2・3	級	地	3,600	2,110	1,000

(4) 介護施設入所者基本生活費

ア 基準額

級	地	別	基準額
1・2・3	級	地	9,890円以内

イ 地区別冬季加算額 (11月から3月まで)

級	地	別	I区及びII区	III区及びIV区	V区及びVI区
			円	円	円
1・2・3	級	地	3,600	2,110	1,000

(5) 入学準備金

級 地 別	小 学 校	中 学 校	高 等 学 校 等
1・2・3級地	39,500円以内	46,100円以内	61,400円以内

(6) 教育扶助基準

級 地 別	小 学 校	中 学 校
1・2・3級地	円 2,150	円 4,180

(7) 住宅扶助基準

級 地 別	家賃、間代、地代等の額（月額）	補修費等住宅維持費の額（年額）
1・2級地	13,000円以内	<u>118,000円</u> 以内
3級地	8,000円以内	

(8) 出産扶助基準

級 地 別	施設分べん	居宅分べん
1・2・3級地	<u>173,000円</u> 以内	204,000円以内

(注) 施設分べんの場合は、入院料の実費を加算

(9) 生業扶助基準

区 分		基 準 額 (1・2・3級地)	
生 業 費		45,000円以内	
技 能 修 得 費	技能修得費（高等学校等就学費を除く。）	69,000円以内	
	高等学校等就学費	基本額（月額）	5,300円
		教材代	正規の授業で使用する教材の購入に必要な額
		授業料、入学料及び入学審査料	高等学校等が所在する都道府県の条例に定める都道府県立の高等学校等における額以内の額。ただし、市町村立の高等学校等に通学する場合は、当該高等学校等が所在する市町村の条例に定める市町村立の高等学校等における額以内の額。
	通学のための交通費	通学に必要な最小限度の額	
就 職 支 度 費		28,000円以内	

(10) 葬祭扶助基準

ア 基準額

級 地 別	基 準 額	
	大 人	小 人
1・2級地	199,000円以内	159,200円以内
3級地	174,100円以内	139,300円以内

イ 別表第8の3に該当

級 地 別	金 額
1・2級地	11,230 円
3級地	9,830

3 加 算 関 係

(1) 妊産婦加算

級 地 別	妊 婦 加 算		産 婦 加 算
	妊 娠 6 か 月 未 満	妊 娠 6 か 月 以 上	
1・2 級 地	9,140 円	13,810 円	8,490 円
3 級 地	7,770 円	11,740 円	7,220 円

(2) 母 子 加 算

要件Ⅰ 15歳に達する日以後の最初の3月31日までの間にある児童

要件Ⅱ 20歳未満の障害児

要件Ⅰ又は要件Ⅱに該当する児童を養育しなければならない場合

級 地 別	児 童 1 人		児 童 が 2 人 の 場 合 に 加 え る 額		児 童 が 3 人 以 上 1 人 を 増 す ご と に 加 え る 額	
	在 宅	入 院 ・ 入 所	在 宅	入 院 ・ 入 所	在 宅	入 院 ・ 入 所
1 級 地	7,750 円		610 円		310 円	
2 級 地	7,210 円	6,460 円	570 円	520 円	290 円	260 円
3 級 地	6,670 円		540 円		270 円	

(3) 障 害 者 加 算

ア 別表第1第2章の4の(2)のイに該当

級 地 別	加 算 額	
	在 宅	入 院 ・ 入 所
1 級 地	26,850 円	
2 級 地	24,970 円	22,340 円
3 級 地	23,100 円	

イ 別表第1第2章の4の(2)のイに該当

級 地 別	加 算 額	
	在 宅	入 院 ・ 入 所
1 級 地	17,890 円	
2 級 地	16,650 円	14,890 円
3 級 地	15,400 円	

ウ 別表第1第2章の4の(3)に該当

級 地 別	加 算 額
1・2・3 級 地	14,380 円

エ 別表第1第2章の4の(4)に該当

級 地 別	加 算 額
1・2・3 級 地	12,060 円

オ 別表第1第2章の4の(5)に該当

級 地 別	加 算 額
1・2・3 級 地	69,960円以内

(4) 介護施設入所者加算

級 地 別	加 算 額
1・2・3級地	9,890円以内

(5) 在宅患者加算

級 地 別	加 算 額
1・2級地	13,290円
3級地	11,300円

(6) 放射線障害者加算

ア 別表第1第2章の7の(1)に該当

級 地 別	加 算 額
1・2・3級地	42,660円

イ 別表第1第2章の7の(2)に該当

級 地 別	加 算 額
1・2・3級地	21,330円

(7) 児童養育加算(1・2・3級地)

児童養育加算は、児童の養育にあたる者について行い、その加算額(月額)は、児童1人につき次の表に掲げる額とする。

第1子及び 第2子	3歳に満たない児童(月の初日に生まれた児童については、出生の日から3年を経過しない児童とする。)	10,000円
	3歳以上の児童(月の初日に生まれた児童については、出生の日から3年を経過した児童とする。)であつて12歳に達する日以後の最初の3月31日までの間にあるもの	5,000円
第3子以降	小学校修了前の児童(12歳に達する日以後の最初の3月31日までの間にある児童をいう。)	10,000円

4 控 除 関 係

(1) 基礎控除額表

(別 紙)

(2) 特別控除(年額)

級	地	別	控	除	額
1	級	地	150,900		円
2	級	地	137,300		
3	級	地	123,700		

(3) 新規就労控除(月額)

級	地	別	控	除	額
1・2・3	級	地	10,400		円

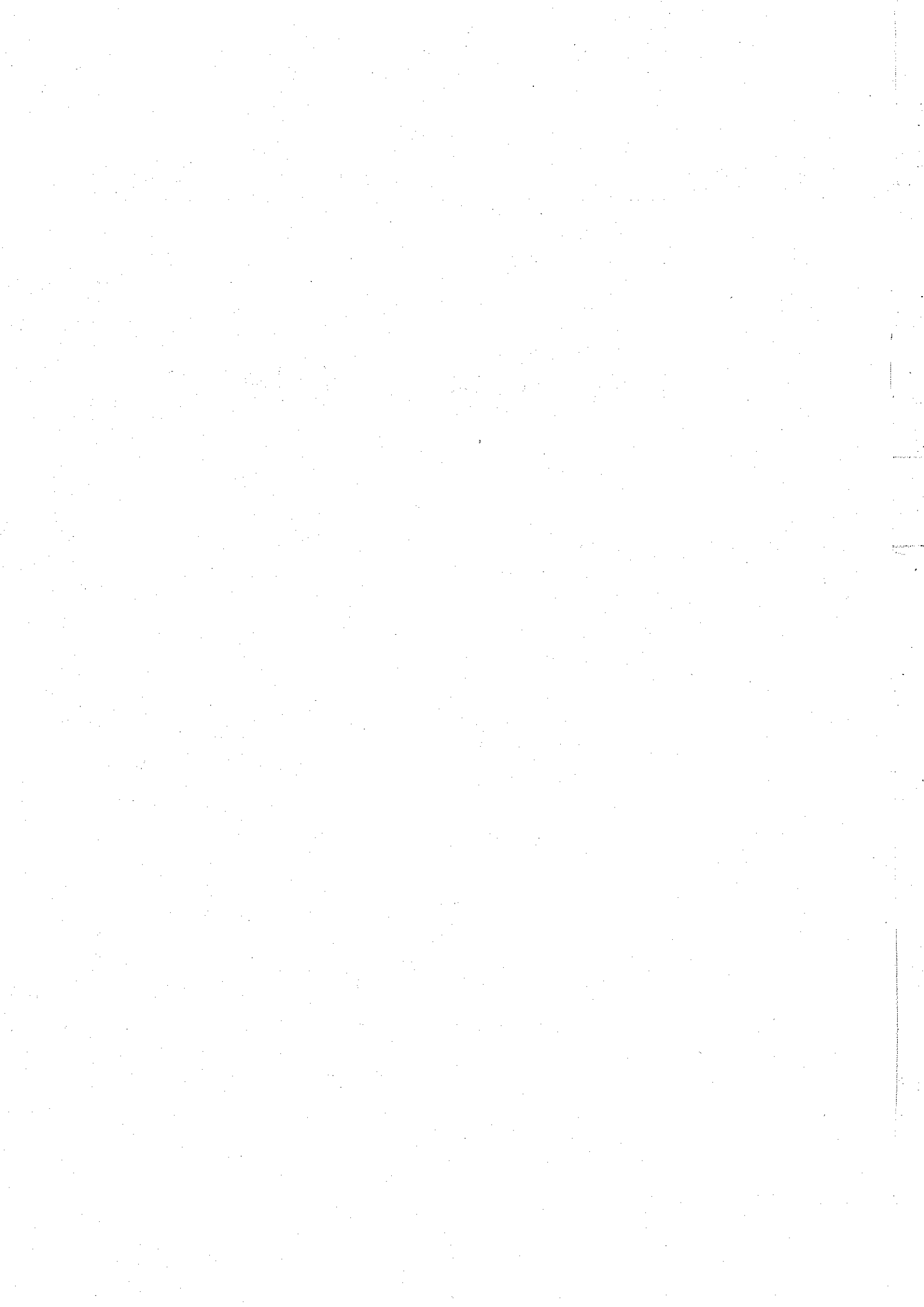
(4) 未成年者控除(月額)

級	地	別	控	除	額
1・2・3	級	地	11,600		円

基礎控除額表

収入金額別区分	1 級 地		2 級 地		3 級 地	
	1 人 目	2 人目以降	1 人 目	2 人目以降	1 人 目	2 人目以降
円 円	円	円	円	円	円	円
0 ~ 8,000	0 ~ 8,000	0 ~ 8,000	0 ~ 8,000	0 ~ 8,000	0 ~ 8,000	0 ~ 8,000
8,001 ~ 8,339	8,001 ~ 8,339	8,000	8,001 ~ 8,339	8,000	8,001 ~ 8,339	8,000
8,340 ~ 11,999	8,340	8,000	8,340	8,000	8,340	8,000
12,000 ~ 15,999	9,030	8,000	9,030	8,000	9,030	8,000
16,000 ~ 19,999	9,720	8,260	9,720	8,260	9,720	8,260
20,000 ~ 23,999	10,410	8,850	10,410	8,850	10,410	8,850
24,000 ~ 27,999	11,100	9,440	11,100	9,440	11,100	9,440
28,000 ~ 31,999	11,780	10,010	11,780	10,010	11,780	10,010
32,000 ~ 35,999	12,470	10,600	12,470	10,600	12,470	10,600
36,000 ~ 39,999	13,160	11,190	13,160	11,190	13,160	11,190
40,000 ~ 43,999	13,850	11,770	13,850	11,770	13,850	11,770
44,000 ~ 47,999	14,540	12,360	14,540	12,360	14,540	12,360
48,000 ~ 51,999	15,220	12,940	15,220	12,940	15,220	12,940
52,000 ~ 55,999	15,910	13,520	15,910	13,520	15,910	13,520
56,000 ~ 59,999	16,600	14,110	16,600	14,110	16,600	14,110
60,000 ~ 63,999	17,290	14,700	17,290	14,700	17,290	14,700
64,000 ~ 67,999	17,980	15,280	17,980	15,280	17,980	15,280
68,000 ~ 71,999	18,660	15,860	18,660	15,860	18,660	15,860
72,000 ~ 75,999	19,350	16,450	19,350	16,450	19,350	16,450
76,000 ~ 79,999	20,040	17,030	20,040	17,030	20,040	17,030
80,000 ~ 83,999	20,730	17,620	20,730	17,620	20,730	17,620
84,000 ~ 87,999	21,420	18,210	21,420	18,210	21,420	18,210
88,000 ~ 91,999	22,100	18,790	22,100	18,790	22,100	18,790
92,000 ~ 95,999	22,790	19,380	22,790	19,380	22,790	19,380
96,000 ~ 99,999	23,480	19,970	23,480	19,970	23,480	19,970
100,000 ~ 103,999	24,170	20,560	24,170	20,560	24,170	20,560
104,000 ~ 107,999	24,860	21,150	24,860	21,150	24,860	21,150
108,000 ~ 111,999	25,550	21,740	25,550	21,740	25,550	21,740
112,000 ~ 115,999	26,240	22,330	26,240	22,330	26,240	22,330
116,000 ~ 119,999	26,930	22,920	26,930	22,920	26,930	22,920
120,000 ~ 123,999	27,620	23,510	27,620	23,510	27,620	23,510
124,000 ~ 127,999	28,310	24,100	28,310	24,100	28,310	24,100
128,000 ~ 131,999	29,000	24,690	29,000	24,690	29,000	24,690
132,000 ~ 135,999	29,690	25,280	29,690	25,280	29,690	25,280
136,000 ~ 139,999	30,380	25,870	30,380	25,870	30,380	25,870
140,000 ~ 143,999	31,070	26,460	31,070	26,460	31,070	26,460
144,000 ~ 147,999	31,760	27,050	31,760	27,050	31,760	27,050
148,000 ~ 151,999	32,450	27,640	32,450	27,640	32,450	27,640
152,000 ~ 155,999	33,140	28,230	33,140	28,230	33,140	28,230
156,000 ~ 159,999	33,830	28,820	33,830	28,820	33,830	28,820
160,000 ~ 163,999	34,520	29,410	34,520	29,410	34,520	29,410
164,000 ~ 167,999	35,210	30,000	35,210	30,000	35,210	30,000
168,000 ~ 171,999	35,900	30,590	35,900	30,590	35,900	30,590
172,000 ~ 175,999	36,590	31,180	36,590	31,180	36,590	31,180
176,000 ~ 179,999	37,280	31,770	37,280	31,770	37,280	31,770
180,000 ~ 183,999	37,970	32,360	37,970	32,360	37,970	32,360
184,000 ~ 187,999	38,660	32,950	38,660	32,950	38,660	32,950
188,000 ~ 191,999	39,350	33,540	39,350	33,540	39,350	33,540
192,000 ~ 195,999	40,040	34,130	40,040	34,130	40,040	34,130
196,000 ~ 199,999	40,730	34,720	40,730	34,720	40,730	34,720
200,000 ~ 203,999	41,420	35,310	41,420	35,310	41,420	35,310
204,000 ~ 207,999	42,110	35,900	42,110	35,900	42,110	35,900
208,000 ~ 211,999	42,800	36,490	42,800	36,490	42,800	36,490
212,000 ~ 215,999	43,490	37,080	43,490	37,080	43,490	37,080
216,000 ~ 219,999	44,180	37,670	44,180	37,670	44,180	37,670
220,000 ~ 223,999	44,870	38,260	44,870	38,260	44,870	38,260
224,000 ~ 227,999	45,560	38,850	45,560	38,850	45,560	38,850
228,000 ~ 231,999	46,250	39,440	46,250	39,440	46,250	39,440
232,000 ~ 235,999	46,940	40,030	46,940	40,030	46,940	40,030
236,000 ~ 239,999	47,630	40,620	47,630	40,620	47,630	40,620
240,000 ~	48,320	41,210	48,320	41,210	48,320	41,210

保 護 の 実 施 要 領



実施要領の項目(新設・変更)

(旧)

次官通知	局長通知	課長通知
1 世帯の認定	1 世帯の認定	1 世帯の認定
2 実施責任	2 実施責任	2 実施責任
3 資産の活用	3 資産の活用	3 資産の活用
4 扶養義務の取扱い	4 扶養義務の取扱い	II 扶養義務の取扱い
5 他法他施策の活用	5 他法他施策の活用	4 最低生活費の認定
6 最低生活費の認定	6 最低生活費の認定	5 削除
7 収入の認定	7 収入認定の取扱い	6 収入認定の取扱い
8 保護の決定	8 保護の決定	7 保護の決定
9 施行期日及び関係通知の廃止	9 保護決定実施上の指導指示及び検診命令	II 保護決定実施上の指導指示及び検診命令
	10 訪問調査等	8 その他
	11 その他	9 施行期日
	12 施行期日等	



(新)H20.4.1～

次官通知	局長通知	課長通知
1 世帯の認定	1 世帯の認定	1 世帯の認定
2 実施責任	2 実施責任	2 実施責任
3 資産の活用	3 資産の活用	3 資産の活用
4 稼働能力の活用	4 稼働能力の活用	4 稼働能力の活用
5 扶養義務の取扱い	5 扶養義務の取扱い	5 扶養義務の取扱い
6 他法他施策の活用	6 他法他施策の活用	6 他法他施策の活用 (記載なし)
7 最低生活費の認定	7 最低生活費の認定	7 最低生活費の認定
8 収入の認定	8 収入認定の取扱い	8 収入認定の取扱い
9 保護の開始申請等	9 保護の開始申請等	9 保護の開始申請等
10 保護の決定	10 保護の決定	10 保護の決定
11 施行期日及び関係通知の廃止	11 保護決定実施上の指導指示及び検診命令	11 保護決定実施上の指導指示及び検診命令
	12 調査及び援助方針等	12 調査及び援助方針等
	13 その他	13 その他
	14 施行期日等	14 施行期日

生活保護法による保護の実施要領について

生活保護法による保護の実施については、法令及び告示に定めるもののほか、この要領による。

第1 世帯の認定

◎ 第1

同一の住居に居住し、生計を一にしている者は、原則として、同一世帯員として認定すること。

なお、居住を一にしていない場合であっても、同一世帯として認定することが適当であるときは、同様とすること。

◎ 第1

1 居住を一にしていないが、同一世帯に属していると判断すべき場合とは、次の場合をいうこと。

- (1) 出かせぎしている場合
- (2) 子が義務教育のため他の土地に寄宿している場合
- (3) 夫婦間又は親の未成熟の子（中学3年以下の子をいう。以下同じ。）に対する関係（以下「生活保持義務関係」という。）にある者が就労のため他の土地に寄宿している場合
- (4) 行商又は勤務等の関係上、子を知人等にあずけ子の生活費を仕送りしている場合
- (5) 病気治療のため病院等に入院又は入所（介護老人保健施設への入所に限る。2の(5)（エを除く。）及び(6)並びに第2の1において同じ。）している場合
- (6) 職業能力開発校、国立光明寮等に入所している場合
- (7) その他(1)から(6)までのいずれかと同様の状態にある場合

問（第1の4） 出かせぎ又は寄宿とは、生計を一にする世帯の所在地を離れて、特定又は不特定期間、他の土地で就労、事業、就学等のため仮の独立生活を営み、目的達成後その世帯に帰ることが予定されている状態をいうものと解してよいか。

答 お見込みのとおりである。

問（第1の5） 生計を一にする世帯から離れて、他の土地に新たな生計の本拠を構えた場合には、これを転出として取り扱ってよいか。

答 貴見のとおり取り扱って差しつかえない。

2 同一世帯に属していると認定されるものでも、次のいずれかに該当する場合は、世帯分離して差しつかえないこと。

ただし、これらのうち(3)、(5)、(6)、(7)及び(8)については、特に機械的に取り扱うことなく、世帯の状況及び地域の生活実態を十分考慮したうえ実施すること。また、(6)又は(7)に該当する者と生活保持義務関係にある者が同一世帯内にある場合には、(6)又は(7)に該当する者とともに分離の対象として差しつかえない。

- (1) 世帯員のうちに、稼働能力があるにもかかわらず収入を得るための努力をしない等保護の要件を欠く者があるが、他の世帯員が真にやむを得ない事情によって保護を要する状態にある場合
- (2) 要保護者が自己に対し生活保持義務関係にある者がいない世帯に転入した場合であって、同一世帯として認定することが適当でないとき
- (3) 保護を要しない者が被保護世帯に当該世帯員の日常生活の世話を目的として転入した場合であって、同一世帯として認定することが適当でないとき（世帯分離を行わないとすれば、その世帯がなお被保護世帯である場合であって、当該転入者がその世帯の世帯員のいずれに対しても生活保持義務関係にない場合に限る。）
- (4) 次に掲げる場合であって、当該要保護者がいわゆる寝たきり老人、重度の心身障害者等で常時の介護又は監視を要する者であるとき（世帯分離を行わないとすれば、その世帯が要保護世帯となる場合に限る。）

ア 要保護者が自己に対し生活保持義務関係にある者がいない世帯に属している場合

イ ア以外の場合であって、要保護者に対し生活保持義務関係にある者の収入が自己の一般生活費以下の場合

(5) 次に掲げる場合であって、その者を出身世帯員と同一世帯として認定することが出身世帯員の自立助長を著しく阻害すると認められるとき

ア 6箇月以上の入院又は入所を要する患者等に対して出身世帯員のいずれもが生活保持義務関係に

ない場合（世帯分離を行わないとすれば、その世帯が要保護世帯となる場合に限る。）

イ 出身世帯に配偶者が属している精神疾患に係る患者又は中枢神経系機能の全廃若しくはこれに近い状態にある者であって入院又は入所の期間がすでに1年をこえ、かつ、引き続き長期間にわたり入院又は入所を要する場合（世帯分離を行わないとすれば、その世帯が要保護世帯となる場合に限る。）

ウ 出身世帯に自己に対し生活保持義務関係にある者が属している長期入院患者等であって、入院又は入所期間がすでに3年をこえ、かつ、引き続き長期間にわたり入院又は入所を要する場合（世帯分離を行わないとすれば、その世帯が要保護世帯となる場合に限る。）

エ ア、イ若しくはウに該当することにより世帯分離された者が結核予防法第35条若しくは精神保健及び精神障害者福祉に関する法律第30条の公費負担を受けて引き続き入院している場合又は引き続きその更生を目的とする施設に入所している場合オ イ、ウ又はエに該当することにより世帯分離された者が退院若しくは退所後6箇月以内に再入院又は再入所し、長期間にわたり入院又は入所を要する場合（世帯分離を行わないとすれば、その世帯が要保護世帯となる場合に限る。）

(6) (5)のア、イ、ウ又はオ以外の場合で、6箇月以上入院又は入所を要する患者等の出身世帯員のうち入院患者等に対し生活保持義務関係にない者が収入を得ており、当該入院患者等と同一世帯として認定することがその者の自立助長を著しく阻害すると認められるとき（世帯分離を行わないとすれば、その世帯が要保護世帯となる場合に限る。）

(7) 同一世帯員のいずれかに対し生活保持義務関係にない者が収入を得ている場合であって、結婚、転職等のため1年以内において自立し同一世帯に属さないようになると認められるとき

(8) 救護施設、養護老人ホーム、特別養護老人ホーム若しくは介護老人福祉施設、障害者支援施設（障害者自立支援法附則第41条第1項の規定によりなお従前の例により運営することができることとされた同項

に規定する身体障害者療護施設並びに同法附則第58条第1項の規定によりなお従前の例により運営することができることとされた同項に規定する知的障害者更生施設及び知的障害者授産施設を含む。）又は児童福祉施設（知的障害児施設、盲ろうあ児施設、肢体不自由児施設、重症心身障害児施設に限る。）の入所者（障害者支援施設については、重度の障害を有するため入所期間の長期化が見込まれるものに限る。）と出身世帯員とを同一世帯として認定することが適当でない場合（保護を受けることとなる者とその者に対し生活保持義務関係にある者とが分離されることとなる場合については、世帯分離を行わないとすれば、その世帯が要保護世帯となる場合に限る。）

問（第1の8） 世帯分離が認められる場合については、局長通知第1の2及び5に各々その要件が示されているが、これは、世帯分離により保護継続している場合にも適用されるべきものと思う。したがって、世帯分離要件に該当しなくなった場合は、世帯分離を解除したうえ、改めて同一世帯として認定を行い、保護の要否判定を行うべきものと考えているが、どうか。

答 世帯分離は、世帯単位の原則をつらぬくとかえって法の目的を実現できないと認められる場合に例外的に認められる取扱いであることから、世帯分離要件は、世帯分離を行う時点だけでなく、保護継続中も常に満たされていなければならないものである。

したがって、一旦世帯分離を行った場合であっても、その後の事情の変更により、世帯分離を解除し、世帯を単位として保護の要否及び程度を決定することとなる。

具体的には、世帯分離により保護を要しないこととなった世帯の収入、資産の状況や、世帯構成、地域の実態との均衡及び世帯分離の効果等を継続的に把握し、世帯分離要件を満たしているかどうかについて少なくとも毎年1回は検討を行う必要がある。

なお、世帯分離の解除を円滑に行うためにも、世帯分離を行うに当たっては、当該世帯に対し世帯

分離の趣旨等を十分に説明しておく必要がある

問（第1の9） 世帯分離をした場合において、分離により保護を要しないとされた者（世帯）については、継続的に収入等を把握し、要件を満たしているかどうかについて少なくとも毎年1回は検討を行うこととされているが、世帯分離により保護を要しないとされた者の非協力により保護を要しないとされた者の収入等が申告されず、また再三届出を求めたにもかかわらず届出がなされないため要件の確認が行えないような場合は、どのように取り扱えばよいか。

答 世帯分離は、世帯単位の原則のもとで一定の要件を満たしていることを条件に保護の実施機関が適当と判断したときに例外的な取扱いとして認められているものである。したがって、世帯分離中は継続して分離の要件を満たしており、分離が適切であるとの実施機関の判断が前提となっているものであるから、設問のように福祉事務所において分離要件を見直すことが必要であると考え調査したが、世帯分離により保護を要しないとされた者の非協力により、この確認ができない場合には当然世帯単位原則に立ち返り同一世帯と認定すべきものである。

以上の考え方からすれば、設問のような場合においては、実施機関は、まず、世帯分離を解除し、当該者を同一世帯と認定する変更決定を行うとともに、再度必要な資料等の提出を求め、なお指示に従わない場合は所要の手続を経て保護の廃止を検討すべきである。

問（第1の10） 世帯分離により入院若しくは入所中又は局長通知第1の2の(8)に掲げる施設に入所中の者のみを相当長期間保護している場合であって、世帯分離後の出身世帯の生計中心者が代替わりしたこと等により、同一世帯として認定することが適当でない認められる場合には、別世帯とみなして差しつかえないか。

答 次のいずれにも該当する場合であって、社会通念上同一世帯として認定することが適当でない認められる場合には、出身世帯と分離して保護している者を別世帯とみなして差しつかえない。

1. 世帯分離後、入院入所期間がおおむね5年以上にわたっており、今後も引き続き長期間に及

ぶこと。

2. 世帯分離されている者に対し、出身世帯員のいずれもが生活保持義務関係にないこと。
3. 世帯分離後出身世帯の生計中心者が代替わりしていること。

なお、別世帯とみなした場合にも、従前の保護の実施機関が、なお、保護の実施責任（居住地保護の例による。）を負うこととなる。

問（第1の11） 肢体不自由者更生施設、視覚障害者更生施設若しくは内部障害者更生施設又は身体障害者授産施設の入所者のうち、重度の障害を有するため入所期間の長期化が見込まれるものであって、出身世帯員と同一世帯として認定することが適当でない場合には、局長通知第1の2の(8)の規定に準じて、世帯分離してよろしいか。

答 お見込みのとおりである。

- 3 高等学校（定時制及び通信制を含む。）、中等教育学校の後期課程、特別支援学校の高等部専攻科、高等専門学校、専修学校又は各種学校（以下「高等学校等」という。）に就学し卒業することが世帯の自立助長に効果的と認められる場合については、就学しながら、保護を受けることができるものとして差し支えないこと。
ただし、専修学校又は各種学校については、高等学校又は高等専門学校での就学に準ずるものと認められるものであって、その者がかつて高等学校等、を修了したことのない場合であること。

問（第1の7） 局長通知第1の3にいう「高等学校又は高等専門学校での就学に準ずるもの」とは、どのようなものをいうか。

答 専修学校又は各種学校の修業年限が3年以上であり、かつ、普通教育科目を含む就業時数がおおむね年800時間以上である教育課程に就学する場合であって、就学する者の意欲、能力、健康状態等から判断して、当該被保護世帯の自立助長のうえで高等学校等での就学と同程度の効果が期待されるものをいう。

4 次の各要件のいずれにも該当する者については、夜間大学等で就学しながら、保護を受けることができるものとして差しつかえないこと。

(1) その者の能力、経歴、健康状態、世帯の事情等を総合的に勘案の上、稼働能力を有する場合には十分それを活用していると認められること。

(2) 就学が世帯の自立助長に効果的であること。

5 次のいずれかに該当する場合は、世帯分離して差しつかえないこと。

(1) 保護開始時において、現に大学で就学している者が、その課程を修了するまでの間であって、その就学が特に世帯の自立助長に効果的であると認められる場合

(2) 次の貸与金を受けて大学で就学する場合

ア 独立行政法人日本学生支援機構法による貸与金
イ 国の補助を受けて行われる就学資金貸与事業による貸与金であってアに準ずるもの

ウ 地方公共団体が実施する就学資金貸与事業による貸与金（イに該当するものを除く。）であってアに準ずるもの

(3) 生業扶助の対象とならない専修学校又は各種学校で就学する場合であって、その就学が特に世帯の自立助長に効果的であると認められる場合

問（第1の6） 局長通知第1の5の(2)のイに該当するものは、どのようなものか。

答 例えば、財団法人交通遺児育英会の奨学金、文部科学省の高等学校等進学奨励費補助を受けて行われる事業による奨学金、生活福祉資金の修学資金のうち特に必要と認められる場合に支給されるもの母子福祉資金又は寡婦福祉資金の修学資金のうち特別貸付けによるもの等である。

6 同一世帯に属していると認められるものであっても、次の者については別世帯として取り扱うこと。

中国残留邦人等の円滑な帰国の促進及び永住帰国後の自立の支援に関する法律第13条に定める特定中国残留邦人等（以下「特定中国残留邦人等」という。）及び同法第14条に定めるその者の配偶者（以下「その者

の配偶者」という。）

第2 実施責任

◎ 第2

保護の実施責任は、要保護者の居住地又は現在地により定められるが、この場合、居住地とは、要保護者の居住事実がある場所をいうものであること。

なお、現にその場所に居住していなくても、他の場所に居住していることが一時的な便宜のためであって、一定期限の到来とともにその場所に復帰して起居を継続していくことが期待される場合等には、世帯の認定をも勘案のうえ、その場所を居住地として認定すること。

◎ 第2

1 居住地のない入院患者又は介護老人保健施設入所者については、原則としてその現在地である当該医療機関又は介護老人保健施設の所在地を所管する保護の実施機関が、保護の実施責任を負うものであるが、次の場合には、それぞれ当該各項によること。

(1) 保護を受けていなかった単身者で居住地のないものが入院又は入所した場合は、医療扶助若しくは介護扶助又は入院若しくは入所に伴う生活扶助の適用について、保護の申請又は保護の申請権者からはじめて保護の実施機関に連絡のあった時点における、要保護者の現在地（ただし、当該単身者が急病により入院した場合であって、発病地を所管する保護の実施機関に対し申請又は連絡を行うことができない事情にあったことが立証され、かつ、入院後直ちに保護の実施機関に申請又は連絡があった場合は、発病地とする。）を所管する保護の実施機関が、保護の実施責任を負うこと。

(2) 入院又は入所前の居住地に本人の家財等が保管され又は同地と同一管内地域に確実な帰来引受先がある場合であって、本人が退院又は退所後必ずその地域に居住することが予定されているときは、入院又は入所前の居住地を所管する保護の実施機関が、保護の実施責任（居住地保護の例による。）を負うこと。

(3) (2)のほか、入院若しくは入所と同時に居住地を失い、又は入院若しくは入所後（入院又は入所後において住宅費が認定されていた場合には、当該住宅費

が認定されなくなった日以後) 3箇月以内に入院又は入所を原因として居住地を失った者(入院又は入所後3箇月を経過した後において保護の申請をした者であって、申請時において居住地がなかったものを除く。)については、入院又は入所前の居住地を所管する保護の実施機関が、保護の実施責任(現在地保護の例による。)を負うこと。

問(第2の1) 単身者たる入院患者又は介護老人保健施設入所者の入院又は入所前の居住地がなくなった場合は、他に親族などの縁故先で退院又は退所後の着き先となることが期待される場所があるとしても、当該入院又は入所が法によるものであると否とを問わず、すべて居住地として認定されないと解してよいか。

答 局長通知第2の1の(2)に該当する場合を除き、お見込みのとおりである。

問(第2の2) 世帯分離された入院患者又は介護老人保健施設入所者については、出身世帯の居住地をその居住地として認定すべきであり、出身世帯が移転した場合も同様であると解してよいか。

答 お見込みのとおりである。

問(第2の3) 同一世帯員として認定すべき者のうち、一方が病院又は療養所にあり、他方が保護施設にある場合で、入院又は入所前の居住地が消滅しているときの実施責任は、どのように判断すべきか。

答 それぞれ世帯を別にしているものとして判断すべきである。

すなわち、保護施設にある者については法第19条第3項により、入院患者については局長通知第2の1又は2により取り扱うべきである。

問(第2の4) 次の場合の要保護者にかかる実施責任はいずれにあるか。

(1) 結核予防法に基づく公費負担による入院患者等医療扶助の適用を受けていない被保護者で居住地のないものが転院転所したとき。

(2) 医療扶助により入院していたもので局長通知第2の1の(3)又は2により保護を実施されていたものが、結核予防法に基づく公費負担を受ける等医

療扶助の適用を要しなくなった場合で引き続き生活扶助(入院患者の日用品費)を要するとき。

答 (1)については、局長通知第2の2は適用されず、当該被保護者の現在地である転院転所先の医療機関所在地の実施機関が、入院患者日用品費等の支給について実施責任を負うものである。

(2)については、同一医療機関に入院している限り引き続き局長通知第2の1の(3)又は2により実施責任が定められるものである。

問(第2の5) 局長通知第2の1の(3)にいう「入院後3箇月以内」及び「入院後3箇月を経過した後」の「3箇月」はどのように算定すべきか。

答 いずれも入院した日の属する月を含めて4箇月目の月の入院日に応答する日の前日までをいうものである。

問(第2の7) 被保護者がケアハウスに入所した場合、ケアハウス所在地をその者の居住地とし、その者に対する保護の実施責任は、ケアハウス所在地を所管する保護の実施機関が負うこととなるのか。

答 お見込みのとおりである。

なお、同様の取扱いとしては、身体障害者福祉ホーム、精神障害者福祉ホーム、知的障害者福祉ホーム、軽費老人ホーム、認知症対応型共同生活介護(グループホーム)等がある。

また、障害者自立支援法施行時に現に障害者自立支援法に規定する共同生活援助を行う住居に入居している者については、従前の保護の実施機関が引き続き保護の実施責任を負うこととなる。

問(第2の8) 平成18年10月以前より児童福祉法に基づく措置により児童福祉施設(知的障害児施設、盲ろうあ児施設、肢体不自由児施設及び重症心身障害児施設に限る。)に入所している児童が、引き続き契約に基づき当該施設に入所する場合、その児童の入所期間中、当該施設(複数の施設に継続して入所措置された場合には最初に入所措置された施設)に入所措置する前の居住地又は現在地を所管する保護の実施機関が、当該児童に対する保護の実施責任を負うものと考えてよろしいか。

答 お見込みのとおりである。

2. 居住地のない被保護者又は要保護者について、保護の実施機関が所管区域内に適当な指定医療機関がないか、あっても満床のため、所管区域外の指定医療機関に医療を委託した場合及び治療の必要上から所管区域外の指定医療機関に委託替えした場合（生活保護法による医療扶助を適用されている患者が自発的に転院転所をした場合であって、客観的に保護の実施機関において委託替えすべきであったと認められるときを含む。）には、当該医療の継続中従前の保護の実施機関が、なお保護の実施責任（1の(2)に該当する場合のほかは現在地保護の例による。）を負うこと。
3. 居住地のない介護老人保健施設又は介護療養型医療施設入所者であって、法による介護扶助を適用されている被保護者が、当該保護の実施機関の所管区域外の指定介護機関に転院、転所をした場合には、当該介護扶助の継続中従前の保護の実施機関が、なお保護の実施責任（1の(2)に該当する場合のほかは現在地保護の例による。）を負うこと。
4. 単身の被保護者（入所と同時に保護を開始される者を含む。）が国立保養所又は結核回復者の後保護を目的とする施設に入所した場合には、当該施設入所中の保護の実施責任は、入所前の居住地又は現在地により定めること。ただし、病院又は療養所から直ちに結核回復者の後保護を目的とする施設に入所した場合には、当該施設入所中の保護の実施責任は、病院又は療養所に入院又は入所中における保護の実施機関にあるものとする。
5. 保護施設に入所している者が病院、介護老人保健施設若しくは療養所に入院若しくは入所した場合又は保護施設を退所し、引き続き保護施設通所事業を利用した場合には、入院若しくは入所又は通所している期間中（保護施設通所事業については1年以内に限る。）、当該施設に入所していたときの保護の実施機関が引き続き保護の実施責任を負うこと。
6. 被保護者が老人福祉法の措置により養護老人ホーム又は特別養護老人ホームに入所した場合は、その者の入所期間中、従前の保護の実施機関が従前どおり保護の実施責任を負うこと。
7. 老人福祉法の措置により養護老人ホーム又は特別養護老人ホームに入所している者が病院、介護老人保健

施設又は療養所に入院又は入所した場合で当該入所措置廃止と同時に保護を開始されるときはその者に対する保護の実施責任は、当該施設に入所中その者に対し保護の実施責任を負う保護の実施機関にあるものとする。

8. 保護を受けていない介護老人福祉施設入所者から保護の申請があった場合のその者に対する実施責任は、当該施設所在地を所管する保護の実施機関にあるものとする。ただし、第1の規定により出身世帯と同一世帯と認定されるべき場合は、この限りでないこと。
9. 被保護者が障害者自立支援法に規定する障害者支援施設（障害者自立支援法附則第41条第1項の規定によりなお従前の例により運営することができることとされた同項に規定する身体障害者更生施設、身体障害者療養施設及び身体障害者授産施設並びに同法付則第58条第1項の規定によりなお従前の例により運営することができることとされた同項に規定する知的障害者更生施設及び知的障害者授産施設を含む。）に入所し、又は共同生活援助若しくは共同生活介護を行う住居（同法附則第58条第1項の規定によりなお従前の例により運営することができることとされた同項に規定する知的障害者通勤寮を含む。）に入居した場合は、その者の入所又は入居期間中、従前の保護の実施機関が従前どおり保護の実施責任を負うこと。
なお、当該者が入所又は入居前に属していた世帯が移転した場合でも、12の(1)の取扱いに拠らず、その世帯が従前居住していた地に居住地があるものと認定すること。
10. 児童福祉施設（知的障害児施設、盲ろうあ児施設、肢体不自由児施設、重症心身障害児施設に限る。）に入所している者に対する保護の実施責任は入所前の居住地又は現在地により定めること。
11. 法第18条第2項第1号の規定に基づく、死亡した被保護者の葬祭を行う者に対する葬祭扶助の実施責任は、死亡した被保護者に対する保護の実施機関が負うものとする。
12. 居住地又は現在地の認定は次によること。
 - (1) 第1の1によって同一世帯員と認定された者については、出身世帯の居住する地に居住地があるものと認定し、また、出身世帯が移転した場合には、その

移転先を居住地と認定すること。

- (2) (1)の場合において、出身世帯が分散している等のためその出身世帯の居住地が明らかでないときは、そのうち、生活の本拠として最も安定性のある地を居住地と認定すること。ただし、これによりがたいときは、出身世帯の生計中心者のいる地を居住地と認定すること。

なお、出身世帯員に安定した居住地がないときは、居住地がない者と認定すること。

- (3) 刑務所又は少年院より釈放され、又は仮釈放された者について帰住地がある場合であって、帰住先が出身世帯であるときは、その帰住地を居住地とし、そうでないときはその帰住地を現在地とみなすこと。

なお、帰住地がないか、又は明らかでない場合は、当該刑務所又は少年院の所在地を現在地とみなすこと。また刑の執行停止を受けた者についても、これに準ずること。

- (4) 次に掲げる施設に収容されている者又は入所している者については、居住地がない者とみなし、原則として当該施設所在地を所管する保護の実施機関が保護の実施責任を負い、現在地保護を行うこと。

ただし、下記の施設入所者の多くが配偶者からの暴力の被害者である現状にかんがみ、当該被害者の立場に立つて広域的な連携を円滑に進める観点から、都道府県内又は近隣都道府県間における自治体相互の取り決めを定めた場合には、それによることとして差しつかえない。

ア 売春防止法による婦人保護施設又は婦人相談所の行う一時保護の施設

イ 「配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護に関する法律」による婦人相談所が自ら行う又は委託して行う一時保護の施設

第3 資産の活用

㊦ 第3

最低生活の内容としてその所有又は利用を容認するに適しない資産は、次の場合を除き、原則として処分のおえ、最低限度の生活の維持のために活用させること。

なお、資産の活用は売却を原則とするが、これにより

難しいときは当該資産の貸与によって収益をあげる等活用の方法を考慮すること。

- 1 その資産が現実には最低限度の生活維持のために活用されており、かつ、処分するよりも保有している方が生活維持及び自立の助長に実効があがっているもの
- 2 現在活用されていないが、近い将来において活用されることがほぼ確実であって、かつ、処分するよりも保有している方が生活維持に実効があがると認められるもの
- 3 処分することができないか、又は著しく困難なもの
- 4 売却代金よりも売却に要する経費が高いもの
- 5 社会通念上処分させることを適当としないもの

㊦ 第3

資産保有の限度及び資産活用の具体的取扱いは、次に掲げるところによること。ただし、保有の限度をこえる資産であっても、次官通知第3の3から5までのいずれかに該当するものは、保有を認めて差しつかえない。

なお、不動産の保有状況については、定期的に申告を行わせるとともに、必要がある場合は更に訪問調査等を行うこと。

1 土地

(1) 宅地

次に掲げるものは、保有を認めること。ただし、処分価値が利用価値に比して著しく大きいと認められるものは、この限りでない。

また、要保護世帯向け長期生活支援資金（生活福祉資金貸付制度要綱に基づく「要保護世帯向け長期生活支援資金」をいう。以下同じ。）の利用が可能なものについては、当該貸付資金の利用によってこれを活用させること。

ア 当該世帯の居住の用に供される家屋に付属した土地で、建築基準法第52条及び第53条に規定する必要な面積のもの

イ 農業その他の事業の用に供される土地で、事業遂行上必要最小限度の面積のもの

(2) 田畑

次のいずれにも該当するものは、保有を認めること。ただし、処分価値が利用価値に比して著しく大きいと認められるものは、この限りでない。

ア 当該地域の農家の平均耕作面積、当該世帯の稼

働人員等から判断して適当と認められるものであること。

イ 当該世帯の世帯員が現に耕作しているものであるか、又は当該世帯の世帯員若しくは当該世帯の世帯員となる者がおおむね3年以内に耕作することにより世帯の収入増加に著しく貢献するようなものであること。

(3) 山林及び原野

次のいずれにも該当するものは、保有を認めること。ただし、処分価値が利用価値に比して著しく大きいと認められるものは、この限りでない。

ア 事業用（植林事業を除く。）又は薪炭の自給用若しくは採草地用として必要なものであって、当該地域の低所得世帯との均衡を失することにならないと認められる面積のもの

イ 当該世帯の世帯員が現に最低生活維持のために利用しているものであるか、又は当該世帯員若しくは当該世帯の世帯員となる者がおおむね3年以内に利用することにより世帯の収入増加に著しく貢献するようなものであること。

2 家屋

(1) 当該世帯の居住の用に供される家屋

保有を認めること。ただし、処分価値が利用価値に比して著しく大きいと認められるものは、この限りでない。

なお、保有を認められるものであっても、当該世帯の人員、構成等から判断して部屋数に余裕があると認められる場合は、間貸しにより活用させること。

また、要保護世帯向け長期生活支援資金の利用が可能なものについては、当該貸付資金の利用によってこれを活用させること。

(2) その他の家屋

ア 事業の用に供される家屋で、営業種別、地理的条件等から判断して、その家屋の保有が当該地域の低所得世帯との均衡を失することにならないと認められる規模のものは、保有を認めること。ただし、処分価値が利用価値に比して著しく大きいと認められるものは、この限りでない。

イ 貸家は、保有を認めないこと。ただし、当該世帯の再保護推定期間（おおむね3年以内とする。）

における家賃の合計が売却代金よりも多いと認められる場合は、保有を認め、貸家として活用させること。

3 事業用品

次のいずれにも該当するものは、保有を認めること。ただし、処分価値が利用価値に比して著しく大きいと認められるものは、この限りでない。

(1) 事業用設備、事業用機械器具、商品、家畜であって、営業種目、地理的条件等から判断して、これらの物の保有が当該地域の低所得世帯との均衡を失することにならないと認められる程度のものであること。

(2) 当該世帯の世帯員が現に最低生活維持のために利用しているものであるか、又は当該世帯の世帯員若しくは当該世帯の世帯員となるものが、おおむね1年以内（事業用設備については3年以内）に利用することにより世帯の収入増加に著しく貢献するようなもの。

4 生活用品

(1) 家具什器及び衣類寝具

当該世帯の人員、構成等から判断して利用の必要があると認められる品目及び数量は、保有を認めること。

(2) 趣味装飾品

処分価値の小さいものは、保有を認めること。

(3) 貴金属及び債券

保有を認めないこと。

(4) その他の物品

ア 処分価値の小さいものは、保有を認めること。

イ ア以外の物品については、当該世帯の人員、構成等から判断して利用の必要があり、かつ、その保有を認めても当該地域の一般世帯との均衡を失することにならないと認められるものは、保有を認めること。

5 判断基準

1の(1)の当該世帯の居住の用に供される家屋に付属した土地、及び2の(1)の当該世帯の居住の用に供される家屋であって、当該ただし書きにいう処分価値が利用価値に比して著しく大きいと認められるか否かの判断が困難な場合は、原則として各実施機関が設置するケース診断会議等において、総合的に検討を行うこと。

問 (第3の18) 生活保護の受給中、既に支給された保護費のやり繰りによって生じた預貯金等が発見された場合はどのように取り扱ったらよいか。

答 保護受給中に、何らかの事情により、預貯金等を保有していることが発見された場合については、まず、当該預貯金等が保護開始時に保有していたものではないこと、不正な手段(収入の未申告等)により蓄えられたものではないことを確認すること。当該預貯金等が既に支給された保護費のやり繰りによって生じたものと判断されるときは、当該預貯金等の使用目的を聴取し、その使用目的が生活保護の趣旨目的に反しないと認められる場合については、活用すべき資産には当たらないものとして、保有を容認して差しつかえない。なお、この場合、当該預貯金等があてられる経費については、保護費の支給又は就労に伴う必要経費控除の必要がないものであること。

また、保有の認められない物品の購入など使用目的が生活保護の趣旨目的に反すると認められる場合には、最低生活の維持のために活用すべき資産とみなさざるを得ない旨を被保護者に説明した上で、状況に応じて収入認定や要否判定の上で保護の停止又は廃止を行うこと。

問(第3の13) 不動産の保有状況については、定期的に申告を行わせることとされているが、具体的にはどう取り扱ったらよいか。

答 不動産の保有状況については、少なくとも固定資産税にかかる不動産評価額の評価替え(3年ごと)の際に併せて被保護者から書面により申告を行わせ(固定資産税納税通知書がある場合は写しを提出させること。)、必要がある場合は、更に訪問調査等により的確に把握すること。

なお、保護の実施機関において関係機関の協力等により被保護者の保有不動産の状況を的確に把握できる場合には、必ずしも被保護者から申告を行わせる必要はないこと。

おって、不動産を取得又は処分したときの申告については、予め被保護者に申告の義務があることを十分に理解させ、速やかに申告を行わせること。

問(第3の15) 局長通知第3の5にいうケース診断会議等の検討に付する目安を示されたい。

答 ケース診断会議等における検討対象ケースの選定に当たっては、当該実施機関における最上位級地の標準3人世帯の生活扶助基準額に同住宅扶助特別基準額を加えた値におおよそ10年を乗じ、土地・家屋保有に係る一般低所得世帯、周辺地域住民の意識、持ち家状況等を勘案した所要の補正を行う方法、またはその他地域の事情に応じた適切な方法により算出した額をもってケース診断会議等選定の目安額とする。

なお、当該目安額は、あくまでも当該検討会等の検討に付するか否かの判断のための基準であり保護の要否の決定基準ではないものである。

問(第3の16) 局長通知第3の5にいうケース診断会議等ではどのような点について検討を行うのか示されたい。

答 当該土地・家屋に居住することによって営まれる生活の内容が、最低生活の観点から、他の被保護世帯や地域住民の生活内容との比較においてバランスを失しない程度のものであるか、また、生活保護の補足性の観点からみて、居住用の不動産としてその価格が著しい不公平を生じるものではないか等について、住民意識及び世帯の事情等を十分勘案して長期的な視点で行うものとする。

具体的には、

- ① 当該土地・家屋の見込処分価値の精査
- ② 当該土地・家屋の処分の可能性
- ③ 当該世帯の移転の可能性
- ④ 当該世帯員の健康状態・生活歴
- ⑤ 当該世帯と近隣の関係
- ⑥ 当該世帯の自立の可能性
- ⑦ 当該地域の低所得者の持ち家状況、土地・家屋の平均面積、地域感情
- ⑧ その他必要な事項

について検討し、当該世帯の実情に応じた土地・家屋の保有の容認あるいは活用の方策等の総合的な援助方針について意見をまとめること。

なお、土地・家屋の活用について援助方針を樹立する際には、当該世帯に将来の生活の不安を抱かせ

ることのないよう配慮する必要があることから、単に資産活用に係る関係諸機関との連携、活用までの間の急迫保護のあり方、指導指示の内容について検討するのみでなく、個別の世帯の事情に即した他法他施策の活用、不動産を担保とした貸付の活用、不動産の賃貸等による活用、公営住宅等への入居による活用、親族との関係など当該世帯の自立助長の観点から、全般にわたり十分な配慮を行った援助方針の樹立に努める必要があること。

また、土地・家屋の保有を容認することが適当と判断された場合においても、検討の結果を活かして処遇の改善が図られる援助方針の樹立について留意されたいこと。

問(第3の6) 局長通知第3の4の(4)のイにいう「当該地域の一般世帯との均衡を失することにならない」ことの判断基準を示されたい。

答(1) 「当該地域」とは、通常の場合、保護の実施機関の所管区域又は市町村の行政区域を単位とするのが適当であるが、実情に応じて、市の町内会、町村の集落等の区域を単位として取り扱って差しつかえない。

(2) 「一般世帯との均衡を失することにならない」場合とは、当該物品の普及率をもって判断するものとし、具体的には、当該地域の全世帯の70%程度(利用の必要性において同様の状態にある世帯に限ってみた場合には90%程度)の普及率を基準として認定すること。

問(第3の17) 寝たきり老人、身体障害者等のいる世帯が、当該寝たきり老人等の身体状況又は病状からルームエアコンを利用している場合であって、その保有が社会的に適当であると認められる場合は、当該地域の普及率が低い場合であっても次官通知第3の5にいう「社会通念上処分させることを適当としないもの」としてルームエアコンの保有を認めてよいか。

答 お見込みのとおりである。

問(第3の8) 生活用品としての楽器、テレビ、カメラ及びステレオは、趣味装飾品、家具什器又はその他の物品のいずれに分類すべきか。

答 「その他の物品」として取り扱うこと。

問(第3の9) 次のいずれかに該当する場合であって、自動車による以外に通勤する方法が全くないか、又は通勤することがきわめて困難であり、かつ、その保有が社会的に適当と認められるときは、次官通知第3の5にいう「社会通念上処分させることを適当としないもの」として通勤用自動車の保有を認めてよいか。

- 1 障害者が自動車により通勤する場合
- 2 公共交通機関の利用が著しく困難な地域に居住する者等が自動車により通勤する場合
- 3 公共交通機関の利用が著しく困難な地域にある勤務先に自動車により通勤する場合
- 4 深夜勤務等の業務に従事している者が自動車により通勤する場合

答 お見込みのとおりである。

なお、2、3、4については、次のいずれにも該当する場合に限るものとする。

- (1) 世帯状況からみて、自動車による通勤がやむを得ないものであり、かつ、当該勤務が当該世帯の自立の助長に役立っていると認められること。
- (2) 当該地域の自動車の普及率を勘案して、自動車を保有しない低所得世帯との均衡を失しないものであること。
- (3) 自動車の処分価値が小さく、通勤に必要な範囲の自動車と認められるものであること。
- (4) 当該勤務に伴う収入が自動車の維持費を大きく上回ること。

問(第3の9の2) 通勤用自動車については、現に就労中の者にしか認められていないが、保護の開始申請時においては失業や傷病により就労を中断しているが、就労を再開する際には通勤に自動車を利用することが見込まれる場合であっても、保有している自動車は処分させなくてはならないのか。

答 概ね6か月以内に就労により保護から脱却することが確実に見込まれる者であって、保有する自動車の処分価値が小さいと判断されるものについては、次第3の2「現在活用されてはいないが、近い将来において活用されることがほぼ確実であって、かつ、処分するよりも保有している方が生

活維持に実効があがると認められるもの」に該当するものとして、処分指導を行わないものとして差し支えない。ただし、維持費の捻出が困難な場合についてはこの限りではない。

なお、処分指導はあくまで保留されているものであり、当該求職活動期間中に車の使用を認める趣旨ではないので、予め文書により「自動車の使用は認められない」旨を通知するなど、対象者には十分な説明・指導を行うこと。

また、期限到来後自立に至らなかった場合については、通勤用の自動車の保有要件を満たす者が通勤用に使用している場合を除き、速やかに処分指導を行うこと。

問（第3の11） 保護申請時において保険に加入しており、解約すれば返戻金のある場合は、すべて解約させるべきか。

答 保険の解約返戻金は、資産として活用させるのが原則である。ただし、返戻金が少額であり、かつ、保険料額が当該地域の一般世帯との均衡を失しない場合に限り、保護適用後保険金又は解約返戻金を受領した時点で法第63条を適用することを条件に解約させないで保護を適用して差しつかえない。

問（第3の19）保護申請時において学資保険に加入している場合においても、本通知第3の間11と同様の条件を満たす場合については、解約させないで保護を適用してよいか。

答 当該学資保険が、次の条件を満たす場合には、保護適用後、満期保険金（一時金等を含む）又は解約返戻金を受領した時点で、開始時の解約返戻金相当額について法第63条を適用することを前提として、解約させないで保護を適用して差しつかえない。

- 1 同一世帯の構成員である子が15歳又は18歳時に、同一世帯員が満期保険金（一時金等を含む）を受け取るものであること
- 2 満期保険金（一時金等を含む）又は満期前に解約した場合の返戻金の用途が世帯内の子の就学に要する費用にあてることを目的としたものであること
- 3 開始時点の1世帯あたりの解約返戻金の額

が50万円以下であること

問（第3の20）保護受給中に学資保険の満期保険金（一時金等を含む）又は解約返戻金を受領した場合について高等学校等就学費との関係も踏まえて取扱いを示されたい。

答 満期保険金等を受領した場合、開始時の解約返戻金相当額については、法第63条を適用し返還を求めることとなるが、本通知第8の間40の(2)のオに定める就学等の費用にあてられる額の範囲内で、返還を要しないものとして差しつかえない。なお、この場合、高等学校等就学費の支給対象とならない経費及び高等学校等就学費の基準額でまかないきれない経費であって、その者の就学のために必要な最小限度の額にあてられる場合については、高等学校等就学費は基準額どおり計上しても差しつかえない。

開始時の解約返戻金相当額以外については、「保護費のやり繰りによって生じた預貯金等の取扱い」と同様に、使用目的が生活保護の趣旨目的に反しない場合については、収入認定の除外対象として取り扱い、当該収入があてられる経費については、保護費の支給又は就労に伴う必要経費控除の必要がないものであること。なお、この取扱いは、保有を認められた他の保険についても同様である。

問（第3の12）障害者については通勤用の場合の他にも自動車の保有を認めてよいか。

答 障害（児）者が通院、通所及び通学（以下「通院等」という。）のために自動車を必要とする場合で、次のいずれにも該当し、かつ、その保有が社会的に相当と認められるときは、次官通知第3の5にいう「社会通念上処分させることを相当としないもの」としてその保有を認めて差しつかえない。

なお、次のいずれかの要件に該当しない場合であっても、その保有を認めることが真に必要であるとする特段の事情があるときは、その保有の容認につき厚生労働大臣に情報提供すること。

- (1) 障害（児）者の通院等のために定期的に自動車を利用されることが明らかな場合であること。
- (2) 当該者の障害の状況により、利用し得る公共

交通機関が全くないか又は公共交通機関を利用することが著しく困難であり、自動車による以外に通院等を行うことがきわめて困難であることが明らかに認められること。

- (3) 自動車の処分価値が小さく、又は構造上身体障害者用に改造してあるものであって、通院等に必要最小限のもの（排気量がおおむね2,000cc以下）であること。
- (4) 自動車の維持に要する費用が他からの援助（維持費に充てることを特定したものに限る）、他施策の活用等により、確実にまかなわれる見通しがあること。
- (5) 障害者自身が運転する場合又はもっぱら障害者（児）者の通院等のために生計同一者もしくは常時介護者が運転する場合であること。

問（第3の14） ローン付住宅を保有している者から保護の申請があったが、どのように取り扱うべきか。

答 ローンにより取得した住宅で、ローン完済前のものを保有している者を保護した場合には、結果として生活に充てるべき保護費からローンの返済を行うこととなるので、原則として保護の適用は行うべきではない。

問（第3の21） 局長通知第3の1の（1）及び第3の2の（1）において、要保護世帯向け長期生活支援資金の利用が可能なものについては、当該貸付資金の利用によってこれを活用させることとし、その活用後に保有を認めることとされているが、当該貸付資金の利用が可能にも関わらず、その利用を拒む世帯に対しては、どのように対応するのか。

答 要保護世帯向け長期生活支援資金の利用が可能な場合には、当該貸付資金の利用が優先されるべきである。

したがって、当該貸付資金の利用を拒む世帯に対しては、資産の活用は保護の受給要件となることを説明し、その利用を勧奨するとともに、貸付期間中も相談に応じること、貸付の利用が終了した後、他の要件を満たす場合には生活保護が適用になる旨を説明することとされたい。

それでも、当該貸付資金の利用を拒む場合については、資産活用を恣意的に忌避し、法第4条に定める保護の受給要件を満たさないものと解し、

- 1 生活保護受給中の者については、所要の手続を経て、保護を廃止する
- 2 新規の保護申請者については、保護申請を却下する

こととされたい。

問（第3の22） 保護受給中の者が要保護世帯向け長期生活支援資金を利用した場合、貸付日以前に支給された保護費はどのように取扱うのか。

答 要保護世帯向け長期生活支援資金の利用の可否については、社会福祉協議会による審査によって決定されることから、保護の実施機関による当該居住用不動産の保有認否の判断は、この審査結果を待って行うことになる。

したがって、この場合、貸付契約の成立をもって、当該居住用不動産が具体的に活用可能な資産になったものと判断されるべきであり、初回の貸付分が受けられる月の初日を資力発生日ととらえ、貸付日以前に支給された保護費については、法第63条による返還請求を行わないこと。

なお、この取扱いは、保護の実施機関が貸付日以前に当該居住用不動産の保有を否認していた場合も同様である。

第4 稼働能力の活用

㊦ 第4

要保護者に稼働能力がある場合には、その稼働能力を最低限度の生活の維持のために活用させること。

㊦ 第4

1 稼働能力を活用しているか否かについては、①稼働能力があるか否か、②その具体的な稼働能力を前提として、その能力を活用する意思があるか否か、③実際に稼働能力を活用する就労の場を得ることができるか否か、により判断すること。

また、判断にあたっては、必要に応じてケース診断

会議や稼働能力判定会議等を開催するなど、組織的な検討を行うこと。

2 稼働能力があるか否かの評価については、年齢や医学的な面からの評価だけではなく、その者の有している資格、生活歴・職歴等を把握・分析し、それらを客観的かつ総合的に勘案して行うこと。

3 稼働能力を活用する意思があるか否かの評価については、求職状況報告書等により本人に申告させるなど、その者の求職活動の実施状況を具体的に把握し、その者が2で評価した稼働能力を前提として真摯に求職活動を行ったかどうかを踏まえ行うこと。

4 就労の場を得ることができるか否かの評価については、2で評価した本人の稼働能力を前提として、地域における有効求人倍率や求人内容等の客観的な情報や、育児や介護の必要性などその者の就労を阻害する要因をふまえて行うこと。

問（第4の1） 現に就労している者の稼働能力の活用状況が十分であるか否かについては、どのように判断したら良いのか。

答 局第4で示した稼働能力の活用についての判断基準は、現に就労している者についても当てはまるものである。

具体的には、その者の現在の就労状況が2により評価した本人の稼働能力から見て妥当な水準にあると認められる場合には、その者は稼働能力を活用していると判断することができるものである。

一方、本人の稼働能力から見て妥当な水準にないと認められる場合には、3、4で示した事項を含めて1により客観的かつ総合的に判断されたい。

第5 扶養義務の取扱い

◎ 第5

要保護者に扶養義務者がある場合には、扶養義務者に扶養及びその他の支援を求めるよう、要保護者を指導すること。また、民法上の扶養義務の履行を期待できる扶養義務者のあるときは、その扶養を保護に優先させること。この民法上の扶養義務は、法律上当然の義務ではあ

るが、これを直ちに法律に訴えて法律上の問題として取り運ぶことは扶養義務の性質上なるべく避けることが望ましいので、努めて当事者間における話し合いによって解決し、円満裡に履行させることを本旨として取り扱うこと。

◎ 第5

1 扶養義務者の存否の確認について

(1) 保護の申請があったときは、要保護者の扶養義務者のうち次に掲げるものの存否をすみやかに確認すること。この場合には、要保護者よりの申告によるものとし、さらに必要があるときは、戸籍謄本等により確認すること。

ア 絶対的扶養義務者

イ 相対的扶養義務者のうち次に掲げるもの

(7) 現に当該要保護者又はその世帯に属する者を扶養している者

(イ) 過去に当該要保護者又はその世帯に属する者から扶養を受ける等特別の事情があり、かつ、扶養能力があると推測される者

問（第5の1） 局長通知第4の1の(1)のイの(イ)にいう「特別の事情」に該当するのは、どのような場合であるか。

答 民法第877条第2項にいう特別の事情と同様趣旨のものと考えてよく、この場合、特別の事情とは、法律上絶対的扶養義務者には一般的に扶養義務が課せられるが、その他の3親等内の親族についても、親族間に生活共同体的関係が存在する実態にあるときは、その実態に対応した扶養関係を認めるという観点から判断することが適当であるとされている。したがって、本法の運用にあたっては、この趣旨に沿って、保護の実施機関において、当事者間の関係並びに関係親族及び当該地域における扶養に関する慣行等を勘案して特別の事情の有無を判断すべきものである。

わが国の社会実態からみて、少なくとも次の場合にはそれぞれ各号に掲げる者について特別の事情があると認めることが適当である。

1 その者が、過去に当該申請者又はその世帯に属する者から扶養を受けたことがある場合

- 2 その者が、遺産相続等に関し、当該申請者又はその世帯に属する者から利益を受けたことがある場合
- 3 当該親族間の慣行又は当該地域の慣行により、その者が当該申請者又はその世帯に属する者を扶養することが期待される立場にある場合

(2) 扶養義務者の範囲は、次の表のとおりであること。

[表略]

(3) 扶養義務者としての「兄弟姉妹」とは、父母の一方のみを同じくするものを含むものであること。

2 扶養能力の調査について

- (1) 1により把握された扶養義務者について、その職業、収入等につき要保護者その他により聴取する等の方法により、扶養の可能性を調査すること。なお、調査にあたっては、金銭的な扶養の可能性のほか、被保護者に対する定期的な訪問・架電、書簡のやり取り、一時的な子どもの預かり等（以下「精神的な支援」という。）の可能性についても確認するものとする。

問（第5の2） 局長通知第4の2の(1)による扶養の可能性の調査により、例えば、当該扶養義務者が被保護者、社会福祉施設入所者及び実施機関がこれらと同様と認める者、要保護者の生活歴等から特別な事情があり明らかに扶養ができない者並びに夫の暴力から逃れてきた母子等当該扶養義務者に対し扶養を求めることにより明らかに要保護者の自立を阻害することになると認められる者であって、明らかに扶養義務の履行が期待できない場合は、その間の局長通知第5の2の(2)及び(3)の扶養能力調査の方法はいかにすべきか。

答1 当該扶養義務者が生活保持義務関係にある扶養義務者であるときは、局長通知第4の2の(2)のアのただし書きにいう扶養義務者に対して直接照会することが真に適當でない場合として取り扱って差しつかえない。

2 当該扶養義務者が生活保持義務関係にある扶養義務者以外であるときは、個別の慎重な検討を行い扶養の可能性が期待できないものとして取り

扱って差しつかえない。

- 3 なお、いずれの場合も、当該検討経過及び判定については、保護台帳、ケース記録等に明確に記載する必要があるものである。

問（第5の3） 生活扶助義務関係にある者の扶養能力を判断するにあたり、所得税が課されない程度の収入を得ている者は、扶養能力がないものとして取り扱ってよいか。

答 給与所得者については、資産が特に大きい等、他に特別の事由がない限り、お見込みのとおり取り扱って差しつかえない。給与所得者であってもこの取扱いによることが適當でない認められる者及び給与所得者以外の者については、各種収入額、資産保有状況、事業規模等を勘案して、個別に判断すること。

(2) 次に掲げる者（以下「重点的扶養能力調査対象者」という。）については、更にアからエにより扶養能力を調査すること。

- ① 生活保持義務関係にある者
- ② ①以外の親子関係にある者のうち扶養の可能性が期待される者
- ③ ①、②以外の、過去に当該要保護者又はその世帯に属する者から扶養を受ける等特別な事情があり、かつ、扶養能力があると推測される者

ア 重点的扶養能力調査対象者が保護の実施機関の管内に居住する場合には実地につき調査すること。

重点的扶養能力調査対象者が保護の実施機関の管外に居住する場合には、まずその者に書面により回答期限を付して照会することとし、期限までに回答がないときは、再度期限を付して照会を行うこととし、なお回答がないときは、その者の居住地を所管する保護の実施機関に書面をもって調査依頼を行うか、又はその居住地の市町村長に照会すること。ただし、重点的扶養能力調査対象者に対して直接照会することが真に適當でない認められる場合には、まず関係機関等に対して照会を行い、なお扶養能力が明らかにならないときは、

その者の居住地を所管する保護の実施機関に書面をもって調査依頼を行うか、又はその居住地の市町村長に照会すること。

なお、相当の扶養能力があると認められる場合には、管外であっても、できれば実地につき調査すること。

イ 調査は、重点的扶養能力調査対象者の世帯構成、職業、収入、課税所得及び社会保険の加入状況、要保護者についての税法上の扶養控除及び家族手当の受給並びに他の扶養履行の状況等について行うこと。

ウ アの調査依頼を受けた保護の実施機関は、原則として3週間以内に調査の上回答すること。

エ 調査に際しては、重点的扶養能力調査対象者に要保護者の生活困窮の実情をよく伝え、形式的にわたらないよう留意すること。

(3) 重点的扶養能力調査対象者以外の扶養義務者のうち扶養の可能性が期待される者については、次により扶養能力を調査すること。なお、実施機関の判断により、重点的扶養能力調査対象者に対する調査方法を援用しても差しつかえない。

ア 重点的扶養能力調査対象者以外の扶養義務者のうち扶養の可能性が期待される者への照会は、原則として書面により回答期限を付して行うこと。なお、実施機関の判断により電話連絡により行うこととしても差しつかえないが、不在等により連絡が取れない場合については、再度の照会又は書面による照会を行うこと。また、電話連絡により照会した場合については、その結果及び聴取した内容をケース記録に記載するとともに、金銭的な援助が得られる場合については、その援助の内容について書面での提出を求めること。

イ 実施機関において重点的扶養能力調査対象者以外の扶養義務者のうち扶養の可能性が期待される者に対して直接照会することが真に適當でない認められる場合には、扶養の可能性が期待できないものとして取り扱うこと。

ウ 照会の際には要保護者の生活困窮の実情をよく伝えるとともに、重点的扶養能力調査対象者

以外の扶養義務者のうち扶養の可能性が期待される者の世帯構成、職業、収入、課税所得及び社会保険の加入状況、要保護者についての税法上の扶養控除及び家族手当の受給並びに他の扶養履行の状況等の把握に努めること。

(4) 扶養の程度及び方法の認定は、実情に即し、実効のあがるように行うものとし、扶養義務者の了解を得られるよう努めること。この場合、扶養においては要保護者と扶養義務者との関係が一義的であるので、要保護者をして直接扶養義務者への依頼に努めさせるよう指導すること。

(5) 扶養の程度は、次の標準によること。

ア 生活保持義務関係（第1の2の(4)のイ、同(5)のイ、ウ若しくはオ又は同(8)に該当することによって世帯分離された者に対する生活保持義務関係を除く。）においては、扶養義務者の最低生活費を超過する部分

イ 第1の2の(4)のイ、同(5)のイ、ウ若しくはオ又は同(8)に該当することによって世帯分離された者に対する生活保持義務関係並びに直系血族（生活保持義務関係にある者を除く）、兄弟姉妹及び相対的扶養義務者の関係（以下「生活扶助義務関係」という。）においては、社会通念上それらの者にふさわしいと認められる程度の生活を損わない限度

問（第5の4） 局長通知第5の2の(5)のイは、生活保持義務関係にある者の同居の事実の有無又は親権の有無にかかわらず適用されるものと思うが、どうか。

答 お見込のとおりである。

(6) 扶養の程度の認定に当たっては、次の事項に留意すること。

ア 扶養義務者が生計中心者であるかどうか等その世帯内における地位等を考慮すること。

イ 重点的扶養能力調査対象者以外の者が要保護者を引き取ってすでになんらかの援助を行っていた場合は、その事情を考慮すること。

3 扶養の履行について

(1) 重点的扶養能力調査対象者が十分な扶養能力があるにもかかわらず、正当な理由なくして扶養を拒み、他に円満な解決の途がない場合には、家庭裁判所に対する調停又は審判の申立てをも考慮すること。この場合において、要保護者にその申立てを行わせることが適当でないと判断されるときは、社会福祉主事が要保護者の委任を受けて申立ての代行を行ってもよいこと。なお、重点的扶養能力調査対象者以外の者について家庭裁判所に対して調停等を申立てることを妨げるものではない。

(2) (1)の場合において、必要があるときは、(1)の手續の進行と並行してとりあえず必要な保護を行い家庭裁判所の決定があった後、法第77条の規定により、扶養義務者から、扶養可能額の範囲内において、保護に要した費用を徴収する等の方法も考慮すること。

なお、法第77条の規定による費用徴収を行うに当たっては、扶養権利者が保護を受けた当時において、当該扶養義務者が法律上の扶養義務者であり、かつ、扶養能力があったこと及び現在当該扶養義務者に費用償還能力があることを確認すること。

(3) 扶養義務者の扶養能力又は扶養の履行状況に変動があったと予想される場合は、すみやかに調査のうえ、再認定等適宜の処理を行うこと。

なお、重点的扶養能力調査対象者に係る扶養能力及び扶養の履行状況の調査は、年1回程度は行うこと。

第6 他法他施策の活用

◎ 第6

他の法律又は制度による保障、援助等を受けることができる者又は受けることができると推定される者については、極力その利用に努めさせること。

◎ 第6

次に掲げるものは、特にその活用を図ること。また、活用を図るべきものはこれらに限られるものではないので、これら以外のものの活用についても、留意すること。

- 1 身体障害者福祉法
- 2 児童福祉法

- 3 知的障害者福祉法
- 4 障害者自立支援法
- 5 老人福祉法
- 6 売春防止法
- 7 配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護に関する法律
- 8 災害救助法
- 9 農業災害補償法
- 10 結核予防法
- 11 精神保健及び精神障害者福祉に関する法律
- 12 感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律
- 13 らい予防法の廃止に関する法律
- 14 原子爆弾被爆者に対する援護に関する法律
- 15 公害健康被害の補償等に関する法律
- 16 特別支援学校への就学奨励に関する法律
- 17 健康保険法
- 18 厚生年金保険法
- 19 恩給法
- 20 各共済組合法
- 21 雇用保険法
- 22 労働者災害補償保険法
- 23 国民健康保険法
- 24 国民年金法
- 25 高齢者の医療の確保に関する法律
- 26 介護保険法
- 27 児童扶養手当法
- 28 特別児童扶養手当等の支給に関する法律
- 29 児童手当法
- 30 戦傷病者戦没者遺族等援護法
- 31 未帰還者留守家族等援護法
- 32 引揚者給付金等支給法
- 33 自動車損害賠償保障法
- 34 墓地、埋葬等に関する法律
- 35 自作農維持資金融通法
- 36 母子及び寡婦福祉法
- 37 母子保健法
- 38 学校保健法
- 39 生活福祉資金
- 40 中国残留邦人等の円滑な帰国の促進及び永住帰国

持するために必要な需要を基とした費用を、必ず実地につき調査し、正確に行わなければならないこと。

第7 最低生活費の認定

㊦ 第7

最低生活費は、要保護者の年齢別、性別、世帯構成別、所在地域別等による一般的な需要に基づくほか、健康状態等によるその個人又は世帯の特別の需要の相違並びにこれらの需要の継続性又は臨時性を考慮して認定すること。

1 経常的最低生活費

経常的最低生活費は、要保護者の衣食等月々の経常的な最低生活需要のすべてを満たすための費用として認定するものであり、したがって、被保護者は、経常的最低生活費の範囲内において、通常予測される生活需要はすべてまかなうべきものであること。

実施機関は、保護の実施にあたり、被保護者がこの趣旨を理解し、自己の生活の維持向上に努めるよう指導すること。

2 臨時的最低生活費（一時扶助費）

臨時的最低生活費（一時扶助費）は、次に掲げる特別の需要のある者について、最低生活に必要な不可欠な物資を欠いていると認められる場合であって、それらの物資を支給しなければならない緊急やむを得ない場合に限り、別に定めるところにより、臨時的に認定するものであること。

なお、被服費等の日常の諸経費は、本来経常的最低生活費の範囲内で、被保護者が計画的に、順次更新していくべきものであるから、一時扶助の認定にあつては、十分留意すること。

- (1) 出生、入学、入退院等による臨時的な特別需要
- (2) 日常生活の用を弁ずることのできない長期療養者について臨時的に生じた特別需要
- (3) 新たに保護開始する際等に最低生活の基盤となる物資を欠いている場合の特別需要
- (4) ひとり親世帯の経済的自立に必要な特別需要

㊦ 第7

最低生活費の認定は、当該世帯が最低限度の生活を維

1 級地基準の適用

㊦ 第7

1 級地基準の適用

級地基準の適用は、原則として世帯の居住地又は現在地によるものであるが、2に特別の定めがある場合のほか、次に掲げる場合は、例外的に、それぞれ当該各項によるものとする。

- (1) 葬祭扶助については、葬祭地の級地基準によること。
- (2) 旅先等で急迫保護を必要とする場合は、当該要保護者の現在地の級地基準によること。

2 経常的一般生活費

(1) 基準生活費

㊦ 別表第1 生活扶助基準 第1章

1 居宅

- (1) 基準生活費の額（月額）……（略）
- (2) 基準生活費の算定

ア 基準生活費は、世帯を単位として算定するものとし、その額は第1類の表に定める個人別の額を合算した額と第2類の表に定める額の合計額とする。

ただし世帯構成員の数が4人の世帯の基準生活費の額は、第1類の表に定める個人別の額を合算した額に0.95を乗じた額（その額に10円未満の端数が生じたときは、これを10円に切り上げるものとする。）と第2類の表に定める額の合計額とし、世帯構成員の数が5人以上の世帯の基準生活費の額は、第1類の表に定める個人別の額を合算した額に0.90を乗じた額（その額に10円未満の端数が生じたときは、これを10円に切り上げるものとする。）と第2類の表に定める額の合計額とする。

また、12月の基準生活費の額は、当該合計額に世帯構成員1人につき次の表に定める期末一時扶助

費を加えた額とする。

級地別	期末一時扶助費
	円
1級地-1	14,180
1級地-2	13,540
2級地-1	12,900
2級地-2	12,270
3級地-1	11,630
3級地-2	10,990

イ 第2類の表におけるⅠ区からⅥ区までの区分は次の表に定めるところによる。

(冬季加算地域区分)

都道府県名

地区別	Ⅰ区	Ⅱ区	Ⅲ区	Ⅳ区	Ⅴ区	Ⅵ区
	北海道	岩手県	宮城県	石川県	栃木県	その他
	青森県	山形県	福島県	福井県	群馬県	の都府
	秋田県	新潟県	富山県		山梨県	県
			長野県		岐阜県	
					鳥取県	
					島根県	

ウ 入院患者日用品費又は介護施設入所者基本生活費が算定される者の基準生活費の算定は、別に定めるところによる。

◎ 第7

2 一般生活費

(1) 基準生活費

ア 同一の月において入院患者日用品費又は介護施設入所者基本生活費と居宅基準生活費をあわせて計上するとき（保護受給中の者で入院患者日用品費又は介護施設入所者基本生活費を算定されていたものが、月の途中で退院又は退所する場合をいう。）における居宅基準生活費は、入院患者日用品費又は介護施設入所者基本生活費が計上される期間を除いた日数に応じて計上すること。

なお、保護の基準別表第1第1章の3に掲げる

施設に入所している者にかかる基準生活費と居宅基準生活費をあわせて計上するときも同様とすること。

イ 同一の月において救護施設等基準生活費（保護の基準別表第1第1章の2に掲げる施設に入所している者にかかる基準生活費をいう。以下同じ。）と居宅基準生活費をあわせて計上するときにおける居宅基準生活費は、救護施設等基準生活費が計上される期間の初日又は末日を含めた日数に応じて計上すること。

ウ 救護施設等基準生活費は、当該施設に入所した日から退所の日まで計上すること。

エ ア、イ及びウによるほか、出かせぎ等により1箇月をこえる期間他の世帯員と所在を異にする世帯員については、所在を異にするに至った日の翌日から再び所在を一にするに至った日の前日まで他の世帯員とは別に一般生活費を計上すること。

オ 入院患者に付き添う出身世帯の世帯員が病院又は診療所において生活する場合であつて、病院の管理運営方針等により病院給食又は寝具の貸与を受けなければならない事情があると認められるときは、その実費について基準生活費の算定上特別基準の設定があつたものとして取り扱って差しつかえない。

なお、病院給食の実費を認める期間中の居宅基準生活費に係る第1類の経費については、その25パーセントに相当する額を計上すること。

カ 入院患者日用品費又は介護施設入所者基本生活費が計上される期間における期末一時扶助費又は各種加算については、その期間当該被保護者が所在する地の級地基準による額を適用すること。

キ エにより別に計上する一般生活費については、その者の所在する地の級地基準による額を適用すること。

ク 救護施設等基準生活費（期末一時扶助費及び各種加算を含む。）は、当該施設所在地の級地基準により計上すること。ただし、2級地又は3級地に所在する保護施設に入所している者について、1級上の級地の基準を、特別基準の設定があつたものとして適用して差しつかえないこと。

ケ エにより他の世帯員と別に一般生活費を計上する場合、保護の基準別表第1第1章の1の第2類の表に定める額については、出身世帯員の人員の世帯に適用される額と世帯員1人の世帯に適用される額とを計上すること。

なお、サ及び第7の2の(4)のイにより居宅基準生活費を計上する場合も同様とすること。

コ 特定中国残留邦人等及びその者の配偶者と同居している世帯にかかる基準生活費は、当該特定中国残留邦人等及びその者の配偶者を同一世帯員と見なした場合に算出される当該基準生活費の額から当該特定中国残留邦人等及びその者の配偶者にかかる基準生活費の額を減じた額とする。

問(第7の1) 入院患者に、付添いのため、出身世帯の世帯員がその級地を異にする地の病院又は療養所において生活する場合は、入院患者に準じ最低生活費の認定をしてよいか。

答 当該入院患者が未成熟の子、身体障害者等であって付添いが必要であると認められ、かつ、その出身世帯員が付添いを行うときは、入院患者及び付添いを行う世帯員の基準生活費については、局長通知第7の2の(1)により、病院等の所在地の級地基準を適用して差しつかえない。

また、住宅費についても、出身世帯員が入院患者に付き添う期間中、局長通知第7の4の(1)のエ(入院患者がある場合の住宅費)を適用して差しつかえない。

問(第7の19) 最低生活費の認定にあたり、日割計算を行わなければならないときは、各月の実日数によるべきか。

答 30日を分母として日割計算をすることを原則とするが、その月の実日数に応じて日割計算を行うことが適当である場合には、実日数によること。

問(第7の28) 冬季加算を一括前渡支給してよいか。

答 生活扶助のうち冬期加算に相応する分についても、1月分以内を限度として前渡することが原則であるが、薪炭等冬季必需物資について、当該地域の

実態からみて適宜の時期に一括購入するのでなければ以後の購入が著しく困難となるような状態であれば、個々の被保護世帯において、これを他の生活需要に充当するおそれの有無等を確認し、必要やむを得ないと認められる場合は必要な額を一括前渡して差しつかえない。

問(第7の37) 12月の月の中途で保護の開始又は停止若しくは廃止があった者についての期末一時扶助費の額は日割計算しなくてよいか。

答 期末一時扶助費は12月から翌年1月にかけて引き続き保護を受ける者に対して越年資金として支給されるものである。

従って、12月中に保護を開始される者については日割計算を行うことなく支給するものである。また、12月中に保護を停止又は廃止される者については支給しないものである。(この場合すでに支給済であれば、法第80条を適用すべき場合を除き全額返還させることとなる。)

問(第7の66) 短期入所生活介護又は短期入所療養介護を利用する場合の基準生活費の算定はどうすべきか。

答 居宅から1ヶ月を超えて短期入所生活介護又は短期入所療養介護(以下この間において「短期入所」という。)を利用する場合には、利用開始日の属する月の翌月(利用開始日が月の初日であるときは当該月)から、介護施設入所者に適用される介護施設入所者基本生活費及び加算に当該施設に食費として支払うべき額を加えた額を算定すること。

なお、利用期間が1ヶ月以内の場合については、介護施設入所者基本生活費の算定は要しないことから、一般生活費の認定の変更(各種加算の額の変更を含む。)を要しないものとする。

この場合、1ヶ月を超えるか否かは、居宅介護支援計画により予め確認するものとし、月の中途で計画に変更があった場合は、直ちに基準生活費を計上すること。

また、医療機関に入院しており、入院患者日用品費が算定されている者が退院し、そのまま短期入所を利用する場合には、入所日から入院患者日用品費及び加算を計上せず、介護施設入所者基本生活費

及び加算に当該施設に食費として支払うべき額を加えた額を算定すること。

問（第7の71） ケアハウスは、生活保護法による指定介護機関の指定の対象とされているが、新規に被保護者が入所することは可能か。また、入所に際し支払う必要がある保証金（敷金等に相当するものに限る。）を住宅扶助から支給することとして差しつかえないか。

答 ケアハウスについては、管理費（家賃相当の利用料をいう。）が住宅扶助基準額以下であって事務費及び生活費が生活扶助費により対応可能であれば、新規に被保護者が入所することは可能であり、入所に際し支払う必要がある保証金（敷金等に相当するものに限る。）については、局長通知第7の4の(1)のイにいう「転居に際し、敷金等を必要とする場合」であれば、敷金等に係る住宅扶助の基準額の範囲内で必要な額を認定して差しつかえない。

また、ケアハウス入所中の基準生活費については、居宅の生活扶助基準を適用し、生活費と事務費については生活扶助により対応し、管理費については、住宅扶助の基準額の範囲内で必要な実費を住宅扶助として認定することとなる。

問（第7の79）保護の基準別表第1第1章の1の(2)のイの規定により、居宅における世帯構成員の数が4人以上いる場合は、個人別の第1類の額を合算した額に一定の率（以下「逓減率」という。）を乗じて世帯の第1類の額を算定することとされているが、次に掲げる者の第1類の額を含めた合計額について逓減率を適用するのか。

- (1) 病院又は診療所において給食を受けないため、第1類の額に75パーセントを乗じた額が算定されている入院患者
- (2) 出かせぎ等により1箇月をこえる期間他の世帯員と所在を異にする者で、他の世帯員とは別に一般生活費を計上している者

答 逓減率の適用にあたっては、(1)及び(2)に該当する者は居宅における世帯構成員の数には含めないも

のとする。

したがって、これらの者を除いてもなお居宅における世帯構成員が4人以上いる場合について、(1)及び(2)に該当する者の第1類の額を除いた合計額に逓減率を適用することとなる。

⑤ 別表第1第1章

2 救護施設等

(1) 基準生活費の額（月額）……（略）

(2) 基準生活費の算定

ア 12月の基準生活費の額は、次の表に定める期末一時扶助費の額を加えた額とする。

級 地 別	期末一時扶助費
	円
1 級 地	5,070
2 級 地	4,610
3 級 地	4,160

イ 表におけるⅠ区からⅥ区までの区分は、1の(2)のイの表に定めるところによる。

3 職業能力開発校附属宿泊施設等に入所又は寄宿している者についての特例

次の表の左欄に掲げる施設に入所又は寄宿している者（特別支援学校に附属する寄宿舎に寄宿している者にあつては、これらの学校の高等部の別科に就学する場合に限る。）に係る基準生活費の額は、1の規定にかかわらず、それぞれ同表の右欄に掲げる額とする。

施 設	基準生活費の額	
	基準月額	地区別冬季加算額及び期末一時扶助費の額
職業能力開発促進法（昭和44年法律第64号）にいう職業能力開発校、障害者職業能力開発校又はこれらに準ずる施設に附属する宿泊施設	食費として施設に支払うべき額と入院患者日用品費の基準額の合計額	地区別冬季加算額は、2の(1)のイの表に定めるところにより、期末

<p>特別支援学校に附属する 寄宿舎 障害者自立支援法（平成 17年法律第123号）附則 第48条の規定によりなお 従前の例により運営をす ることができることとさ れた同条に規定する精神 障害者社会復帰施設（以 下「旧法精神障害者社会 復帰施設」という。）</p>		<p>一時扶助費 の額は、2 の(2)のアの 表に定める ところによ る。</p>
<p>障害者自立支援法附則第 58条第1項の規定により なお従前の例により運営 をすることができること とされた同項に規定する 知的障害者援護施設（以 下「旧法知的障害者援護 施設」という。）（同法附 則第52条の規定による改 正前の知的障害者福祉法 （昭和35年法律第37号） 第21条の8に規定する知 的障害者通勤寮（以下「旧 法知的障害者通勤寮」と いう。）に限る。）</p>	<p>食費及び居 住に要する 費用として 施設に支払 うべき額と 入院患者日 用品費の基 準額の合計 額</p>	
<p>国立身体障害者リハビリ テーションセンター 国立光明寮 国立保養所 独立行政法人国立重度知 的障害者総合施設のぞみ の園が設置する施設 障害者自立支援法附則第 41条第1項の規定により なお従前の例により運営 をすることができること とされた同項に規定する 身体障害者更生援護施設 （以下「旧法身体障害者</p>	<p>食費及び居住に要する 費用として施設に支払 うべき額と入院患者日 用品費の額の合計額</p>	

<p>更生援護施設」という。） 旧法知的障害者援護施設 （旧法知的障害者通勤寮 を除く。） 障害者自立支援法第5条 第12項に規定する障害者 支援施設 児童福祉施設最低基準 （昭和23年厚生省令第63 号）にいう知的障害児施 設（自閉症児施設を除 く。）、第二種自閉症児施 設、盲児施設、ろうあ児 施設、肢体不自由児療護 施設</p>	
<p>児童福祉施設最低基準に いう第一種自閉症児施 設、肢体不自由児施設（肢 体不自由児通園施設及び 肢体不自由児療護施設を 除く。）、重症心身障害児 施設 児童福祉法（昭和22年法 律第164号）にいう指定 医療機関</p>	<p>入院患者日用品費の額</p>

- ⑤ 第7-2-1)
- コ 次に掲げる施設は、保護の基準別表第1第1章の3の表中の「これらに準ずる施設」として取り扱うこと。
- 東京都心身障害者職能開発センター職業訓練部門
- サ 保護の基準別表第1第1章の3の表中、次に掲げる施設の入所者については、「食費として施設に支払うべき額」は、月額42,600円の範囲内において必要な額とし、当該入所者が給食を受けない場合は、これに替えて居宅基準生活費の第1類の経費に75パーセントを乗じて得た額及び居宅基準生活費の第2類の表に定める基準額に20パーセントを乗じて得た額の合計額を計上すること。

また、利用料(室料と同等の内容のものに限る。)を施設に支払う必要がある場合には、月額 25,000 円の範囲内において必要な額を計上して差しつかえないこと。

障害者自立支援法(平成 17 年法律第 123 号)附則第 48 条の規定によりなお従前の例により運営をすることができることとされた同条に規定する精神障害者社会復帰施設(精神障害者福祉ホームを除く。)

(2) 入院患者の基準生活費の算定

㊦ 別表第 1 第 3 章 - 1 入院患者日用品費

(1) 基準額及び加算額(月額)

基準額	地区別冬季加算額(11月から3月まで)		
	I区及び II区	III区及び IV区	V区及び VI区
23,150円以内	3,600円	2,110円	1,000円

(2) 入院患者日用品費は、次に掲げる者について算定する。

- ア 病院又は診療所(介護療養型医療施設を除く。以下同じ。)に1箇月以上入院する者
- イ 救護施設、更生施設、内部障害者更生施設又は老人福祉法にいう養護老人ホーム若しくは特別養護老人ホームから病院又は診療所に入院する者
- ウ 介護施設から病院又は診療所に入院する者

(3) (1)の表におけるI区からVI区までの区分は、第1章の1の(2)のイの表に定めるところによる。

㊦ 第7-2

(3) 入院患者の基準生活費の算定について

- ア 病院又は診療所(介護療養型医療施設を除く。以下同じ。)において給食を受ける入院患者については、入院患者日用品費が計上される期間に限り基準生活費は算定しないこと。ただし、12月における期末一時扶助費は算定するものとする。
- イ 入院患者日用品費が算定される入院患者が病院又は診療所において給食を受けない場合の基準生活費

の額は、居宅基準生活費の第1類の経費に75パーセントを乗じて得た額及び居宅基準生活費の第2類の表に定める基準額に20パーセントを乗じて得た額の合計額(12月においては、当該合計額に期末一時扶助費を加えた額)とすること。

ウ 保護受給中の者について、入院期間が1箇月未満であるため入院患者日用品費を算定しない場合は、一般生活費の認定の変更(各種加算の額の変更を含む。)を要しないものとする。

エ 保護受給中の者が月の途中で入院し、入院患者日用品費を算定する場合でオ又はカに該当しないときは、入院患者日用品費は入院日の属する月の翌月の初日から計上すること。この場合、入院月の一般生活費の認定の変更(各種加算の額の変更を含む。)は要しないものとする。

オ 保護の開始された日又は保護を停止されていて再び開始された日に入院している場合は、その日から入院患者日用品費を計上すること。

カ 救護施設、更生施設、内部障害者更生施設、養護老人ホーム若しくは特別養護老人ホーム又は介護施設に入所している者が入院した場合は、入院の日から入院患者日用品費を計上すること。

キ 入院患者日用品費が算定されている入院患者が退院又は死亡した場合は、入院患者日用品費は退院等の日まで計上することとし、一般生活費の認定の変更(各種加算の額の変更を含む。)を日割計算により行うこと。ただし、退院と同時に介護施設に入所する場合はこの限りでない。

ク 入院患者日用品費は、原則として保護の基準別表第1第3章の1の(1)の基準額の全額(精神活動の減退等により日用品の需要の実態からその全額を必要としないもので、その状態が相当期間持続すると認められるものについては、基準額の85パーセントを標準として必要な額)を計上すること。

問(第7の27) 児童福祉法第27条第3項の規定により、都道府県が知的障害児施設、盲ろうあ児施設、肢体不自由児施設、重症心身障害児施設への入所措置を行った者について、入院患者日用品費を計上してよろしいか。

答 児童福祉法第 27 条第 3 項の規定により、都道府県が入所措置を行った者については、児童福祉法の措置として日用品の給付が行われるので、当該児童にかかる日用品費支弁額の月額を収入認定することになるが、事務処理上は入院患者日用品費の基準額とその支弁額の月額との差額を計上することとして差しつかえない。

(3) 介護施設入所者の基準生活費の算定

㊦ 別表第 1 第 3 章 - 2 介護施設入所者基本生活費

(1) 基準額及び加算額（月額）

基準額	地区別冬季加算額(11月から3月まで)		
	I区及び II区	III区及び IV区	V区及び VI区
9,890円以内	3,600円	2,110円	1,000円

(2) 介護施設入所者基本生活費は、介護施設に入所する者について算定する。

(3) (1)の表におけるI区からVI区までの区分は、第1章の1の(2)のイの表に定めるところによる。

㊦ 第 7 - 2

(4) 介護施設入所者基本生活費の算定について

ア 介護施設入所者基本生活費が算定される者については、基準生活費は算定しないこと。ただし、12月における期末一時扶助は算定するものとする。

イ 保護受給中の者が月の途中で介護施設に入所したときは、介護施設入所者基本生活費は入所日の属する月の翌月（入所の日が月の初日のときは当該月）から計上すること。この場合、入所月の一般生活費の認定の変更（各種加算の額の変更を含む。）は要しないものとする。なお、入院患者日用品費が算定されている入院患者等が医療機関等から介護施設に入所した場合も同様であること。

ウ 保護の開始された日又は保護を停止されていて再び開始された日に介護施設に入所している場合は、その日から介護施設入所者基本生活費を計上すること。

エ 救護施設、更生施設、内部障害者更生施設、養護老人ホーム又は特別養護老人ホームに入所している者が介護施設に入所した場合には、入所の日から介護施設入所者基本生活費を計上すること。

オ 介護施設入所者が退所又は死亡した場合は、介護施設入所者基本生活費は退所等の日まで計上することとし、一般生活費の認定の変更（各種加算の額の変更を含む。）を日割り計算により行うこと。

ただし、介護施設を退所し、その日から病院又は診療所に入院する場合には、退所の日における介護施設入所者基本生活費については、計上を要しないこと。

カ 介護施設入所者基本生活費は、原則として保護の基準別表第 1 第 3 章の 3 の (1) の基準額の全額を計上すること。

(4) 加 算

ア 妊産婦加算

㊦ 別表第 1 第 2 章 - 1 妊産婦加算

(1) 加算額（月額）

級 地 別	妊 婦		産 婦
	妊娠 6 か月 未 満	妊娠 6 か月 以 上	
	円	円	円
1 級 地 及 び 2 級 地	9,140	13,810	8,490
3 級 地	7,770	11,740	7,220

(2) 妊婦についての加算は、妊娠の事実を確認した日の属する月の翌月から行う。

(3) 産婦についての加算は、出産の日の属する月から行い、期間は6箇月を限度として別に定める。

(4) (3)の規定にかかわらず、保護受給中の者については、その出産の日の属する月は妊婦についての加算を行い、翌月から5箇月を限度として別に定めるところにより産婦についての加算を行う。

(5) 妊産婦加算は、病院又は診療所において給食を受けている入院患者及び内部障害者更生施設に入所している者については、行わない。

㊦ 第 7 - 2

(2) 加算

ア 妊産婦加算

(7) 妊産婦加算の計上は、届出によって行うものとし、妊婦であることの認定及び妊娠月数の認定は、母子健康手帳又は保護の実施機関の指定する医師若しくは助産師の診断により行うこと。

(4) 保護受給中の者につき、妊娠月数が月の中途で変わる場合にはその翌月から妊婦加算の額の変更を行うこと。

(ウ) 産婦加算を行う期間は、専ら母乳によって乳児をほ育する産婦については6箇月間とし、その他の者については3箇月間とすること。

(エ) (ウ)の規定にかかわらず、保護受給中の者が出産したときは、当該月は妊婦加算を行い、翌月から5箇月間（専ら母乳によって乳児をほ育する産婦以外の者については2箇月間）を限度として産婦加算を行うこと。

(オ) 妊娠4箇月以後において人工妊娠中絶を行った場合及び死産（妊娠4箇月以後の死児の出産）の場合には、3箇月間（保護受給中の者については翌月から2箇月間）産婦加算を行うこと。

(カ) 妊婦又は産婦から保護の開始の申請があった場合には、申請月においても加算を行うこと。

問（第7の54） 局長通知第7の2の(2)のアの(ウ)及び(エ)にいう「専ら母乳によって」とは、どの程度の場合をいうのか。

答 「専ら母乳によって」いる場合とは、当該保育されている乳児について、人工栄養に依存する率が20%未満の場合である。

なお、人工栄養に依存する率は、乳児を養育する者の申立てを基礎として、保護の実施機関の指定する医師、助産師又は保健師の意見をきき、保護の実施機関が決定すること。また、人工栄養に依存する率の変動が予想されるときは、随時、確認を行うこと。

イ 老齢加算

㊦ 別表第1第2章-2老齢加算 削除

ウ 母子加算

㊧ 別表第1第2章-3母子加算

(1) 加算額（月額）

		児童1人	児童が2人の場合に 加える額	児童が3人以上1人を 増すごとに加える額
		円	円	円
在宅者	1級地	7,750	610	310
	2級地	7,210	570	290
	3級地	6,670	540	270
入院患者又は介護施設若しくは社会福祉施設入所者		6,460	520	260

(注) 社会福祉施設とは保護施設、旧法身体障害者更生援護施設、旧法精神障害者社会復帰施設、旧法知的障害者援護施設、障害者自立支援法第5条第12項に規定する障害者支援施設、児童福祉施設最低基準にいう知的障害児施設（自閉症児施設を除く。）、第二種自閉症児施設、盲児施設、ろうあ児施設若しくは肢体不自由児療護施設又は老人福祉法（昭和38年法律第133号）にいう老人福祉施設をいい、介護施設とは介護保険法（平成9年法律第123号）にいう介護保険施設をいうものであること（以下同じ）。

(2) 母子加算は、父母の一方若しくは両方が欠けているか又はこれに準ずる状態にあるため、父母の他方又は父母以外の者が児童（15歳に達する日以後の最初の3月31日までの間にある者又は20歳未満で4の(2)に掲げる者をいう。）を養育しなければならない場合に当該養育に当たる者について行う。ただし、当該養育に当たる者が父又は母である場合であって、その者が子の養育に当たることができる者と婚姻関係（婚姻の届出をしていないが事実上婚姻と同様の

事情にある場合を含む。)にあり、かつ、同一世帯に属するときは、この限りではない。

⑤ 第7-2-(2)

ウ 母子加算

(7) 保護の基準別表第1第2章の3にいう「これに準ずる状態にある」場合とは、次に掲げる場合のように、父母の一方又は両方が子の養育にあたることができない場合をいうものであること。

- a 父母の一方又は両方が常時介護又は監護を要する身体障害者又は精神障害者である場合
- b 父母の一方又は両方が引き続き1年以上にわたって入院中又は法令により拘禁されている場合
- c 父母の一方又は両方がおおむね1年以上(船舶の沈没等死亡の原因となるべき危難に遭遇したときは、その危難が去った後おおむね3箇月以上)にわたって行方不明の場合又は父母の一方又は両方が子を引き続き1年以上遺棄していると認められる場合

(4) 保護受給中の者について、月の途中で新たに母子加算を認定し、又はその認定を変更し若しくはやめるべき事由が生じたときは、それらの事由の生じた月の翌月から加算の認定変更を行うこと。

(7) 母子加算の認定を受けている者について、月の途中で入院入所又は退院退所に伴い、基準生活費の認定変更を行う場合は、これとあわせて加算額の認定変更も行うこと。

なお、居宅基準生活費と救護施設等基準生活費をあわせて計上する場合には、救護施設等基準生活費が計上される間を除いた期間について在宅者にかかる加算の額を計上すること。

(±) 児童のみで構成されている世帯については、原則として母子加算の適用は認められないが、扶養義務者又は知人等による養育が全くなされないため、その世帯における兄又は姉等が弟妹等の養育に当たらなければならない場合は、その兄又は姉等につき母子加算を受ける者に準ずるものとして母子加算の額(ただし、加算を受ける者については、児童として取り扱わないこと。)を加算して差しつかえないこと。

(4) 母子加算を受ける者が長期(おおむね1年以上)

にわたって入院中の場合であっても、その者が精神疾患で入院している等のため全く児童の養育に当たることができないとき又は他に養育に当たるものがあるときのほかは、その者につき加算を適用して差しつかえないこと。

問(第7の58) 保護の基準別表第1第2章の3の(1)の(注)にいう社会福祉施設には、身体障害者福祉工場及び軽費老人ホーム(B型)は含まれないものと解してよいか。

答 お見込みのとおりである。

問(第7の3) 父が障害の状態にあるため母等が児童扶養手当を受けている場合は、すべて母子加算の適用があると考えてよいか。

答 児童扶養手当法第4条第1項にいう別表に定める程度の障害の状態にある者は、局長通知第7の2の(2)のウの(7)にいう「父母の一方又は両方が常時介護又は監護を要する身体障害者又は精神障害者である場合」に該当し、又は準ずるものとして取り扱って差しつかえない。

問(第7の4) 母子加算をうけていた母等が入院し、入院期間が長期になる見込みの場合であって、残存世帯に養育にあたる者があるとき、母等に対する母子加算をやめ、現に養育している者に加算してよいか。

答 母子加算をうけていた者が長期(1年以上)入院することが明らかな場合であって、出身世帯員の中に児童の養育にあたる者があるときは、その者に母子加算を加算して差しつかえない。

問(第7の58) 保護の基準別表第1第2章の3の(1)のアの(注)にいう社会福祉施設には、身体障害者福祉工場及び軽費老人ホーム(B型)は含まれないものと解してよいか。

答 お見込みのとおりである。

問(第7の59) 転出した児童及び児童福祉施設に入所している児童については、母子加算の対象とはならないと解してよいか。

答 お見込みのとおりである。

エ 障害者加算

⑤ 別表第1第2章-4障害者加算

(1) 加算額(月額)

		(2)のAに該当する者	(2)のイに該当する者
		円	円
在宅者	1級地	26,850	17,890
	2級地	24,970	16,650
	3級地	23,100	15,400
入院患者又は介護施設若しくは社会福祉施設入所者		22,340	14,890

(2) 障害者加算は、次に掲げる者について行う。

ア 障害等級表の1級若しくは2級又は国民年金法施行令別表に定める1級のいずれかに該当する障害のある者(症状が固定している者及び症状が固定してはいるが障害の原因となった傷病について初めて医師又は歯科医師の診療を受けた後1年6月を経過した者に限る。)

イ 障害等級表の3級又は国民年金法施行令別表に定める2級のいずれかに該当する障害のある者(症状が固定している者及び症状が固定してはいるが障害の原因となった傷病について初めて医師又は歯科医師の診療を受けた後1年6月を経過した者に限る。)。ただし、アに該当する者を除く。

(3) 特別児童扶養手当等の支給に関する法律施行令(昭和50年政令第207号)別表第1に定める程度の障害の状態にあるため、日常生活において常時の介護を必要とする者(児童福祉法に規定する肢体不自由児施設、老人福祉法に規定する養護老人ホーム及び特別養護老人ホーム並びに障害児福祉手当及び特別障害者手当の支給に関する省令(昭和50年厚生省令第34号)第1条に規定する施設に入所している者を除く。))については、別に14,380円を算定するものとする。

(4) (2)のAに該当する障害のある者であって当該障害により日常生活のすべてについて介護を必要とするものを、その者と同一世帯に属する者が介護する場

合においては、別に12,060円を算定するものとする。この場合においては、(5)の規定は適用しないものとする。

(5) 介護人をつけるための費用を要する場合においては、別に69,960円の範囲内において必要な額を算定するものとする。

⑤ 第7-2-2(2)

エ 障害者加算

(7) 障害の程度の判定は、原則として身体障害者手帳、国民年金証書、特別児童扶養手当証書又は福祉手当認定通知書により行うこと。

(4) 身体障害者手帳、国民年金証書、特別児童扶養手当証書又は福祉手当認定通知書を所持していない者については、障害の程度の判定は、保護の実施機関の指定する医師の診断書その他障害の程度が確認できる書類に基づき行うこと。

(7) 保護受給中の者について、月の途中で新たに障害者加算を認定し、又はその認定を変更し若しくはやめるべき事由が生じたときは、それらの事由の生じた翌月から加算に関する最低生活費の認定変更を行うこと。

ただし、保護の基準別表第1第2章の4の(5)にいう障害者加算を行うべき者については、その事由の生じた日から日割計算により加算の認定変更を行って差しつかえないこと。

(4) 障害者加算の認定を受けている者について、月の中途の入院入所又は退院退所に伴い、基準生活費の認定変更を行う場合は、これとあわせて加算額の認定変更も行うこと。

なお、居宅基準生活費と救護施設等基準生活費をあわせて計上する場合においては、救護施設等基準生活費が計上される間を除いた期間について在宅者にかかる加算の額を計上すること。

(4) 介護人をつけるための費用が、保護の基準別表第1第2章の4の(5)によりがたい場合であって、特別児童扶養手当等の支給に関する法律施行令別表第1に定める程度の障害の状態にあり、日常起居動作に著しい障害のため真に他人による介護を要すると認められるときは、104,960円の範囲内において当該年

度の特別基準の設定があったものとして必要な額を認定して差しつかえないこと。

問 (第7の41) 障害等級表の1級、2級又は3級に該当し、身体障害者手帳の交付を受けている者は、障害者加算及び高齢加算の認定に当たり「症状が固定している者」に該当するものとして取り扱ってよいか。

答 お見込みのとおりである。

問 (第7の65) 局長通知第7の2の(2)のエの(4)にいう「障害の程度が確認できる書類」には、精神障害者保健福祉手帳が含まれるものと解して差し支えないか。

答 精神障害者保健福祉手帳の交付年月日又は更新年月日が障害の原因となった傷病について初めて医師の診療を受けた後1年6月を経過している場合に限り、お見込みのとおり取り扱って差し支えない。この場合において、同手帳の1級に該当する障害は国民年金法施行令(昭和34年政令第184号)別表に定める1級の障害と、同手帳の2級に該当する障害は同別表に定める2級の障害とそれぞれ認定するものとする。

なお、当該傷病について初めて医師の診療を受けた日の確認は、都道府県精神保健福祉主管部局において保管する当該手帳を発行した際の医師の診断書(写しを含む。以下同じ。)を確認することにより行うものとする。

おって、市町村において当該手帳を発行した際の医師の診断書を保管する場合は、当該診断書を確認することにより行うこととして差し支えない。

問 (第7-87) 告別表第1第2章-4-(4)に定める家族介護料は、同居の特定中国残留邦人等又はその者の配偶者が被保護者を介護をしている場合にも算定できるものと考えてよいか。

答 お見込みのとおりである。

オ 介護施設入所者加算

㊦ 別表第1第2章-5 介護施設入所者加算

介護施設入所者加算は、介護施設入所者基本生活費が算定されている者であって、母子加算又は障害者加算が算定されていない者について行い、加算額(月額)は9,890円の範囲内の額とする。

㊦ 第7-2-(2)

オ 介護施設入所者加算

月の途中で新たに介護施設入所者加算を認定し、又はその認定をやめるべき事由が生じたときの加算の認定又は認定変更は、(4)に定める介護施設入所者基本生活費の算定の例によること。

カ 在宅患者加算

㊦ 別表第1第2章-6 在宅患者加算

(1) 加算額(月額)

級 地 別	加 算 額
	円
1級地及び2級地	13,290
3級地	11,300

(2) 在宅患者加算は、次に掲げる在宅患者であって現に療養に専念しているものについて行う。

ア 結核患者であって現に治療を受けているもの及び結核患者であって現に治療を受けていないが、保護の実施機関の指定する医師の診断により栄養の補給を必要とすると認められるもの

イ 結核患者以外の患者であって3箇月以上の治療を必要とし、かつ、保護の実施機関の指定する医師の診断により栄養の補給を必要とすると認められるもの

(3) 在宅患者加算は、(2)に掲げる者であって、内部障害者更生施設に入所しているものについては、行わない。

㊦ 第7-2-(2)

カ 在宅患者加算

(7) 給食のない病院等に入院又は入所している患者については、在宅療養者に準じて在宅患者加算を行う

て差しつかえないこと。

(イ) 結核患者であって現に治療を受けていない場合における加算認定更新は、最長6箇月の期間ごとに行うこと。

(ウ) 保護受給中の者について、月の途中で新たに在宅患者加算を認定し、又はその認定をやめるべき事由が生じたときは、それらの事由が生じた月の翌月から加算の認定変更を行うこと。

問(第7の6) 職業能力開発校在学中の者が現に3箇月以上治療を要する疾病にかかった場合、在宅患者加算を認定してよいか。
答 職業能力開発校在学中の者であっても、在宅患者加算の要件をみたす場合には在宅患者加算を加算して差しつかえない。

キ 放射線障害者加算

㊦ 別表第1第2章-7放射線障害者加算

放射線障害者加算は、次に掲げる者について行い、その額は、(1)に該当する者にあつては月額42,660円、(2)に該当する者にあつては月額21,330円とする。

(1) ア 原子爆弾被爆者に対する援護に関する法律(平成6年法律第117号)第11条第1項の認定を受けた者であつて、同項の認定に係る負傷又は疾病の状態にあるもの(同法第24条第2項に規定する都道府県知事の認定を受けた者に限る。)

イ 放射線(広島市及び長崎市に投下された原子爆弾の放射線を除く。以下(2)において同じ。)を多量に浴びたことに起因する負傷又は疾病の患者であつて、当該負傷又は疾病が放射線を多量に浴びたことに起因する旨の厚生労働大臣の認定を受けたもの

(2) ア 原子爆弾被爆者に対する援護に関する法律第11条第1項の認定を受けた者(同法第25条第2項に規定する都道府県知事の認定を受けた者であつて(1)のイに該当しないものに限る。)

イ 放射線を多量に浴びたことに起因する負傷又は疾病の患者であつた者であつて、当該負傷又は疾

病が放射線を多量に浴びたことに起因する旨の厚生労働大臣の認定を受けたもの

㊦ 第7-2-(2)

キ 放射線障害者加算

(7) 保護受給中の者について、月の途中で新たに放射線障害者加算を認定し、又はその認定を変更すべき事由が生じたときは、それらの事由が生じた月の翌月から加算の認定変更を行うこと。

(4) 保護の基準別表第1第2章の7の(1)のイ及び(2)のイに規定する厚生労働大臣の認定については、次に掲げる事項を記載した申請書に、保護の実施機関の指定する医師の意見書及び当該負傷又は疾病に係る検査成績を記載した書類並びに当該世帯の保護適用状況を示す書類を添えて、厚生労働大臣に提出すること。

- a 認定を受けようとする患者の氏名、性別、生年月日、居住地及び職業
- b (1)のイ又は(2)のイの別
- c 負傷又は疾病の名称
- d 放射線を浴びたことに起因すると思われる自覚症状の経過
- e 放射線を浴びたことに起因すると思われる負傷又は疾病について受けた医療の概要
- f 放射線を浴びた当時の状況並びに浴びた放射線の種類及び量

ク 児童養育加算

㊦ 別表第1第2章-8児童養育加算

児童養育加算は、児童の養育にあたる者について行い、その加算額(月額)は、児童1人につき次の表に掲げる額とする。

第1子及び第2子	3歳に満たない児童(月の初日に生まれた児童については、出生の日から3年を経過しない児童とする。)	10,000円
	3歳以上の児童(月の初日に生まれた児童については、出生の日から3年を経過した児童とする。)であ	5,000円

	つて12歳に達する日以後の最初の3月31日までの間にあるもの	
第3子以降	小学校修了前の児童(12歳に達する日以後の最初の3月31日までの間にある児童をいう。)	10,000円

⑤ 第7-2-(2)

ク 児童養育加算

(7) 保護受給中の者について、月の途中で新たに児童養育加算を認定し、又はその認定を変更し若しくはやめるべき事由が生じたときは、それらの事由が生じた月の翌月から加算の認定変更を行うこと。

(イ) 児童のみで構成されている世帯において、その世帯における兄又は姉等が弟妹等の養育にあたる場合、その養育にあたる者については児童として取り扱わないこと。

問(第7の60) 転出した児童及び児童福祉施設に入所している児童については、児童養育加算の対象とはならないと解してよいか。

答 お見込みのとおりである。

ケ 介護保険料加算

⑥ 別表第1第2章-9 介護保険料加算

介護保険料加算は、介護保険の第1号被保険者であって、介護保険法第132条の規定する普通徴収の方法によって介護保険料を納付する義務を負う者に対して行い、その加算額は、当該者が加入する保険者へ納付すべき介護保険料の実費とする。

⑤ 第7-2-(2)

ケ 介護保険料加算

(7) 介護保険料加算は、普通徴収にかかる保険料の納期において、納付すべき実費を認定すること。

(イ) 月の途中で新たに介護保険料加算を認定し又は認定をやめるべき事由が生じたときであっても日割り計算を行う必要はないこと。

問(第7の67) 保護開始前の滞納分に係る保険料について介護保険料加算の対象とすることは認められるか。

答 認められない。

問(第7の72) 納期が年4回等少ない市町村において、納付月の翌月以降に保護が廃止となった場合、既に支給した介護保険料加算をどう取り扱うべきか。

答 介護保険料加算は、納期に納入すべき介護保険料の実費に相当する生活需要を保障するものであり、保護が廃止されたからといって、保護決定時の介護保険料加算の変更は要しない。

問(第7の73) 養護老人ホームに入所する無年金者等介護保険料を負担する収入がない者から生活保護の申請があった場合、要保護者として介護保険料分の扶助費を支給するのか。

答 養護老人ホーム入所者で費用徴収基準の第1階層に区分される者については、介護保険料加算の内容に相当する生活需要は措置を受けている限り、全て施設入所の処遇(措置費)のうちに含まれることとされている。

なお、養護老人ホーム入所者で医療扶助のみを受けている者についても、介護保険料加算を計上する必要はない。

問(第7の74) 被保護者が被保険者資格を喪失し、資格喪失の日の属する月の前月までの月割りをもって介護保険料が賦課されたため、当該年度における介護保険料の過払い分が還付された。この場合、還付金をどのように取り扱うべきか。

答 介護保険料加算は、各納期に納入すべき介護保険料の実費に相当する需要について加算を行うものである。

介護保険料の還付金が生じたときの取扱いは、還付金が被保険者の納付した介護保険料と当該年度の介護保険料額(当該被保険者の被保険者資格を有する期間に応じて賦課される介護保険料の額)との差を還付するものであり、過去に遡って各納期の介護保険料額を変更するものではないことから、介護保険料加算についても過去に遡っての変

更は必要なく、法第63条による返還の問題は生じない。したがって、支給された時点における収入として取り扱うこと。

問(第7の68) 他の市町村から転入してきた被保護者が、転入前の市町村から月割賦課による未納分(滞納したものを含まない)の保険料の請求されている場合は、介護保険料加算を認定して差し支えないか。また、加算を行うのは転出前の保護の実施機関か、転出後の保護の実施機関か。

答 請求額のうち、転入前の生活保護受給期間に当たった額を限度として、加算を認定して差し支えない。この場合、転出後の保護の実施機関において加算すること。

なお、逆に転入前の市町村から過納分の還付金があった場合には、転出後の保護の実施機関において当該還付金を収入認定すること。

問(第7の75) 被保護者が死亡したことで、その年度の介護保険料に過払いが生じ、遺族に対して還付金が支給された場合、どう取り扱うべきか。

答 当該還付金については、遺族に対し支給されたものであり、当該遺族が保護を受給している場合には、当該世帯の収入として認定することとなるが、そうでない場合には、収入認定及び返還の問題は生じない。

問(第7の76) 介護保険料の納付月に介護保険の第1号被保険者である被保護者が亡くなった場合、既に支払った保険料額が亡くなった月の前月までの月割りをもって賦課された保険料に満たなければ、介護保険の保険者から当該被保護者の配偶者又は当該世帯の世帯主に対し、亡くなった月の前月までの保険料を請求されることとなるが、これらの配偶者等に対し介護保険料加算を認定して差し支えないか。

答 お見込みのとおり取り扱って差し支えない。

コ 重複調整等

㊦ 別表第1第2章-10重複調整等

母子加算又は障害者加算について、同一の者が2以上の加算事由に該当する場合には、最も高い一の加算額(同

額の場合にはいずれか一方の加算額)を算定するものとし、相当期間にわたり加算額の全額を必要としないものと認められる場合には、当該加算額の範囲内において必要な額を算定するものとする。ただし、母子加算のうち児童が2人以上の場合に児童1人につき加算する額及び障害者加算のうち4の(4)又は(5)に該当することにより行われる障害者加算額は、重複調整等を行わないで算定するものとする。

3 臨時的一般生活費

(1) 被服費

㊦ 第7-2

(5) 被服費

ア 被保護者が次のいずれかに該当する場合であつて、次官通知第7に定めるところによって判断したうえ、必要と認めるときは、それぞれに定める額の範囲内において特別基準の設定があつたものとして被服費を計上して差しつかえないこと。

なお、(7)から(9)までの場合においては、現物給付を原則とすること。

(7) 保護開始時及び長期入院・入所後退院・退所した場合において、現に使用する布団類が全くないか又は全く使用に堪えなくなり、代替のものが無い場合

区 別	金 額
再生によることができる場合	1組につき 12,400 円以内
新規に購入を必要とする場合	1組につき 17,900 円以内

(4) 保護開始時及び長期入院・入所後退院・退所した場合において、現に着用する被服(平常着)が全くないか若しくは全く使用に堪えない状況にある者又は学童服について特別の需要があると実施機関が認めた者の場合

1人当たり **12,900** 円以内

問(第7の61) 局長通知第7の2の(5)の(イ)にいう「学童服について特別の需要があると実施機関

「が認められた者」とはどのような場合をいうのか。

答 学齢期の児童については、活動が活発な一方、成長が著しいため、学童服等が自然消耗前に使用不能となることから、入学準備金支給対象時から3年を経過した進級時にある児童（この間局長通知第7の2の(5)のAの(イ)による被服費の支給を受けた者を除く。）及び新たに転入する学校において校則等により制服が定められているため、当該学校の児童の全員が制服を着用しており、従前の被服では規格等が異なるため、新たに制服を購入する必要があると認められる児童に限り、認められるものであること。

(ウ) 災害にあい、災害救助法が発動されない場合において、当該地方公共団体等の救護をもってしては災害によって失った最低生活に直接必要な布団類、日常着用する被服をまかなうことができない場合

世帯人員別	金額	
	夏季（4月から9月まで）	冬季（10月から3月まで）
2人まで	<u>18,200</u> 円以内	<u>32,600</u> 円以内
4人まで	<u>34,300</u> 円以内	<u>55,200</u> 円以内
5人	<u>44,300</u> 円以内	<u>69,900</u> 円以内
6人以上1人を増すごとに加算する額	6,700円以内	<u>9,700</u> 円以内

(エ) 出産を控えて新生児のための寝具、産着、おむつ等を用意する必要がある場合

47,200円以内

(オ) 入院を必要とする者が入院に際し、寝巻又はこれに相当する被服が全くないか又は使用に堪えない場合

3,900円以内

(カ) 常時失禁状態にある患者（介護施設入所者を除く。）等が紙おむつ等を必要とする場合

月額 22,500円以内

問（第7の42） 常時失禁状態にある患者等が布おむつ、貸おむつ又はおむつの洗濯代が必要と認められる場合は、その費用を月額 22,500円の範囲内で支給してよいか。

答 お見込みのとおり取り扱って差しつかえない。

問（第7の69） 短期入所生活介護又は短期入所療養介護を利用している要介護（支援）者のおむつ代は、利用日数に応じて減額した額を認定すべきか。

答 短期入所生活介護又は短期入所療養介護の利用が月の2分の1を超える場合には、当該月のおむつ代は基準額に利用日数の割合に応じた額を減じて算定することとし、それ以外は基準額の範囲内で実費を計上して差し支えない。

イ 布団類の支給にあたっては、その世帯の世帯人員、世帯構成、世帯員の健康状態、住居の広さ、布団類の保有状況等を十分勘案し、当該地域の低所得世帯との均衡を失しない限度において最低生活の維持に必要な支給量を決定すること。なお、その者が使用していたものを再生して使用させることを第一に考慮し、みだりに新製の布団類を支給することのないように留意すること。

(2) 家具什器費

◎ 第7-2

(6) 家具什器費

被保護者が次のアからエのいずれかの場合に該当し、次官通知第6に定めるところによって判断した結果、炊事用具、食器等の家具什器を必要とする状態であると認められるときは、24,800円の範囲内において特別基準の設定があったものとして家具什器を支給して差しつかえないこと。

なお、真にやむを得ない事情により、この額により難いと認められるときは、39,700円の範囲内において、特別基準の設定があったものとして家具什器を支給して差しつかえないこと。

これらの場合においては、収入充当順位にかかわらず、現物給付の方法によること。ただし、現物給付

の方法によることが適当でない認められるときは、金銭給付の方法によっても差しつかえないこと。

ア 保護開始時において、最低生活に直接必要な家具什器の持合せがないとき。

イ 長期入院・入所後退院・退所した単身者であつて、新たに自活しようとする場合において、最低生活に直接必要な家具什器の持合せがないとき。

ウ 災害にあい、災害救助法が発動されない場合において、当該地方公共団体等の救護をもってしては、災害により失った最低生活に直接必要な家具什器をまかなうことができないとき。

エ 転居の場合であつて、新旧住居の設備の相違により、最低生活に直接必要な家具什器を補填しなければならない事情が認められるとき。

(3) 移送費

㊦ 別表第1第3章-3 移送費

移送費の額は、移送に必要な最少限度の額とする。

㊦ 第7-2

(7) 移送費

ア 移送は、次のいずれかに該当する場合において他に経費を支出する方法がないときに乗車船券を交付する等なるべく現物給付の方法によつて行うこととし、移送費の範囲は、(ウ)又は(ク)において別に定めるもののほか、必要最少限度の交通費、宿泊料及び飲食食物費の額とすること。

この場合、(イ)若しくは(ロ)に該当する場合であつて実施機関の委託により使役する者があるとき、(ウ)、(カ)、(キ)若しくは(ク)に該当する場合であつて付添者を必要とするとき又は(エ)に該当する場合の被扶養者にあつては、その者に要する交通費、宿泊料及び飲食食物費並びに日当（実施機関の委託により使役する者について必要がある場合に限る。）についても同様の取扱いとすること。

(7) 生計の途がなく、かつ、一定の住居を持たない者で、野外において生活している者、外国からの帰還者等やむを得ない状態にあると認められる要保護者を扶養義務者その他の確実な引取り先に移送する必要があると認められる場合

(イ) 要保護者を保護の必要上遠隔地の保護施設等へ移送する場合

(ロ) 被保護者が実施機関の指示又は指導をうけて他法による給付の手續、施設入所手續、就職手續及び検診等のため当該施設等へ出向いた場合

(ハ) 被保護者が実施機関の指示又は指導をうけてその者の属する世帯の世帯員として認定すべき被扶養者を引取りに行く場合

(ニ) 被保護者が身体障害者更生援護施設、国立保養所、知的障害者援護施設、公共職業能力開発施設等に入所し若しくはこれらの施設から退所する場合又はこれらの施設に通所する場合であつて、身体的条件、地理的条件又は交通事情により、交通費を伴う方法以外には通所する方法が全くないか又はきわめて困難である場合

(ホ) (イ)に掲げる施設等に入所している被保護者が当該施設の長の指導により出身世帯に一時帰省する場合又はこれらの施設に入所している者の出身世帯員（被保護世帯に限る。）がやむを得ない事情のため当該施設の長の要請により当該施設へ行く場合

(ヘ) 被保護者が実施機関の指示又は指導をうけて求職又は施設利用のため熱心かつ誠実に努力した場合

(ト) 被保護世帯員のいずれかが入院したため当該患者の移送以外に実施機関が認める最少限度の連絡を要する場合

(チ) 被保護者（その委託による代理人を含む。）が、当該被保護者の配偶者、三親等以内の血族若しくは二親等以内の姻族であつて他に引取人のない遺体、遺骨を引取りに行く場合又はそれらの者の遺骨を納めに行く場合で実施機関がやむを得ないと認めたとき。この場合、遺体の運搬費を要するときは、その実費を認定して差しつかえない。

(リ) 被保護者が、配偶者、三親等以内の血族若しくは二親等以内の姻族が危篤に陥っているためそのもとへ行く場合又はそれらの者の葬儀に参加する場合で実施機関がやむを得ないと認めたとき。

(ル) 被保護者が転居する場合又は住居を失った被保護者が家財道具を他に保管する場合及びその家財

道具を引き取る場合で、真にやむを得ないとき。

この場合、荷造費及び運搬費を要するときは、実施機関が事前に承認した必要最少限度の額を認定して差しつかえない。

(9) 被保護者が出産のため病院、助産所等へ入院、入所し、又は退院、退所する場合

(10) 刑務所、少年院等に入所している者の出身世帯員（被保護世帯に限る。）がやむを得ない事情のため当該施設の長の要請により当該施設へ行く場合

(11) 次のいずれかに該当する場合であつてそれがその世帯の自立のため必要かつ有効であると認められるとき。

a. アルコール症若しくはその既往のある者又はその同一世帯員が、断酒を目的とする団体（以下「断酒会」という。）の活動を継続的に活用する場合

b. アルコール症又はその既往のある者（同伴する同一世帯員を含む。）が、断酒会の実施する2泊3日以内の宿泊研修会（原則として当該都道府県内に限る。）に参加する場合

c. 精神保健福祉センター、保健所等において精神保健福祉業務として行われる社会復帰相談指導事業等の対象者又はその同一世帯員が、その事業を継続的に活用する場合

イ 生計の途がなく、かつ、一定の住居を持たない者で、野外において生活している者等に対し移送費を支給する場合には、面接、調査、照会等により知った事情を、できるだけ詳細に保護台帳、ケース記録等に記入し、警察官の証明書等を参考書類として添付する等保護の経緯を明らかにしておくように留意し、その保護台帳の写を目的地の保護の実施機関にすみやかに送付すること。

(4) 入学準備金

⑤ 第7-2

(8) 入学準備金

小学校又は中学校に入学する児童、生徒が、入学の際、入学準備のための費用を必要とする場合は、それぞれ次の額の範囲内において特別基準の設定があつたものとし

て必要な額を認定して差しつかえないこと。この場合、原則として金銭給付によることとするが、現物給付によることが適当であると認められるときは現物給付によることとして差しつかえないこと。

小学校入学時 39,500 円以内

中学校入学時 46,100 円以内

問（第7の43） 児童が、知的障害児通園施設に入所するときは、当該児童を小学校に入学する児童とみなして入学準備金を認定して差しつかえないか。

答 お見込みのとおり取り扱って差しつかえない。

(5) その他

⑤ 第7-2

(9) ひとり親世帯就労促進費

ア 次の（ア）及び（イ）のいずれにも該当する場合については、イに定める額を特別基準の設定があつたものとして、ひとり親世帯就労促進費を認定して差しつかえない。

(ア) 父母の一方若しくは両方が欠けているか又はこれに準ずる状態にあるため、父母の他方又は父母以外の者が児童（18歳に達する日以後の最初の3月31日までの間にある者又は20歳未満で保護の基準別表第1第2章の4の(2)に掲げる者をいう。）を養育しなければならない場合。ただし、当該養育に当たる者が父又は母である場合であつて、その者が子の養育に当たることができる者と婚姻関係（婚姻の届出をしていないが事実上婚姻と同様の事情にある場合を含む。）にあり、かつ、同一世帯に属するときは、この限りでない。

(イ) 当該養育に当たる者が、現に就労収入を得ているか又は職業訓練等に参加している場合

イ ひとり親世帯就労促進費は、それぞれ次に定める額とする。

就労収入の月額が30,000円以上の場合

月額 10,000 円

就労収入の月額が30,000円未満の場合

月額 5,000 円

職業訓練等に参加しており、当該職業訓練等が当該被保護世帯の自立助長に効果的であると保護の実施機関が認めた場合

月額 5,000 円

ウ 保護の基準別表第1第2章の3の母子加算及びひとり親世帯就労促進費について、同一の者が両者の支給事由に該当する場合には、いずれか高い方の額を算定するものとする。

問(第7の85) 局長通知第7の2の(9)に定める「ひとり親世帯就労促進費」に関する就労収入月額の認定及びその計上方法を示されたい。

答 ひとり親世帯就労促進費の支給額を決定する際に必要となる就労収入月額の認定は、次官通知第8の3の(1)のアからエ及び局長通知第8の1の(1)から(3)までに定める方法により、収入として認定された額をもって行うものとし、当該収入認定が行われた月にひとり親世帯就労促進費を計上することとされた。

ただし、次官通知第8の3の(1)のイによる農業収入及びウによる農業以外の事業(自営)収入については、生産必要経費及び事業に必要な経費を控除した後の収入額をもって就労収入月額を認定された。

問(第7の86) 局長通知第7の2の(9)の(イ)にいう「職業訓練等」にはどのようなものがあるのか。

答 当該被保護世帯の自立助長に効果的であると保護の実施機関が認めたものであり、以下のような職業訓練等に取り組んでいる場合が考えられる。

- 1 公共職業訓練に取り組んでいる場合
- 2 専修学校等において、生業の維持に役立つ生業に就くために必要な技能の修得に取り組んでいる場合
- 3 コンピューターの基本機能の操作等就職に有利な一般的技能の修得、コミュニケーション能力等就労に必要な基礎的能力の修得、職場適応訓練、就労意欲の喚起を目的としたセミナー等を受講している場合
- 4 各自治体において策定されている就労自立支援に関するプログラムに参加(生活保護受給者

等就労支援事業への参加を含む。)している場合

(10) その他

ア 配電設備費

(7) 被保護者が現に居住する家屋に配電設備が全くない場合には、保護の基準別表第3の1の補修費等住宅維持費の額の範囲内において、特別基準の設定があったものとして、配電設備の新設に必要な額を認定して差しつかえないこと。

なお、真にやむを得ない事情により、この額により難いと認められるときは、保護の基準別表第3の1の基準額に1.5を乗じて得た額の範囲内において、特別基準の設定があったものとして、必要な額を認定して差しつかえない。

(4) 設備に要する経費の減免又は扶養義務者ないしは地域社会の援助等を期待できるものについては、極力これを受けようとして指導すること。

イ 水道、井戸又は下水道設備費

(7) 被保護者が最低限度の生活の維持のために水道若しくは井戸を設備することが真に必要であると認められ、かつ、その地域の殆んどの家が水道若しくは井戸を設けているとき又は被保護者が市街地の中心部等に居住している場合であって、現在下水道(尿尿を除く。)処理の方法では当該世帯又は近隣の衛生を著しく損うことが認められ、かつ、下水道設備によるほか適当な処理方法がないときに限り、保護の基準別表第3の1の補修費等住宅維持費の額の範囲内において特別基準の設定があったものとして水道、井戸又は下水道設備の新設に必要な額を認定して差しつかえない。

なお、真にやむを得ない事情により、この額により難いと認められるときは、保護の基準別表第3の1の基準額に1.5を乗じて得た額の範囲内において、特別基準の設定があったものとして、必要な額を認定して差しつかえない。

また、水道又は井戸の設備に係る特別基準の設定に当たっては水道又は井戸の設備費のそれぞれを比較して廉価なものを設備すること。

(4) 設備の規模は、近隣との均衡等を十分に検討し

たうえで、最低限度の生活にふさわしい程度で決定すること。

- (ウ) 設備に要する経費の減免又は扶養義務者ないしは地域社会の援助等を期待できるものについては極力これを受けようように指導すること。

問（第7の20） 官有地等における無許可建築物に居住する被保護者に対し、配電設備費又は水道設備費の支給が認められるか。

答 配電設備費等の支給は被保護者の居住する家屋が適法な所有又は占有関係にあることを前提として決定されるべきものであり、不法に占拠された土地に建築された家屋について配電設備費等を支給することは適当でない。

ただし、当該土地の所有者又は権限ある管理者が当該配電設備等を行うことを了承している場合は、例外として支給して差しつかえない。

ウ 液化石油ガス設備費

- (ア) 被保護者が最低限度の生活の維持のためにプロパンガス等液化石油ガス設備を設けることが真に必要であると認められ、かつ、その設置が近隣との均衡を失することにならないと認められる場合に限り、保護の基準別表第3の1の補修費等住宅維持費の額の範囲内において、特別基準の設定があったものとして液化石油ガス設備の新設に必要な額を認定して差しつかえないこと。

なお、真にやむを得ない事情により、この額により難いと認められるときは、保護の基準別表第3の1の基準額に1.5を乗じて得た額の範囲内において、特別基準の設定があったものとして、必要な額を認定して差しつかえない。

- (イ) 設備の規模は、近隣との均衡等を十分に検討したうえで、最低限度の生活にふさわしい程度で決定すること。
- (ウ) 設備に要する経費の減免又は扶養義務者ないしは地域社会の援助等を期待できるものについては、極力これを受けようように指導すること。

エ 家財保管料

医療機関、介護老人保健施設、職業能力開発校、社

会福祉施設等に入院又は入所している単身の被保護者でやむを得ない事情により、家財を自家以外の場所に保管してもらう必要があり、かつそのための経費を他からの援助等で賄うことのできないものについては、入院又は入所（入院又は入所後に被保護者になったときは、被保護者になった時。以下同じ。）後1年間を限度として月額13,000円の額を特別基準の設定があったものとして認定して差しつかえないこと。ただし、明らかに入院又は入所後1年以上の入院加療、入所による指導訓練を必要とする者についてはこの限りではない。

なお、入院又は入所後において保護の実施要領第6の4の(1)のエの(ア)により住宅費が認定されている場合には、12か月から当該住宅費を認定した月数を差し引いた月数の範囲において認定すること。

オ 家財処分料

借家等に居住する単身の被保護者が医療機関、介護老人保健施設、職業能力開発校又は社会福祉施設等に入院又は入所し、入院又は入所見込期間（入院又は入所後に被保護者となったときは、被保護者になった時から）が6か月を超えることにより真に家財の処分が必要な場合で、敷金の返還金、他からの援助等によりそのための経費を賄うことができないものについては、家財の処分に必要な最小限度の額を特別基準の設定があったものとして認定して差しつかえない。

カ 妊婦定期検診料

妊娠した被保護者が、妊娠期間中（妊娠後に被保護者となったときは、被保護者になった以降。）保健所において行われる妊婦の健康診査事業を利用することができず、医療機関において定期検診を受ける場合は、公費負担により受診する場合を除き、特別基準の設定があったものとして必要な額を認定して差しつかえない。

キ 不動産鑑定費用等

保護の申請を行った者又は保護受給中の者が、要保護世帯向け長期生活支援資金を利用（社会福祉協議会による貸付審査により、貸付の利用に至らなかった場合も含む。）することに伴って必要となる不動産鑑定費用（社会福祉協議会が単位期間ごとに行う再評価に要する費用を除く。）、抵当権等の設定登記費用及びそ

その他必要となる費用については、特別基準の設定があったものとして必要な額を認定して差しつかえない。

4 教育費

㊦ 別表第2 教育扶助基準

基準額（月額）

学校別区分	小学校	中学校
基準額	2,150円	4,180円
教材代	正規の教材として学校長又は教育委員会が指定するものの購入に必要な額	
学校給食費	保護者が負担すべき給食費の額	
通学のための交通費	通学に必要な最少限度の額	

㊦ 第7

3 教育費

(1) 基準額の算定

教育扶助基準額の計上にあたっては、保護開始月、変更月、停止月又は廃止月においても、月額全額を計上すること。

(2) 学級費等

学校教育活動のために全ての児童又は生徒について学級費、児童会又は生徒会費及びPTA会費等（以下「学級費等」という。）として保護者が学校に納付する場合であって、保護の基準別表第2に規定する基準額によりがたいときは、学級費等について次の額の範囲内において特別基準の設定があったものとして必要な額を認定して差しつかえない。

小学校 月額 620 円以内

中学校 月額 740 円以内

(3) 教材代

正規の教材として学校長又は教育委員会が指定するものについて、教育費のうちの教材代を計上する場合には、学校長又は教育委員会の指定証明を徴すること。

なお、正規の教材の範囲は、学校において当該学級の全児童が必ず購入することとなっている副読本

的図書、ワークブック及び和洋辞典であること。

(4) 通学のための交通費

児童又は生徒が身体的条件、地理的条件又は交通事情により交通費を伴う方法による以外には通学する方法が全くないか、又はそれによらなければ通学がきわめて困難である場合においては、その通学のため必要な最小限度の交通費の額を計上すること。

(5) 夏季施設参加費

小学校、中学校又は教育委員会が行う校外活動（修学旅行を除く。）に、当該学年の児童又は生徒の全員が参加する場合は、その参加のために必要な最少限度の額を特別基準の設定があったものとして認定して差しつかえないこと。

(6) 災害時等の学用品費の再支給

災害その他不可抗力により学用品を消失し、学用品を再度購入することが必要な場合には、次の額の範囲内において特別基準の設定があったものとして必要な額を認定して差しつかえないこと。

小学校 11,100 円以内

中学校 21,700 円以内

問（第7の23） 教育扶助の基準額は月額で表示されているが、被保護者が学用品、通学用品等を購入するために一時に経費を必要とするときは、数箇月分の教育扶助費を一括交付することとしてよいか。

答 教育費の需要の実態にかんがみ、教育扶助費の支給額のある児童生徒の場合に限り、月額で表示された教育扶助の基準額に当該学期の月数（学期の途中で保護を開始された児童の場合は、開始月以後当該学期内の月数）を乗じて得た額の範囲内で必要な額を学用品等を購入する時期に支給して差しつかえない。

問（第7の24） 特別支援学校への就学奨励に関する法律により学用品費及び通学用品費が給付されている児童生徒についての教育扶助の基準額を認定する場合はどうするか。

また、障害児施設に入所している児童が特別支援学校へ通学している場合、教育扶助はどう認定するのか。

答 当該法律により給付された学用品費及び通学用品

費の額と教育扶助の基準額との差額を計上して認定することとされたい。

また、障害児施設に入所している児童が特別支援学校へ通学している場合の教育扶助の認定についても同様に扱うこととされたい。

なお、就学困難な児童及び生徒に係る就学奨励についての国の援助に関する法律の適用により支給される学用品費及び通学用品費がある場合も同様に扱われたい。

問（第7の12） 学童が通学に際し、交通機関がなく、遠距離のため自転車を利用する必要がある場合は、自転車の購入費を認めてよいか。

また、自転車による通学に伴って、ヘルメットを必要とする場合は、ヘルメット購入費を認めてよいか。

答 その地域のほとんどすべての学童が自転車を利用している場合には、自転車の購入費を教育扶助の交通費の実費として認めて差しつかえない。

また、学校の指導により、自転車を利用して通学している学童の全員がヘルメットをかぶっている実態にあると認められる場合には、ヘルメットの購入費を教育扶助の交通費の実費として認めて差しつかえない。

なお、通学のため交通費を要する場合には、年間を通じて最も経済的な通学方法をとらせることが適当であるので、他に交通機関がある場合には、それとの比較において考慮すること。

問（第7の13） 給食費を学校長に直接交付する場合であって前渡の必要があるとき、当該給食費の認定の取扱いは如何にしたらよいか。

答 前渡の必要があると認定される給食費の概算額を毎月計上し、毎学年おおむね2回程度、適宜な時期に精算を行うようにされたい。

なお、保護を停止し、又は廃止するときは、そのときに精算を行われたい。

問（第7の45） 特別支援学校の小学部若しくは中学部に通学する児童若しくは生徒のうち、付添がなければ通学することができないか若しくはきわめて困難な者、又は小学校若しくは中学校に通学する児童若しくは生徒のうち、身体的事情等により一定期

間付添がなければ通学することができないか若しくはきわめて困難な者については、これに要する交通費の額を局長通知第7の3の(4)により認定することとしてよろしいか。

答 お見込みのとおり取り扱って差しつかえない。

なお、特別支援学校に通学する児童又は生徒のうち、その一部については、特別支援学校への就学奨励に関する法律により付添に要する交通費が支給されるので留意すること。

5 住宅費

(1) 家賃・間代・地代等

㊦ 別表第3 住宅扶助基準

1 基準額

区分 級地別	家賃、間代、地 代等の額(月額)	補修費等住宅維 持費の額(年額)
1級地及び2級地	13,000円以内	118,000円以内
3級地	8,000円以内	

2 家賃、間代、地代等については、当該費用が1の表に定める額を超えるときは、都道府県又は地方自治法（昭和22年法律第67号）第252条の19第1項の指定都市（以下「指定都市」という。）若しくは同法第252条の22第1項の中核市（以下「中核市」という。）ごとに、厚生労働大臣が別に定める額の範囲内の額とする。

㊦ 第7

4 住宅費

(1) 家賃、間代、地代等

ア 保護の基準別表第3の1の家賃、間代、地代等は、居住する住居が借家若しくは借間であって家賃、間代等を必要とする場合、又は居住する住居が自己の所有に属し、かつ住居の所在する土地に地代等を要する場合に認定すること。

イ 月の途中で保護開始、変更、停止又は廃止となった場合であって、日割計算による家賃、間代の額を超えて家賃、間代を必要とするときは、1か月分の家賃、間代の基準額の範囲内で必要な額を認定して差し支えないこと。

ウ 被保護者が真に必要やむを得ない事情により月の途中で転居した場合であって日割計算による家賃、間代の額をこえて家賃、間代を必要とするときは、転居前及び転居後の住居にかかる家賃、間代につきそれぞれ1箇月分の家賃、間代の基準額の範囲内で必要な額を認定して差しつかえないこと。

エ 入院患者がある場合等の住宅費の取扱い

(7) 単身の者が、医療機関、介護老人保健施設、職業能力開発校、社会福祉施設等に入院入所期間中も従来通り住宅費を支出しなければならない生活実態にある場合は、入院入所（入院入所後に被保護者になったときは、被保護者になった時。以下この項において同じ。）後6か月以内に退院退所できる見込みのある場合に限り、入院入所後6か月間を限度として、当該住宅費を認定して差し支えないこと。

なお、入院入所後における病状の変化等により6か月を超えて入院入所することが明らかとなった場合であっても、その時から3か月以内に確実に退院退所できる見込みがあると認められる場合には、更に3か月を限度として引き続き当該住宅費を認定して差し支えないこと。

(イ) (7)以外の場合であって、保護受給中の単身者が月の途中で病院等に入院若しくは入所し、又は病院等から退院若しくは退所した場合において、日割計算による家賃、間代の額をこえて家賃、間代を必要とするときは、1箇月分の家賃、間代の基準額の範囲内で必要な額を計上して差しつかえないこと。

なお、地域の住宅事情等により、退院又は退所する月において住居を確保することが困難であるため、当該月の前月分の家賃、間代を必要とするときは、退院又は退所した日以前1箇月を限度として1箇月分の家賃、間代の基準額の範囲内で必要な額を日割計算により計上して差しつかえないこと。

オ 保護の基準別表第3の2の厚生労働大臣が別に定める額（以下「限度額」という。）によりがたい家賃、間代等であって、世帯員数、世帯員の状況、当該地域の住宅事情によりやむを得ないと認

められるものについては、限度額に1.3を乗じて得た額（7人以上の世帯については、この額にさらに1.2を乗じて得た額）の範囲内において、特別基準の設定があつたものとして、必要な額を認定して差しつかえないこと。

カ 被保護者が転居に際し、敷金等を必要とする場合で、限度額又はオに定める額以内の家賃又は間代を必要とする住居に転居するときは、限度額又はオに定める額に3を乗じて得た額の範囲内において特別基準の設定があつたものとして必要な額を認定して差しつかえないこと。ただし、近い将来保護の廃止が予想され、その後に転居することをもって足りる者については、この限りでない。

キ 保護開始時において、安定した住居のない要保護者（保護の実施機関において居宅生活ができること認められる者に限る。）が住宅の確保に際し、敷金等を必要とする場合で、限度額又はオに定める額以内の家賃又は間代を必要とする住居を確保するときは、限度額又はオに定める額に3を乗じて得た額の範囲内において特別基準の設定があつたものとして必要な額を認めて差し支えないこと。

ク 被保護者が居住する借家、借間の契約更新に際し、契約更新料等を必要とする場合には、限度額又はオに定める額の範囲内において特別基準の設定があつたものとして必要な額を認定して差しつかえないこと。

問（第7の64） 局第7の4の(1)のエの(7)により住宅費が認定される場合の施設にはどのようなものがあるか。

答 次のような施設に入所した場合が考えられる。

- (1) 職業能力開発促進法にいう職業能力開発校、障害者能力開発校又はこれらに準ずる施設
- (2) 社会福祉法第2条に規定する社会福祉施設等であつて指導又は訓練を目的としているもの

問（第7の56） 局長通知第7の4の(1)のオにいう「世帯員数、世帯員の状況、当該地域の住宅事情によりやむを得ないと認められるもの」には原則として単身者の場合の家賃、間代等は該当しないものとして取り扱ってよいか。

答 お見込みのとおりである。したがって、単身者が転居する場合又は単身者の従来の住居が地域との均衡を著しく失っている場合には、保護の基準別表第3の2の限度額の範囲内の住居へ入居するよう十分指導されたい。

ただし、当該単身者が車椅子使用の障害者等特に通常より広い居室を必要とする場合、老人等で従前からの生活状況からみて転居が困難と認められる場合又は地域において上記限度額の範囲内では賃貸される実態がない場合は上記限度額に1.3を乗じて得た額の範囲内において必要な家賃、間代等を認定して差しつかえない。

問(第7の55) 住宅扶助の家賃、間代、地代等の額は月額で表示されているが、被保護者が数箇月分の地代を一括して支払う必要があるときは数箇月分の住宅扶助費を一括交付することとしてよいか。

答 地代については、その支払いの実態にかんがみ住宅扶助費の家賃、間代、地代等の額を12箇月の範囲内において必要な月分を地代支払いの時期に支給して差しつかえない。

ただし、新たに、保護を開始した者については、保護を開始した日以降、次期地代支払い時期までの額を認定すること。

問(第7の34) 家賃又は間代の中に電灯料又は水道料が含まれている場合の住宅費はどのように認定すればよいか。

答 電灯料又は水道料に相当する額を控除した額を住宅費として認定すること。

問(第7の52) 局長通知第7の4の(1)のオによる特別基準の適用について、世帯人員については、同一世帯員として認定され現に同居している被保護者の数によることとし、世帯員の減少により7人を下回ることとなった場合又は単身世帯になった場合には、その翌月から当該特別基準は適用されなくなるものと解してよいか。

また、世帯員が入院又は介護老人保健施設へ入所した場合で1年以内に退院が見込まれるときは、1年間に限り、その者も含めた人員によることを認めてよいか。

答 いずれもお見込みのとおりである。

なお、引き続き当該住居に居住する場合で、転居の準備等のためやむを得ないと認められるものについては、世帯員の減少後6か月間を限度として、引き続き当該特別基準を適用して差しつかえない。

問(第7の30) 局長通知第7の4の(1)のカにいう「転居に際し、敷金等を必要とする場合」とは、どのような場合をいうか。

答 「転居に際し、敷金等を必要とする場合」とは、次のいずれかに該当する場合で、敷金等を必要とするときに限られるものである。

- 1 入院患者が実施機関の指導に基づいて退院するに際し帰住する住居がない場合
- 2 実施機関の指導に基づき、現在支払われている家賃又は間代よりも低額な住居に転居する場合
- 3 土地収用法、都市計画法等の定めるところにより立退きを強制され、転居を必要とする場合
- 4 退職等により社宅等から転居する場合
- 5 法令又は管理者の指示により社会福祉施設等から退所するに際し帰住する住居がない場合(当該退所が施設入所の目的を達したことによる場合に限る。)
- 6 宿所提供施設、無料低額宿泊所(社会福祉法第2条第3項第8号に規定する無料低額宿泊事業を行う施設をいう。)等を一時的な起居の場として利用している場合であって、居宅生活ができると認められる場合
- 7 現在の居住地が就労の場所から遠距離にあり、通勤が著しく困難であって、当該就労の場所の附近に転居することが、世帯の収入の増加、当該就労者の健康の維持等世帯の自立助長に特に効果的に役立つと認められる場合
- 8 火災等の災害により現住居が消滅し、又は、居住にたえない状態になったと認められる場合
- 9 老朽又は破損により居住にたえない状態になったと認められる場合
- 10 世帯人員からみて著しく狭隘であると認められる場合
- 11 病気療養上著しく環境条件が悪いと認められる場合又は身体障害者がいる場合であって設備構造が居住に適さないと認められる場合

12. 住宅が確保できないため、親戚、知人宅等に一時的に寄宿していた者が転居する場合

13. 家主が相当の理由をもって立退きを要求し、又は借家契約の更新の拒絶若しくは解約の申入れを行ったことにより、やむを得ず転居する場合

14. 離婚により新たに住居を必要とする場合

15. 高齢者、身体障害者等が扶養義務者の日常的介護を受けるため、扶養義務者の住居の近隣に転居する場合

または、双方が被保護者であって、扶養義務者が日常的介護のために高齢者、身体障害者等の住居の近隣に転居する場合

問（第7の31） 転居等により、保護継続中の者に対し敷金が返還される場合、この返還金をどう取り扱うべきか。

答 当該返還金は当該月以降の収入として認定すべきものである。ただし、実施機関の指導又は指示により転居した場合においては、当該返還金を転居に際して必要とされる敷金等に当てさせて差しつかえない。

なお、当該返還金を敷金等に当てさせた場合には、敷金等の経費について住宅扶助を行う必要はないものである。

問（第7の35） 敷金等として、権利金、礼金、不動産手数料、火災保険料、保証人がいない場合の保証料を認定してよいか。

答 必要やむを得ない場合は、転居に際して必要なものとして認定して差しつかえない。

なお、保証料については扶養義務者が全くいないか、長期間交流がないなどの場合に限り認められるものである。

問（第7の77） 局長通知第7の4の(1)のキにいう「住宅の確保に際し、敷金等を必要とする場合」とは、どのような場合をいうか。

答 「住宅の確保に際し、敷金等を必要とする場合」とは、次のいずれにも該当する場合で、ケース診断会議等において総合的に判断した結果、真に敷金等が必要であると認められるときに限る。

- 1 居宅生活ができると認められること。
- 2 公営住宅等の敷金等を必要としない住居の確保

ができないこと。

3 他法他施策による貸付制度や他からの援助等により敷金等がまかなわれないこと。

4 保護の開始の決定後、同一の住居に概ね6ヶ月を超えて居住することが見込まれること。

問（第7の78） 局長通知第7の4の(1)のキの「居宅生活ができると認められる者」の判断方法を示されたい。

答 居宅生活ができるか否かの判断は、居宅生活を営むうえで必要となる基本的な項目（生活費の金銭管理、服薬等の健康管理、炊事・洗濯、人とのコミュニケーション等）を自己の能力でできるか否か、自己の能力のみではできない場合にあっては、利用しうる社会資源の活用を含めできるか否かについて十分な検討を行い、必要に応じて関係部局及び保健所等関係機関から意見を聴取した上で、ケース診断会議等において総合的に判断すること。

なお、当該判断に当たっては、要保護者、その扶養義務者等から要保護者の生活歴、過去の居住歴、現在の生活状況を聴取する等の方法により、極力判断材料の情報収集に努め、慎重に判断すること。

問（第7の87） 契約更新料等として、更新手数料、火災保険料、保証人がいない場合の保証料を認定してよいか。

答 必要やむを得ない場合には、契約更新に必要なものとして認定して差し支えない。なお、保証料については扶養義務者が全くいないか、長期間交流がないなどの場合に限り認められるものである。

(2) 住宅維持費

(2) 住宅維持費

ア 保護の基準別表第3の1の補修費等住宅維持費は被保護者が現に居住する家屋の畳、建具、水道設備、配電設備等の従属物の修理又は現に居住する家屋の補修その他維持のために経費を要する場合に認定すること。

なお、この場合の補修の規模は、社会通念上最低

限度の生活にふさわしい程度とすること。

イ 家屋の修理又は補修その他維持に要する費用（エにより認定された額を除く。）が保護の基準別表第3の1によりがたい場合であってやむを得ない事情があると認められるときは、基準額に1.5を乗じて得た額の範囲内において、特別基準の設定があったものとして必要な額を認定して差しつかえないこと。

ウ 災害に伴い家屋の補修等を必要とする場合には、すでに認定した補修費等住宅維持費にかかわらず被災の時点から新たに補修費等住宅維持費を認定することとして差しつかえないこと。

エ 豪雪地帯において、雪囲い、雪下ろし等をしなければ家屋が損壊するおそれがある場合には、当該雪囲い、雪下ろし等に要する費用について、一冬期間につき保護の基準別表第3の1に定める額の範囲内において特別基準の設定があったものとして、必要な額を認定して差しつかえないこと。

問（第7の14） 風呂桶が破損した場合、この修理を家屋補修費の支給対象として取り扱ってよいか。

答 近隣に公衆浴場がない場合は、補修費の範囲内で修理を認めて差しつかえない。

なお、重度の心身障害者、歩行困難な高齢者等が自宅において入浴することが真に必要と認められる場合、又はこれ以外の者が他に適当な入浴の方法がないと認められる場合は、入浴設備の付設に要する費用を住宅維持費の支給対象として取り扱って差しつかえない。

問（第7の38） 現に居住する家屋に便所がない場合には、これに要する費用を住宅維持費の支給対象として取り扱ってよいか。

答 お見込みのとおり取り扱って差しつかえない。

問（第7の8） 下水道法第11条の3により水洗便所への改造義務を負う被保護者が市町村又は扶養義務者等の助成又は援助により便所を改造する場合であって、当該改造にあたり家屋の一部を補修しなければならない真にやむを得ない事情があるときは、当該家屋の補修に要する費用を住宅維持費の支給対象として取り扱ってよいか。

答 市町村又は扶養義務者等から家屋の補修に要する

費用の助成又は援助が期待できない場合は、お見込みのとおり取り扱って差しつかえない。

問（第7の48） 白ありの食害により家屋の損傷が進んでいる場合であって、放置すれば、明らかに当該家屋が損壊すると認められるときは、白ありの駆除のために要する必要最少限度の費用を住宅維持費の支給対象として取り扱ってよいか。

答 お見込みのとおり取り扱って差しつかえない。

問（第7の62） 現に居住する家屋に網戸がない場合には、これに要する費用を住宅維持費の支給対象として取り扱ってよいか。

答 設置の必要が認められるときは、最低限度の生活にふさわしい程度において、住宅維持費の範囲内で網戸の設置に要する費用を支給して差しつかえない。

6 医療費

㊦ 別表第4 医療扶助基準

1	指定医療機関等において診療を受ける場合の費用	生活保護法第52条の規定による診療方針及び診療報酬に基づきその者の診療に必要な最小限度の額
2	薬剤又は治療材料に係る費用（1の費用に含まれる場合を除く。）	25,000円以内の額
3	施術のための費用	都道府県知事又は指定都市若しくは中核市の長が施術者のそれぞれの組合と協定して定めた額以内の額
4	移送費	移送に必要な最小限度の額

㊦ 第7

5 医療費

指定医療機関等において診療を受ける場合の医療費は医療関係法令通知等に示すところにより診療に

必要な最小限度の実費の額を計上すること。

7 介護費

㊦ 別表第5 介護扶助基準

1	居宅介護、福祉用具、住宅改修又は施設介護	生活保護法第54条の2第4項において準用する同法第52条の規定による介護の方針及び介護の報酬に基づきその者の介護サービスに必要な最小限度の額
2	移送費	移送に必要な最小限度の額

㊦ 第7

6 介護費

指定介護機関において介護サービスを受ける場合の介護費は、介護関係法令通知等に示すところにより、介護サービスを受けるために必要な最小限度の実費の額を計上すること。

8 出産費

㊦ 別表第6 出産扶助基準

1 基準額

区 分	基 準 額
施設分べんの場合の額	173,000円以内
居宅分べんの場合の額	204,000円以内

2 病院、助産所等施設において分べんする場合は、入院（8日以内の実入院日数）に要する必要最小限度の額を基準額に加算する。

3 衛生材料費を必要とする場合は、5,400円の範囲内の額を基準額に加算する。

㊦ 第7

7 出産費

(1) 出産予定日の急変によりあらかじめ予定していた施設において分べんすることができなくなった場合

等真にやむを得ない事情により、出産に要する費用が保護の基準別表第6により難しいこととなったときは、保護の基準別表第6の1について、240,000円の範囲内において特別基準の設定があったものとして必要な額を認定して差しつかえないこと。

(2) 双生児出産の場合は、保護の基準別表第6の1について、基準額（(1)の要件を満たす場合は、240,000円）の2倍の額の範囲内において特別基準の設定があったものとして必要な額を認定して差しつかえないこと。

問（第7の46） 保護の基準別表第6の2にいう入院に要する必要最少限度の額の範囲及び程度を示されたい。

答 医療扶助において認められる入院に係る費用（入院時基本料等）について8日以内の実入院日数に基づき算定した額の範囲内の必要最小限度の額とすること。

問（第7の47） 局長通知第7の7の(1)にいう「真にやむを得ない事情」とは、どのような場合をいうか。

答 次のいずれかに該当する場合をいうものであること。

- 1 出産予定日の急変等により、予定していた施設において出産するいとまがない場合又は予定していた施設が満床等で利用できない場合
- 2 予約していた医師又は助産師の都合により、その介助が受けられない場合
- 3 傷病により入院している間に出産した場合

問（第7の51） 出産扶助の入院料については、医療扶助において認められる費目、単価により算定した額を限度とすることになっているが、局長通知第7の7の(1)の特別基準を適用すべき場合、当該施設における出産に係る看護等の実態、当該地域における出産に係る入院費用の実態からみて真にやむを得ないと認められるときは、同程度の看護体制にある医療機関に入院した場合に医療扶助において認められる入院料の範囲内において必要な額を認定することは認められないか。

答 お見込みのとおり取り扱って差しつかえない。

9 生業費、技能修得費及び就職支度費

㊦ 別表第7 生業扶助基準

1 基準額

区 分		基準額	
生 業 費		45,000円以内	
技能修得費	技能修得費（高等学校等就学費を除く。）	69,000円以内	
	高等学校等 就学費	基本額（月額）	5,300円
		教材代	正規の授業で使用する教材の購入に必要な額
		授業料、入学科及び入学考査料	高等学校等が所在する都道府県の条例に定める都道府県立の高等学校等における額以内の額。 ただし、市町村立の高等学校等に通学する場合は、当該高等学校等が所在する市町村の条例に定める市町村立の高等学校等における額以内の額。
	通学のための交通費	通学に必要な最小限度の額	
就 職 支 度 費		28,000円以内	

2 技能修得費（高等学校等就学費を除く。以下同じ。）

は、技能修得（高等学校等への就学を除く。以下同じ。）の期間が1年以内の場合において、1年を限度として算定する。ただし、世帯の自立更生上特に効果があると認められる技能修得については、その期間は2年以内とし、1年につき69,000円以内の額を2年を限度として算定する。

3 技能修得のため交通費を必要とする場合は、1又は2に規定するところにより算定した技能修得費の額にその実費を加算する。

㊦ 第7

8 生業費、技能修得費及び就職支度費

(1) 生 業 費

ア 専ら生計の維持を目的として営まれることを建前とする小規模の事業を営むために必要な資金又は生業を行うために必要な器具若しくは資料を必要とする被保護者に対し、その必要とする実態を調査確認のうえ、基準額の範囲内における必要最小限度の額を計上するものとする。

なお、生業費として認められる経費が保護の基準別表第7の1によりがたい場合であってやむを得ない事情があると認められるときは、75,000円の範囲内において、特別基準の設定があったものとして必要な額を認定して差しつかえない。

イ 同一世帯に属する2人以上の者から同時に別個の生業計画により2件以上の申請があった場合には、世帯の収入の増加及び自立助長に効果的に役立つと認められるものについては、それぞれ生業扶助を適用して差しつかえないこと。

ウ 世帯を異にする2人以上の者から共同の出資事業につき申請がそれぞれ別個になされた場合には、生業計画について企業責任の所在、経営利潤の配分、資材及び労力の提供、製品の販路等を詳細に検討したうえ、個々の世帯の収入の増加及び自立助長に効果的に役立つと認められるものについては、それぞれ生業扶助を適用して差しつかえないこと。

エ 支給品目の品質及び価格は、最低限度の生活にふさわしい程度で決定すること。

(2) 技能修得費

ア 技能修得費（高等学校等就学費を除く）

(イ) 生計の維持に役立つ生業に就くために必要な技能を修得する経費を必要とする被保護者に対し、その必要とする実態を調査確認のうえ、基準額の範囲内における必要最小限度の額を計上するものとする。

(ロ) 身体障害者手帳を所持する視覚障害者が、あん摩マッサージ指圧師、はり師、きゅう師等に関する法律第2条第1項の養成施設において、はり師、きゅう師になるために必要な技能を修

得する場合で、当該技能修得が世帯の自立助長に特に効果があると認められるときは、技能修得の期間が2年をこえる場合であっても、その期間1年につき69,000円の範囲内で特別基準の設定があったものとして必要な額を認定すること。

(ウ) 技能修得費として認められるものは、技能修得のために直接必要な授業料（月謝）、教科書、教材費及び当該技能修得を受ける者全員が義務的に課せられる費用等の経費であること。

なお、技能修得費として認められる経費が保護の基準別表第7の1によりがたい場合であってもやむを得ない事情があると認められるときは、115,000円の範囲内において特別基準の設定があったものとして必要な額を認定して差しつかえないこと。

(エ) 上記(ウ)に定めるところにかかわらず、(平成17年3月31日付け厚生労働省社会・援護局長通知に定めるところによる)自立支援プログラムに基づくなど、実施機関が特に必要と認めた場合については、コンピュータの基本的機能の操作等就職に有利な一般的技能や、コミュニケーション能力等就労に必要な基礎的能力を修得するための経費を必要とする被保護者についても、基準額の範囲内における必要最小限度の額を計上して差しつかえないこと。

なお、自立支援プログラムに基づく場合であって、1年間のうちに複数回の技能修得費を必要とする場合については、年額184,000円の範囲内において特別基準の設定があったものとして必要な額を認定して差しつかえないこと。

(オ) 当分の間、つぎのいずれかに該当する技能習得手当を受けている被保護者については、その実額に相当する額を技能修得費として計上すること。この場合、その者の収入のうち当該計上額は収入充当順位にかかわらず技能修得費に充当することとし、また、その額が技能修得費の一般基準額をこえるときは、特別基準の設定があったものとして取り扱うこと。

なお、bに該当するものとして取り扱う場合

は、厚生労働大臣に情報提供すること。

a 雇用対策法等に基づき支給される技能習得手当

b 職業能力開発促進法にいう公共職業能力開発施設に準ずる施設において職業訓練を受ける者が地方公共団体又はその長から支給されるaに準ずる技能習得手当

(カ) 被保護者に対して、障害者自立支援法第77条の規定に基づき、市町村が実施する地域生活支援事業の更生訓練費給付事業により、更生訓練費又は物品の支給が行われた場合は、当該訓練費の実額又は物品の支給に要する費用の実額を技能修得費として計上するとともに、その者の収入のうち当該計上額は、収入充当順位にかかわらず技能修得費に充当することとし、また、その額が技能修得費の一般基準額をこえるときは、特別基準の設定があったものとして取り扱うこと。ただし、技能修得費を当該訓練費の実額又は物品の支給に要する費用の実額をこえて認定する必要があるとき、又は技能修得費として計上した額を各月に分割して支給することが適当でないと認められるときは、上記の取扱いによらず、一般基準額又は(イ)若しくは(ウ)による特別基準額として認められる額の範囲内において必要と認められる額を技能修得費として計上し、更生訓練費等は収入として認定すること。

(キ) (ウ)による限度額を超えて費用を必要とする場合であって、次のいずれかに該当するときは、380,000円の範囲内において特別基準の設定があったものとして取り扱って差しつかえないこと。

この場合、給付にあたっては、必要と認められる最小限度の額を確認の上、その都度分割して給付するものとする。

a 生計の維持に役立つ生業に就くために専修学校又は各種学校において技能を修得する場合であって、当該世帯の自立助長に資することが確実に見込まれる場合

b 自動車運転免許を取得する場合（免許の取得

が雇用の条件となっている等確実に就労するために必要な場合に限る。)

c 雇用保険法第 60 条の 2 に規定する教育訓練給付金の対象となる厚生労働大臣の指定する教育訓練講座（原則として当該講座修了によって当該世帯の自立助長に効果的と認められる公的資格が得られるものに限る。）を受講する場合であって、当該世帯の自立助長に効果的と認められる場合

問（第 7 の 70） 局長通知第 6 の 8 の (2) の ア の (キ) の c にいう公的資格とは具体的にどのようなものか。また、受講修了によって公的資格が得られる講座以外では、どのようなものが対象となり得るか。

答 公的資格とは、国家資格又は地方公共団体によって認定されている資格をいうものである。

また、受講修了によって公的資格の受験資格を得られるもの、又はいわゆる民間資格であって、当該講座が目標とする職種の雇用環境及び当該講座修了により得られる技能の優位性並びに申請者の職歴、当該職種への適合性及び就職意欲等について、総合的に判断し、目標とする職業への就職の可能性が高いと見込まれるものについては適用して差し支えない。

問（第 7 の 40） 告示別表第 7 の 2 若しくは局長通知第 7 の 8 の (2) の ア の (イ) により技能修得の期間の延長が認められている期間、必要があればその年額について局長通知第 7 の 8 の (2) の ア の (ウ) に規定する技能修得費の特別基準額 **115,000** 円が適用され 1 年につき **115,000** 円ずつ認定して差しつかえないものと解してよいか。

答 お見込みのとおりである。

問（第 7 の 80） 局第 7 の 8 の (2) の ア の (エ) において、「実施機関が特に必要と認めた場合」の技能修得費については、どのようなものが対象となりうるか。また認定にあたって留意する点は何か。

答 技能修得費は、生業に必要な技能の修得を目的とするものであるから、対象としては、稼働能力を有する者が、段階的であっても就労を目指して行う取組である必要がある。そのような取組であ

れば、就職に有利な一般的技能や就労に必要な基礎的能力の修得以外であっても、職場の適応訓練や就労意欲の喚起を目的としたセミナーの受講等に必要な経費についても支給の対象として差しつかえない。

費用の支給にあたっては、本人の状況及び取組の内容や程度を勘案するとともに、実施機関と被保護者の間で、当該取組によって達成すべき目標や達成の期限を設定した自立計画書を策定するなど、効果的な取組が行われるよう努められたい。

なお、自立支援に資するものであっても、健康管理や家事などの生活指導など、日常生活の質の向上を主な目的とした取組については、技能修得費の対象としては認められないので留意されたい。

イ 高等学校等就学費

(7) 高等学校等就学費は、高等学校等に就学し卒業することが当該世帯の自立助長に効果的であると認められる場合について、原則として当該学校における正規の就学年限に限り認定すること。

なお、保護開始時に既に高等学校等に就学している場合には、原則として、正規の就学年限から既に就学した期間を減じた期間に限り認められるものであること。

(4) 高等学校等就学費基本額の計上にあたっては、保護開始月、変更月、停止月又は廃止月においても、月額全額を計上すること。

(7) 学校教育活動のために全ての生徒について学級費、生徒会費及び P T A 会費等（以下「学級費等」という。）として保護者が学校に納付する場合であって、保護の基準別表第 7 に規定する基本額によりがたいときは、学級費等について月額 **1,780** 円の範囲内において特別基準の設定があったものとして必要な額を認定して差しつかえない。

(エ) 教材代の認定を行う場合には、必要に応じて教材の購入リスト等の提出を求めるなど、必要とする実費の額の確認を行うこと。

正規の授業で使用する教科書等の範囲は、当

該授業を受講する全生徒が必ず購入することとなっている教科書、副読本の図書、ワークブック及び和洋辞典であること。

(ウ) 高等学校等に入学する生徒が、入学の際、入学準備のための費用を必要とする場合は、61,400円の範囲内において特別基準の設定があったものとして必要な額を認定して差しつかえないこと。この場合、原則として金銭給付によることとするが、現物給付によることが適当であると認められるときは現物給付によることとして差しつかえないこと。

(エ) 生徒が身体的条件、地理的条件又は交通事情により交通費を伴う方法による以外には通学する方法が全くないか、又はそれによらなければ通学がきわめて困難である場合においては、その通学のため必要な最小限度の交通費の額を計上すること。

(オ) 災害その他不可抗力により学用品を消失し、学用品を再度購入するが必要な場合には、26,500円の範囲内において特別基準の設定があったものとして必要な額を認定して差しつかえないこと。

また、同様に正規の授業で使用する教科書等を消失し、再度購入するが必要な場合には、上記の額に加えて、高等学校等就学費の教材代として支給対象となる範囲内において、必要な実費を認定して差し支えない。

問 (第7の 81) 高等学校等就学費の基本額は月額で表示されているが、被保護者が学用品、通学用品等を購入するために一時に経費を必要とするときは、数箇月分の高等学校等就学費を一括交付することとしてよいか。

答 就学費用の需要の実態にかんがみ、高等学校等就学費の支給額のある生徒の場合に限り、月額で表示された高等学校等就学費の基本額に当該学期の月数(学期の途中で保護を開始された生徒の場合は、開始月以後当該学期内の月数)を乗じて得た額の範囲内で必要な額を学用品等を購入する時期に支給して差しつかえない。

問 (第7の 82) 通学のため通学定期券を購入する必要がある場合、通学定期券は原則として6か月単位で購入させることとしてよいか。また、生徒が通学に際し、遠距離のため自転車を利用する必要がある場合は、自転車の購入費を認めてよい。

答 通学のための交通費は必要最小限度の実費を給付するものであり、最も経済的な経路及び方法により通学定期券を購入するよう指導されたい。

なお、給付の際については、通学定期券の写しを提出させるなど購入実績を確認されたい。

また、自転車の購入費についても、必要最小限度の額を、高等学校等就学費の交通費の実費として認めて差しつかえない。

問 (第7の 83) 特別支援学校の高等部に通学する生徒のうち、付添がなければ通学することができないか若しくはきわめて困難な者、又は高等学校等に通学する生徒のうち、身体的事情等により一定期間付添がなければ通学することができないか若しくはきわめて困難な者については、これに要する交通費の額を局長通知第7の8の(2)のイの(カ)により認定することとしてよろしいか。

答 お見込みのとおり取り扱って差しつかえない。

問 (第7の 84) 地方自治体や私立学校等により高等学校等の授業料の減免措置が講じられている場合、高等学校等就学費による授業料の計上はどのように行ったらよいか。

答 自治体等による授業料の減免については、金銭として直接被保護者が受け取るものではないが、本来課される授業料について、他から間接的にその費用が賄われるものであることから、恵与金の一形態として見なすことができる。

恵与金等が高等学校等の就学費にあてられる場合については、被保護世帯の自立更生にあてられるものとして収入として認定しないこととするともに、高等学校等就学費で賄いきれない費用に優先的に充当することを認める取扱いとしており、自治体等による授業料の減免についても、同様に取り扱うことが適当である。

したがって、減免措置が講じられている場合の高等学校等就学費の計上については、授業料の支

払いが免除される場合には、当該免除措置により授業料の需要が満たされることから、保護費により授業料を給付する必要はなくなり、授業料の一部が減額される場合には、当該減額分は保護の基準額では賄いきれない授業料に優先的に充当するものとし、減額後、実際に被保護世帯が支払う授業料について、保護の基準額を上限として給付して差しつかえない。

(3) 就職支度費

就職の確定した被保護者が、就職のため直接必要とする洋服類、履物等の購入費用を要する場合は、基準額の範囲内で必要な額を計上すること。

問（第7の18） 新規中卒等で就職の確定した者が就職地に赴くために要する交通費又は荷物の荷造費及び運賃について、生活扶助の移送費を適用してよいか。

答 就職することにより、生計の本拠を構える場合にかぎり局長通知第7の2の(8)のAの(イ)として生活扶助の移送費を計上して差しつかえない。

問（第7の22） 同一人に生業費と就職支度費を計上してよいか。

答 同一人の就職について生業費と就職支度費とを重複して計上することは認められない。

なお、大工、植木職等通常その職業に必要な道具等を自弁することとなっている職業につく者については、当該道具類の購入に要する経費と就職支度に要する経費とを生業費の基準額の範囲内で計上して差しつかえない。この場合、就職の支度に要する経費は就職支度費の基準額の範囲内で計上すること。

10 葬 祭 費

㊦ 別表第8 葬祭扶助基準

1 基 準 額

級 地 別	基 準 額	
	大 人	小 人
1 級 地 及 び 2 級 地	199,000円以内	159,200円以内
3 級 地	174,100円以内	139,300円以内

2 葬祭に要する費用の額が基準額をこえる場合であつて、葬祭地の市町村条例に定める火葬に要する費用の額が次に掲げる額をこえるときは、当該こえる額を基準額に加算する。

級 地 別	大 人	小 人
1 級 地 及 び 2 級 地	600円	500円
3 級 地	480円	400円

3 葬祭に要する費用の額が基準額をこえる場合であつて、自動車の料金その他死体の運搬に要する費用の額が次に掲げる額をこえるときは、19,700円から次に掲げる額を控除した額の範囲内において当該こえる額を基準額に加算する。

級 地 別	金 額
1 級 地 及 び 2 級 地	11,230円
3 級 地	9,830円

㊦ 第7

9 葬 祭 費

(1) 小人の葬祭に要する費用が保護の基準別表第8の1の小人の基準額をこえる場合であつて、当該地域の葬祭の実態が大人と同様であると認められるときは、保護の基準別表第8の1の基準額について大人の基準を特別基準の設定があつたものとして適用して差しつかえない。

(2) 法第18条第2項第1号に該当する死者に対し葬祭を行う場合は、葬祭扶助基準額表の額（火葬料等についての加算及び(1)により特別基準の設定があつた場合を含む。）に1,000円を加算した額を特別基準

の設定があったものとして、計上して差しつかえないこと。

- (3) 死亡診断又は死体検案に要する費用（文書作成の手数料を含む。）が5,100円をこえる場合は、葬祭扶助基準額表の額（火葬料等についての加算並びに(1)及び(2)により特別基準の設定があった場合を含む。）に当該こえる額を加算した額を、特別基準の設定があったものとして、計上して差しつかえないこと。
- (4) 火葬又は埋葬を行うまでの間、死体を保存するために特別な費用を必要とする事情がある場合は、必要最小限度の実費を特別基準の設定があったものとして計上して差しつかえないこと。
- (5) 妊娠4箇月以上で死産した場合には、葬祭費を認定して差しつかえないこと。
- (6) 身元が判明しない自殺者等に対して市町村長が葬祭を行った場合には、葬祭扶助の適用は認められないこと。

問（第7の15） 葬祭費の大人、小人の別は、何を基準とするか。

答 火葬料等について市町村条例に区別の定めのある場合は当該条例により、条例のない場合はその地域の慣行による。

問（第7の16） 民生委員が葬祭を行った場合には、葬祭扶助を適用してよいか。

答 死亡者の近隣の民生委員が個人的に行った場合には適用して差しつかえない。ただし、自殺者等があった場合において、その地の民生委員が市町村長等の依頼により行ったときは、市町村長が葬祭を行ったものとして、葬祭扶助の適用は認められない。

問（第7の17） 自殺者等について市町村長が埋葬を行った場合において、埋葬の時より後に葬祭扶助の申請があったときは、これを適用してよいか。

答 当該埋葬後に必要とされる範囲内で葬祭扶助の適用を行うことは差しつかえない。

問（第7の21） 葬祭地において、火葬に要する費用の額を定めた条例のない場合の取扱いはどうか。

答 葬祭地に隣接する市町村の条例に定めるところによらるたい。

問（第7の49） 健康保険法等医療保険制度により葬祭扶助基準を若干上回る埋葬料、葬祭費又は葬祭料が支給される場合であつて、当該被保険者の職場における交際等から判断して真にやむを得ないと認められるときは、当該埋葬料等のうち実際に葬祭に当てられた額を収入認定の対象としないこととし、かつ、葬祭に係る需要はこれによって消滅したものとして取り扱って差しつかえないか。

答 お見込みのとおり取り扱って差しつかえない。

問（第13の1） 施行規則第22条第2項の規定による相続財産管理人の選任の請求は、保護の実施機関が民法第952条第1項にいう利害関係人として行うものと解してよいか。

答 お見込みのとおりである。

問（第13の2） 葬祭を行う扶養義務者がいないため葬祭扶助を行った場合において、死者名義の郵便貯金通帳があるときは、どのように処分したらよいか。

答 郵便貯金通帳は、法第76条第1項にいう死者の遺留物品と解すべきであるが、とくに債権の証拠物件であることにかんがみ、別紙1郵政省貯金局長通知の手續に準じて郵便局から払いもどしを受けるのが適当である。（別紙1…略）

11 特別基準の設定による費用

㊦ 第2

要保護者に特別の事由があつて前項の基準〔各扶助の基準〕によりがたいときは、厚生労働大臣が特別の基準を定める。

㊦ 第7

10 特別基準の設定による費用

- (1) 特別基準の設定があつたときは、その額のとおり計上すること。
- (2) 特別基準の設定があつたものとして取り扱う費用の認定については、各費目に関する告示及び本職通知の規定に従い、かつ、次のアからオまでによって、必要な額を認定すること。なお、実施手續等については、(3)によること。

ア 特別基準設定による費用の認定と援助方針

実施機関は、当該被保護世帯の援助方針に基づいて判断した結果、当該被保護世帯について、必要不可欠な特別の需要があると認められる場合に限り、特別基準の設定による費用を認定できるものであること。

イ 特別需要額の認定

需要額の認定については、必要最小限度の額を認定すること。

ウ 他法他施策の活用

生活福祉資金その他の他法他施策による給付等であって当該特別需要をみたますべきものについては、事前にその有無を検討し、その活用をはかるべきものであること。

エ 扶養義務者その他からの援助

特別基準は、臨時又は特殊な需要に対応して設定されるものであるから、通常の扶養義務履行の有無とは別に、当該特殊需要に対する、扶養義務者その他からの臨時の援助の有無について、あらかじめ調査すること。

オ 迅速な事務処理

特別基準による費用の設定が事後処理にならないよう厳に留意すること。

- (3) 特別基準が設定されたものとして取り扱う費用等の認定にあたっては、次に掲げる資料を審査して認定すること。

ア 保護台帳

イ 保護決定調書

ウ その他生活の現況、今後の自立更生等援助方針、特別基準設定の必要性、計画及び費用等の妥当性、他法他施策の活用の可能性、扶養義務者等其他からの援助の可能性等を判断するために必要な資料

エ 計画書、見積書等

(ア) 障害者加算：障害名、障害等級、障害の状況が確認できる書面、介護計画書（標準的な週における介護内容が確認できる書面）、領収書（更新時）

(イ) 配電、水道、井戸または下水道設備費：設備計画書、関係図面、経費見積書、水質検査書、代替措置の検討

(ウ) 敷金等：転居指導等のケース記録の写、敷金等の契約内容が確認できる書面

(エ) 住宅維持費：補修計画書、図面、写真、経費見積書

(オ) 生業費、技能修得費：生業（技能修得）計画書、経費見積書

(カ) 扶助費の重複支給：理由申立書、関係官署の証明書

(キ) 治療材料：医師の診断書、医師の意見書、経費見積書

- (4) 各費目に関する告示及び本職通知の規定による基準によりがたい特別の事情がある場合には、厚生労働大臣に情報提供すること。

第 8 収入の認定

1 収入に関する申告及び調査

◎ 第 8

収入の認定は次により行うこと。

1 収入に関する申告及び調査

- (1) 要保護者が保護の開始又は変更の申請をしたときのほか、次のような場合に、当該被保護者の収入に関し、申告を行わせること。

ア 実施機関において収入に関する定期又は随時の認定を行おうとするとき。

イ 当該世帯の収入に変動のあったことが推定され又は変動のあることが予想されるとき。

- (2) 収入に変動があるときの申告については、あらかじめ被保護者に申告の要領、手続等を十分理解させ、つとめて自主的な申告を励行させること。

- (3) 収入に関する申告は、収入を得る関係先、収入の有無、程度、内訳等について行わせるものとし、保護の目的達成に必要な場合においては、上記の申告を書面で行わせること。なお、その際これらの事項を証明すべき資料があれば、必ずこれを提出させること。

- (4) 収入の認定にあたっては、(1)から(3)までによるほか、当該世帯の預金、現金、動産、不動産等の資産の状況、世帯員の生活歴、技能、稼働能力等の状況、社会保険その他社会保障的施策による受給資格

の有無、扶養義務者又は縁故者等からの援助及びその世帯における金銭収入等のすべてについて綿密な調査を行い、必要に応じて関係先につき調査を行う等収入源について直接に把握すること。

問（第8の55） 収入認定の取り扱いに当たっては、次官通知第8の1において、要保護者に申告を行わせることとなっているが、申告の時期等について具体的に示されたい。

答 収入に関する申告は、法第61条により被保護者の届出義務とされていることから、次官通知第8の1の(2)により、つとめて自主的な申告を励行させる必要がある。

また、収入に関する申告の時期及び回数については、実施機関において就労可能と判断される者には、就労に伴う収入の有無にかかわらず原則として毎月、実施機関において就労困難と判断される者には、少なくとも12箇月ごとに行わせること。

なお、被保護者が常用雇用されている等各月毎の収入の増減が少ない場合の収入申告書の提出は、3箇月ごとで差しつかえないこと。

さらに、上記のほか、保護の決定実施に必要な場合は、その都度申告を行わせること。

2 収入額の認定の原則

⑧ 第8

2 収入額の認定の原則

収入の認定は、月額によることとし、この場合において、収入がほぼ確実に推定できるときはその額により、そうでないときは前3箇月間程度における収入額を標準として定めた額により、数箇月若しくはそれ以上の長期間にわたって収入の実情につき観察することを適当とするときは長期間の観察の結果により、それぞれ適正に認定すること。

3 認定指針

(1) 就労に伴う収入

ア 勤労（被用）収入

⑨ 第8

3 認定指針

(1) 就労に伴う収入

ア 勤労（被用）収入

(7) 官公署、会社、工場、商店等に常用で勤務し、又は日雇その他により勤労収入を得ている者については、基本給、勤務地手当、家族手当及び超過勤務手当等の収入総額を認定すること。

(4) 勤労収入を得るための必要経費としては、(4)によるほか、社会保険料、所得税、労働組合費、通勤費等の実費の額を認定すること。

⑩ 第8

1 収入認定の取扱い

(1) 勤労（被用）収入

ア 常用収入

(7) 官公署、会社、工場、商店等に常用で勤務している者の収入については、本人から申告させるほか、前3箇月分及び当該月分の見込みの基本給、勤務地手当、家族手当、超過勤務手当、各種源泉控除等の内訳を明記した給与証明を徴すること。ただし、給与証明書を徴することを適当としない場合には、給与明細書等をもって、これに代えても差しつかえないこと。

(4) 給与証明書の内容に不審のある場合又は証明額が同種の被用者の通常収入額と考えられる額より相当程度低いと判断される場合には、直接事業主について具体的内容を調査確認すること。

(4) 社会保険の被保険者については、10月又は11月に社会保険官署、健康保険組合等につき標準報酬との照合を行うこと。

(5) 昇給及び賞与の時期については、給与先につきあらかじめ調査を行い記録しておくこと。

(4) 就職月、昇給月及び賞与の支給月には、本人から申告させるとともに、給与証明書を徴すること。

(4) 賞与は、全額を支給月の収入として認定すること。

と。ただし、これによることが適当でない場合は、当該賞与額からその月において適用する特別控除額を差し引いた額を、支給月から引続く6箇月以内の期間にわたって分割して認定するものとする。

イ 日雇収入

(7) 日雇で就労する者の収入については、本人から申告させるほか、前3箇月分の就労日数に関して公共職業安定所の証明書を徴すること。この場合において、公共職業安定所から証明を徴することが困難な場合には、直接同所におもむいて聞取調査を行うこと。

(イ) 本人から申告された就労日数が当該地域の平均就労日数以上である場合は、申告された日数により収入総額を認定すること。

(ロ) 申告された就労日数が当該地域の平均就労日数未満である場合は、就労できない理由を確かめ、正当な理由がないときは、就労日数を平均就労日数まで増加するように文書で指示したうえ、その実際の就労日数による収入総額を認定すること。

(ハ) 本人の申告する賃金に不審のある場合は、直接事業主から証明書を徴するか又は事業主につき聞取調査を行い確認すること。

(ニ) 夏季手当及び年末手当については(1)のアの(イ)及び(ロ)によること。

ウ 臨時又は不特定就労収入

(7) 臨時又は不特定な就労による収入については、その地域における同様の就労状況にある者の収入の状況、その世帯の日常生活の状況等を調査したうえ、収入総額を認定すること。

(イ) 申告された就労日数又は賃金に不審のある場合は、雇主の全部又は一部について具体的内容を聞取調査し、確認すること。

エ 必要経費として控除すべき労働組合費の範囲

次官通知第8の3の(1)のアにいう「労働組合費」は、当該労働組合の組合員の全員が、各月において徴収される組合費の実費をいうものであり、臨時に徴収されるものを含まないものであること。

問(第8の1) 勤労収入の経費として職場の親睦会費は認められないか。

答 勤労控除の基礎控除額には、職場の慶弔等交際費が含まれているから、重ねて親睦会費を控除することは認められない。

問(第8の25) 被保護者から申告のあった収入額に不審がある場合の取扱いをどうするか。

答 申告のあった収入が、被保護者の稼働能力、就労状況、当該地域の同種の業務についての賃金水準等の客観的事実にてらし不審があり、当該申告による収入額を基礎として認定を行うことは適当でないと判断される場合であって、当該被保護者及び関係先についてさらに調査を行った結果、なお、不審を解くに足る正当な理由及び立証に欠けると認められるときは、当該地域の同種の業務及び技能に対して支払われている賃金その他について綿密な調査を行い、これを基礎に推定した収入額をもって認定して差しつかえない。

問(第8の46) 給食付(給食費を徴されていない場合に限る。)で稼働収入を得ている場合の給食の取扱いいかん。

答 居宅基準生活費の第1類の経費に75パーセントを乗じて得た額にその者の総食数に占める就労先で受ける給食数の割合(以下「給食の割合」という。)を乗じて得た額を収入に加算すること。

ただし、給食の割合が3分の1(1日1食)程度以下である場合は、この限りでない。

イ 農業収入

② 第8-3-(1)

イ 農業収入

(7) 農業により収入を得ている者については、すべての農作物につき調査し、その収穫量に基づいて認定すること。

(イ) 農業収入を得るための必要経費としては、(4)によるほか、生産必要経費として、小作料、農業災害補償法による掛金、雇入費、農機具の修理費、少額農具の購入費、納屋の修理費、水利組合費、肥料代、種苗代、薬剤費等についてその実際必要額を認定す

ること。

⑤ 第8-1

(2) 農業収入

ア 農作物の収穫量は、本人の申立て、市町村の調査又は意見及び品目別作付面積に町村別等級地別平均反収を乗じたものを勘案して決定するものとし、三者の数字に著しい相違がある場合は、さらに農業協同組合、集荷組合、実行組合、農業改良普及員、民生委員等について調査のうえ、決定すること。

イ 保護開始月における保有農作物は、収穫量と同様の取扱いを行うこと。

ウ 農業収入を得るための生産必要経費のうち肥料代、種苗代及び薬剤費については、次に掲げる比率（農林水産省農作物生産費調査による。）に準拠して各福祉事務所ごとに比率を認定したうえ、これをエによる収穫高に乗じて認定すること。

玄米（水稲） 9% 小麦 23%

玄米（陸稲） 26% その他の農作物 20%

エ 農業収入は、次の算式により認定すること。

(7) 主食（米、小麦、裸麦、大麦、そば等当該地域の食生活の実態によること。）

収穫高 = 販売価格 × 収穫量

収穫高 - 生産必要経費 = 収入

(4) 野菜

販売価格 × 売却量 + 自給量を金銭換算した額（別表「金銭換算表」の野菜の額に自給割合を乗じて得た額をいう。） - 必要経費 = 収入

オ 各福祉事務所ごとに管内の町村別、品目別、等級地別平均反収及び町村別、品目別農作物販売価格を調査し、調整又は補正しておくこと。

カ 余剰野菜について、その地域に需要がなくこれを売却することができないときは、今後の耕作において穀類等換金の途の広い農作物を作付けするよう指導するとともに、その作の収穫に限り自家消費を認めても差しつかえないこと。

キ 農業収入は、収入があった時から将来に向い、原則として12分の1ずつの額を認定すること。

問（第8の3） 農業災害補償法による共済金については、一般の農業収入と同様に必要経費を控除でき

ないか。

答 同法による共済金のうち、農作物、蚕繭及び農作物にかかるものは、当該共済目的から得られた農業収入とみなし、認定額の月割及び必要経費の認定を行って差しつかえない。

問（第8の4） 農作物の必要経費中肥料費、種苗代及び薬剤費は、必ず率により認定しなければならないか。また、逆に右以外の必要経費については、率を用いてはいけな

答 前段については、保護の実施機関ごとに客観的資料に基づき定められた必要経費率によることを原則とするが、この率によるよりも正確かつ便宜な方法があれば、必ずしも率によらなくてもよい。後段については、実費によることを原則とするが、地域ごとに正確かつ妥当な率を設定しうる場合には、率によっても差し支えない。

問（第8の5） 農業用噴霧器（比較的高額なもの）を近隣で共同購入する場合においてその世帯負担額が少額であるときは、農業収入を得るための必要経費として認めてよい

答 世帯の負担額が、少額農具の購入費程度の少額のものである場合には必要経費として認めて差しつかえない。

問（第8の6） 農業収入を得るための必要経費としての納屋の修理費又は農業以外の自営収入を得るための必要経費としての店舗の修理費については、どの程度まで認めてよい

答 納屋の修理費又は店舗の修理費は、生業扶助の額の範囲内において必要最小限度の額を認定すること。

別表

金銭換算表

	1 級地 - 1		1 級地 - 2		2 級地 - 1		2 級地 - 2		3 級地 - 1		3 級地 - 2	
	魚介	野菜	魚介	野菜	魚介	野菜	魚介	野菜	魚介	野菜	魚介	野菜
0 歳 ~ 2 歳	円 4,560	円 3,970	円 4,350	円 3,790	円 4,150	円 3,610	円 3,940	円 3,430	円 3,740	円 3,260	円 3,530	円 3,080
3 歳 ~ 5 歳	7,580	6,460	7,240	6,170	6,900	5,880	6,560	5,590	6,220	5,300	5,870	5,010
6 歳 ~ 11 歳	9,890	8,410	9,440	8,030	9,000	7,650	8,550	7,270	8,110	6,900	7,660	6,520
12 歳 ~ 19 歳	12,400	10,560	11,840	10,080	11,280	9,610	10,730	9,130	10,170	8,660	9,610	8,180
20 歳 ~ 40 歳	10,440	8,880	9,970	8,480	9,500	8,080	9,030	7,680	8,560	7,280	8,090	6,880
41 歳 ~ 59 歳	9,790	8,350	9,350	7,970	8,910	7,600	8,470	7,220	8,030	6,850	7,590	6,470
60 歳 ~ 69 歳	9,470	8,070	9,040	7,710	8,620	7,340	8,190	6,980	7,770	6,620	7,340	6,250
70 歳 ~	8,420	7,150	8,040	6,830	7,660	6,510	7,280	6,180	6,900	5,860	6,530	5,540

ウ 農業以外の事業（自営）収入

㊦ 第8-3-(1)

ウ 農業以外の事業（自営）収入

(7) 農業以外の事業（いわゆる固定的な内職を含む。）により収入を得ている者については、その事業の種類に応じて、実際の収入額を認定し、又はその地域の同業者の収入の状況、その世帯の日常生活の状況等から客観的根拠に基づいた妥当性のある認定を行うこと。

(4) 農業以外の事業収入を得るための必要経費は、(4)によるほか、その事業に必要な経費として店舗の家賃、地代、機械器具の修理費、店舗の修理費、原材料費、仕入代、交通費、運搬費等の諸経費についてその実際必要額を認定すること。ただし、前記家賃、地代等の額に住宅費を含めて処理する場合においては、住宅費にこれらの費用を重ねて計上してはならないこと。また、下宿間貸業であって家屋が自己の所有でなく、家賃を必要とする場合には、下宿間貸代の範囲内において実際家賃を認定して差し支えないこと。

㊦ 第8-1

(3) 農業以外の事業（自営）収入

ア 農業以外の事業収入については、前3箇月分及び当該月の見込みにつき、本人から申告させるほか、物品販売業（店売り、行商又は露店）、製造業及び加工業については、会計簿、商品又は原材料の仕入先、製品の販売先等について、運搬業（小運送）、修理（自転車修理、いかげ業、桶屋）及びサービス業（理髪業、靴磨等）については、正確なものがある場合は会計簿について、建築造園業（大工、左官、植木職等）については、一定した仕事先がある場合はその仕事先について、それぞれの実際の収入の状況を書面又は聞き取りにより調査し、さらに市町村等税務関係機関の調査又は意見をも参考とすること。

イ 魚介による収入は、次の算式により認定すること。
売却量×販売価格＋自給量を金銭に換算した額（別表「金銭換算表」の魚介の額に自給割合を乗じて得た額をいう。）－必要経費＝収入

ウ 養殖漁業等で年間の一時期のみの収穫で収入を得ている場合は、収入があった時から将来に向かい、原則として12分の1ずつの額を認定すること。

問（第8の2） 125cc以下のオートバイ、原動機付自転車又は通勤用・事業用自動車の保有の認められた者については、これの利用に伴う燃料費、修理費、自動車損害賠償保障法に基づく保険料及び任意保険料、軽自動車税等を必要経費として勤労・事業収入から控除してよいか。

答 必要最小限度の額を必要経費として控除して差しつかえない。

なお、任意保険料については対人・対物賠償に係る保険料に限るものである。

エ その他不安定な就労による収入

㊦ 第8-3-(1)

エ その他の不安定な就労による収入

知己、近隣等よりの臨時的な報酬の性質を有する少額の金銭その他少額かつ不安定な稼働収入がある場合、その額（受領するために交通費等を必要とする場合はその必要経費の額を控除した額とする。）が月額8,000円をこえるときは、そのこえる額を収入として認定すること。

問（第8の19） 少額かつ不安定の稼働収入は合算額8,000円まで控除されるが、この合算額は世帯単位か、又は個人単位であるか。

答 8,000円の限度額は、個人ごとに算定される額である。

(2) 就労に伴う収入以外の収入

ア 恩給、年金等の収入

㊦ 第8-3

(2) 就労に伴う収入以外の収入

ア 恩給、年金等の収入

(7) 恩給、年金、失業保険金その他の公の給付（地方公共団体又はその長が条例又は予算措置により定期的に支給する金銭を含む。）については、その実際の受給額を認定すること。

ただし、(3)のオ、ケに該当する額については、この限りではない。

(4) (7)の収入を得るために必要な経費として、交通費、所得税、郵便料等を要する場合又は受給資格の証明のために必要とした費用がある場合は、その実際必要額を認定すること。

㊦ 第8-1

(4) 恩給、年金等の収入

ア 恩給法、厚生年金保険法、船員保険法、各種共済組合法、国民年金法、児童扶養手当法等による給付で、6箇月以内の期間ごとに支給される年金又は手当については、実際の受給額を原則として受給月から次の受給月の前月までの各月に分割して収入認定すること。

イ 老齢年金等で、介護保険法第135条の規定により介護保険料の特別徴収の対象となるものについては、特別徴収された後の実際の受給額を認定すること。

問(第8の51) 恩給、年金等の額が改定され、当該改定時期が支払期月と一致せず1期月における支給額に、改定前の額と改定後の額が含まれる場合は、順を追って充当していくこととして差しつかえないか。

答 恩給、年金等の額の改定時期と支払期月が一致しない場合は、局長通知第8の1の(4)により収入認定することにより保護の停止又は廃止となる場合を除き、お見込みのとおり取り扱って差しつかえないこと。

イ 仕送り、贈与等による収入

㊦ 第8-3-(2)

イ 仕送り、贈与等による収入

(7) 他からの仕送り、贈与等による金銭であって社会通念上収入として認定することを相当としないもののほかは、すべて認定すること。

(イ) 他からの仕送り、贈与等による主食、野菜又は魚介は、その仕送り、贈与等を受けた量について、農業収入又は農業以外の事業収入の認定の例により金銭に換算した額を認定すること。

(ウ) (7)又は(イ)の収入を得るために必要な経費としてこれを受領するための交通費等を必要とする場合は、その実際必要額を認定すること。

ウ 財産収入

㊦ 第8-3-(2)

ウ 財産収入

(7) 田畑、家屋、機械器具等を他に利用させて得られ

る地代、小作料、家賃、間代、使用料等の収入については、その実際の収入額を認定すること。

(イ) 家屋の補修費、地代、機械器具等の修理費、その他(ア)の収入をあげるために必要とする経費については、最小限度の額を認定すること。

エ その他の収入

㊦ 第8-3-(2)

エ その他の収入

(7) 地方公共団体又はその長が年末等の時期に支給する金銭(ア又は(3)のエ、ケ、コ若しくはサに該当するものを除く。)については、その額が世帯合算額8,000円(月額)をこえる場合、そのこえる額を収入として認定すること。

(イ) 不動産又は動産の処分による収入、保険金その他の臨時的収入((3)のオ、カ又はキに該当する額を除く。)については、その額(受領するために交通費等を必要とする場合は、その必要経費の額を控除した額とする。)が世帯合算額8,000円(月額)をこえる場合、そのこえる額を収入として認定すること。

㊦ 第8-1

(5) その他の収入

(1)から(4)までに該当する収入以外の収入はその全額を当該月の収入として認定すること。

ただし、これによることが適当でない場合は、当該月から引き続き6箇月以内の期間にわたって分割認定するものとする。

(3) 収入として認定しないものの取扱い

㊦ 第8-3

(3) 次に掲げるものは、収入として認定しないこと。

ア 社会事業団体その他(地方公共団体及びその長を除く。)から被保護者に対して臨時的に恵与された慈善的性質を有する金銭であって、社会通念上収入として認定することが適当でないもの

イ 出産、就職、結婚、葬祭等に際して贈与される金銭であって、社会通念上収入として認定することが適当でないもの

ウ 他法、他施策等により貸し付けられる資金のうち当該被保護世帯の自立更生のために当てられる額

エ 自立更生を目的として恵与される金銭のうち当該

被保護世帯の自立更生のために当てられる額

オ 災害等によって損害を受けたことにより臨時的に受ける補償金、保険金又は見舞金のうち当該被保護世帯の自立更生のために当てられる額

カ 保護の実施機関の指導又は指示により、動産又は不動産を売却して得た金銭のうち当該被保護世帯の自立更生のために当てられる額

キ 死亡を支給事由として臨時的に受ける保険金（オに該当するものを除く。）のうち当該被保護世帯の自立更生のために当てられる額

ク 高等学校等で就学しながら保護を受けることができるものとされた者の収入のうち、生活保護法による保護の基準（昭和38年厚生省告示第158号）別表第7「生業扶助基準」に規定する高等学校等就学費の支給対象とならない経費及び高等学校等就学費の基準額でまかないきれない経費であって、その者の就学のために必要な最小限度の額（ウからキまでに該当するものを除く。）

問 （第8の58） 高等学校等で就学しながら保護を受けることができるものとされた者がアルバイト等の収入を得ている場合、私立高校における授業料の不足分、修学旅行費、クラブ活動費にあてられる費用については、就学のために必要な費用として、必要最小限度の額を収入として認定しないこととしてよいか。

答 お見込みのとおり取り扱って差しつかえない。

ケ 心身障害児（者）、老人等社会生活を営むうえで特に社会的な障害を有する者の福祉を図るため、地方公共団体又はその長が条例等に基づき定期的に支給する金銭のうち支給対象者1人につき8,000円以内の額（月額）

コ 独立行政法人福祉医療機構法第12条第1項第10号に規定する心身障害者扶養共済制度により地方公共団体から支給される年金

サ 地方公共団体又はその長から国民の祝日たる敬老の日又は子供の日の行事の一環として支給される金銭

シ 現に義務教育を受けている児童が就労して得た収入であって、収入として認定することが適当でないもの

ス 戦傷病者戦没者遺族等援護法による弔慰金又は戦没者等の遺族に対する特別弔慰金支給法による特別弔慰金

セ 未帰還者に関する特別措置法による弔慰料（同一世帯内に同一の者につきスを受けることができる者がある場合を除く。）

ソ 原子爆弾被爆者に対する援護に関する法律により支給される医療特別手当のうち36,060円並びに同法により支給される原子爆弾小頭症手当、健康管理手当、保健手当及び葬祭料

タ 戦没者等の妻に対する特別給付金支給法、戦傷病者等の妻に対する特別給付金支給法又は戦没者の父母等に対する特別給付金支給法により交付される国債の償還金

チ 公害健康被害の補償等に関する法律により支給される療養手当及び同法により支給される次に掲げる補償給付ごとに次に定める額

(7) 障害補償費（介護加算額を除く。）

障害の程度が公害健康被害の補償等に関する法律施行令第10条に規定する表（以下「公害障害等級表」という。）の特級又は1級に該当する者に支給される場合

33,790円

障害の程度が公害障害等級表の2級に該当する者に支給される場合

16,900円

障害の程度が公害障害等級表の3級に該当する者に支給される場合

10,150円

(4) 遺族補償費 33,790円

◎ 第8

2 収入として認定しないものの取扱い

(1) 社会事業団体その他が被保護者に対して支給する金銭であって、当該給付の資金が、地方公共団体の予算措置によりまかなわれているものは、次官通知第8の3の(3)のアとして取り扱うことは認められないこと。

(2) 被保護者に対して現物が給与された場合は、被贈与資産として取り扱い、処分すべきものがあれば、売却させてその収入を認定すること。

ただし、就労の対価として現物が給与されたときは、その物品の処分価値により金銭換算のうえ、500円を控除した額を就労収入として認定すること。

問（第8の39） 局長通知第8の2の(2)のただし書に関し、就労先から主食、野菜又は魚介を支給された場合は、どのように取り扱うべきか。

答 局長通知第8の2の(2)のただし書きにより取り扱うことは認められず、主食、野菜及び魚介については、農業収入又は農業以外の事業収入の認定の例により金銭に換算した額を就労収入として認定することとされたい。

(3) 貸付資金のうち当該被保護世帯の自立更生のために当てられることにより収入として認定しないものは次のいずれかに該当し、かつ、貸付けを受けるに当たって保護の実施機関の事前の承認があるものであって、現実に当該貸付けの趣旨に即し使用されているものに限ること。

- ア 事業の開始又は継続、就労及び技能修得のための貸付資金
- イ 就学資金（高等学校等就学費の支給対象とならない経費及び高等学校等就学費の基準額でまかないきれない経費であって、その者の就学のために必要な最小限度の額にあてられる場合に限る。）
- ウ 医療費又は介護費貸付資金
- エ 結婚資金
- オ 国若しくは地方公共団体により行われる貸付資金又は国若しくは地方公共団体の委託事業として行われる貸付資金であって、次に掲げるもの
 - (7) 住宅資金又は転宅資金
 - (4) 老人又は身体障害者等が機能回復訓練器具及び日常生活の便宜を図るための器具を購入するための貸付資金
 - (9) 配電設備、給排水設備又は暖房設備のための貸付資金
 - (8) 国民年金の受給権を得るために必要な任意加入保険料のための貸付資金

問（第13の3） 国若しくは地方公共団体により貸し付けられる住宅資金又は国若しくは地方公共団体の委託事業として貸し付けられる住宅資金と本法による住宅扶助との関係をどう取り扱うべきか。

答 設問にかかる住宅資金の貸付けを受けるに当たっての承認は、本法による扶助の対象とはなりがたい需

要について行うものであり、貸付金をもって本法の給付に代替させる趣旨のものではない。

問（第8の11） 生活福祉資金貸付制度要綱に基づく災害援護資金及び災害弔慰金の支給等に関する法律に基づく災害援護資金は、当該被保護世帯の自立更生のために当てられるものとして取り扱って差しつかえないか。

答 局長通知第8（収入の認定）の2及び同通知第8の4の(3)に該当する場合には、それぞれ収入として認定せず又は償還金を収入から控除する取扱いを行って差しつかえない。

問（第8の59） 保護開始時点で既に就学資金の貸付を受けていた場合、高等学校の就学に関する需要は満たされているものとして、高等学校等就学費は支給しないこととしてよいか。

答 高等学校等就学費については、被保護世帯の自立を支援する観点から、貸付を受けなくとも高等学校への就学が可能となるよう、生活保護において積極的に給付を行うものである。

したがって、既に就学資金の貸付を受けている場合であっても、保護開始時点において貸付内容の変更が可能であれば、高等学校等就学費の基準額の範囲内で就学に必要な経費が賄える場合については貸付の停止を、高等学校等就学費で賄いきれない経費が必要な場合については当該経費にあてられる必要最小限度の額に貸付額を変更し、その上で高等学校等就学費を給付することとされたい。

また、保護開始時点において貸付内容の変更が困難な場合であって、保護開始後に貸付金を受領する場合は、当該貸付金のうち高等学校等就学費により賄われる部分について、貸付金の受領後直ちに償還し、その上で高等学校等就学費を給付するとともに、実際に償還が行われているか確認を行うこと。

なお、貸付契約の内容等により、貸付内容の変更や貸付期間中の償還が困難な場合については、当該貸付金は高等学校等の就学にあてられるものとして収入として認定しないとともに、高等学校等就学費の支給を行わないこととして取り扱って差しつかえない。

問（第8の21） 義務教育以外の教育を行う学校で就学する者がいる世帯で世帯員以外の絶対的扶養義務者から当該就学者の教育費に当てるべきものとして仕送りを受けている場合は、その仕送りを、当該就学者の収入として取り扱ってよいか。局長通知第1の3の関連でお尋ねする。

答 設例の場合、就学する者に優先して扶養を受けるべき事情があると明らかに認められる者（たとえば当該扶養義務者と生活保持義務関係にある者）が同一世帯内にいるときを除き、当該仕送りのうち教育費にあてられる部分を就学者の収入として取り扱って差しつかえない。

問（第8の10） 引揚者給付金等支給法、農地被買収者等に対する給付金の支給に関する法律又は引揚者等に対する特別交付金の支給に関する法律による国債の政府買上げにより償還金収入を得たものが、その収入を自立更生のための資金として活用すると申し立てた場合これを収入として認定しないでよいか。

答 保護の実施機関が具体的な自立更生計画を根拠として現実に自立更生資金として活用されることを確認した場合に限り差しつかえない。

(4) 自立更生のための恵与金、災害等による補償金、保険金若しくは見舞金、指導、指示による売却収入又は死亡による保険金のうち、当該被保護世帯の自立更生のためにあてられることにより収入として認定しない額は、直ちに生業、医療、家屋補修等自立更生のための用途に供されるものに限ること。

ただし、直ちに生業、医療、家屋補修、就学等にあてられない場合であっても、将来それらにあてることを目的として適当な者に預託されたときは、その預託されている間、これを収入として認定しないものとする。

また、当該金銭を受領するために必要な交通費等及び補償金等の請求に要する最小限度の費用は、必要経費として控除して差しつかえない。

(5) (3)の承認又は(4)の収入として認定しない取扱いを行うに際して、当該貸付資金、補償金等が当該世帯の自立更生に役立つか否かを審査するため必要があるときは、自立更生計画を徴すること。

問（第8の40） 局長通知第8の2の(3)及び(4)にいう自立更生のための用途に供される額の認定は、どのような基準によるべきか。

答 被保護世帯の自立更生のための用途に供されるものとしては、次に掲げる経費にあてられる額を認めるものとする。これによりがたい特別の事情がある場合は、厚生労働大臣に情報提供すること。

なお、この場合、恵与された金銭又は補償金等があてられる経費については、保護費支給又は就労に伴う必要経費控除の必要がないものであること。

(1) 被保護者が災害等により損害を受け、事業用施設、住宅、家具什器等の生活基盤を構成する資産が損われた場合の当該生活基盤の回復に要する経費又は被保護者が災害等により負傷し若しくは疾病にかかった場合の当該負傷若しくは疾病の治療に要する経費

(2) (1)に掲げるもののほか、実施機関が当該被保護世帯の構成、世帯員の稼働能力その他の事情を考慮し、次に掲げる限度内において立てさせた自立更生計画の遂行に要する経費

ア 当該経費が、事業の開始又は継続、技能修得等生業にあてられる場合は、生活福祉資金の更生資金の貸付限度額に相当する額

イ 当該経費が、医療にあてられる場合は、医療扶助基準による医療に要する経費及び医療を受けることに伴って通常必要と認められる経費の合算額

ウ 当該経費が介護に充てられる場合は、生活福祉資金の療養・介護資金の貸付限度額に相当する額

エ 当該経費が、家屋補修、配電設備又は上下水道設備の新設、住宅扶助相当の用途等にあてられる場合は、生活福祉資金の住宅資金の改修費の貸付限度額に相当する額

オ 当該経費が就学等にあてられる場合は、次に掲げる額

(ア) 当該経費が幼稚園等での就園にあてられる場合は、入園料及び保育料その他就園のために必要と認められる最小限度の額

(イ) 当該経費が義務教育就学にあてられる場合は、入学の支度、学習図書、運動用具等の購

入、珠算課外学習、修学旅行参加等就学に伴って社会通念上必要と認められる用途にあてられる最小限度の実費額

(ウ) 当該経費が高等学校等、夜間大学又は技能修得費（高等学校等就学費を除く）の対象となる専修学校若しくは各種学校での就学にあてられる場合は、入学の支度及び就学のために必要と認められる最小限度の額（貸付金については、原則として、高等学校等就学費の支給対象とならない経費及び高等学校等就学費の基準額でまかないきれない経費であって、その者の就学のために必要な最小限度の額にあてられる場合に限る。）

カ 当該経費が、結婚にあてられる場合は寡婦福祉資金の結婚資金の貸付限度額に相当する額

キ 当該経費が弔慰にあてられる場合は、公害健康被害の補償等に関する法律による葬祭料の額

ク 当該経費が、当該世帯において利用の必要性が高い生活用品であって、保有を容認されるものの購入にあてられる場合は、直ちに購入にあてられる場合限り、必要と認められる最小限度の額

ケ 当該経費が障害（児）者の通院、通所及び通学のために保有を容認される自動車の維持に要する費用にあてられる場合は、当該自動車の利用に伴う燃料費、修理費、自動車損害賠償保障法に基づく保険料、対人・対物賠償に係る任意保険料及び道路運送車両法による自動車の検査に要する費用等として必要と認められる最小限度の額

コ 当該経費が国民年金受給権を得るために充てられる場合は、国民年金の任意加入保険料の額

問（第8の60） 恵与金等の収入が、高等学校等就学費の支給対象とならない経費及び高等学校等就学費の基準額でまかないきれない経費であって、その者の就学のために必要な最小限度の額にあてられる場合については、高等学校等就学費は基準額どおり計上することとしてよいか。

答 お見込みのとおり取り扱って差しつかえない。

ただし、恵与金等の収入を当該経費にあてた上で、なお余剰金が生じた場合については、当該余剰金は収入充当順位に関係なく高等学校等就学費

に充当することとし、高等学校等就学費の基準額と当該余剰金の差額を、保護費の高等学校等就学費として計上されたい。

問（第8の41） 扶養義務者からの援助金はすべて「他から恵与される金銭」として取り扱うことは認められないか。

答 扶養義務者からの援助金は、その援助が、当該扶養義務者について期待すべき扶養の程度をこえ、かつ、当該被保護世帯の自立更生のためにあてべきことを明示してなされた場合に限り、「自立更生を目的として恵与された金銭」に該当するものとして取り扱って差しつかえない。

問（第8の42） 雇用保険法第57条により支給される常用就職支度金は、「自立更生を目的として恵与される金銭のうち当該被保護世帯の自立更生のためにあてられる額」として取り扱ってよいか。

答 次官通知第8の3の(2)のエの(イ)により収入として認定すること。

問（第8の43） 地方公共団体が条例又は予算措置によって、被保護者に対し、臨時的に支給する金銭のうち、どのようなものが次官通知第8の3の(3)のエにいう「自立更生を目的として恵与される金銭」に該当するか。

答 地方公共団体が条例又は予算措置によって、被保護者に対し臨時的に支給する金銭のうち、局長通知第8の2の(4)にいう自立更生のための用途に供すべきものであることが支出の目的として明示されているものが、自立更生を目的として恵与される金銭に該当するものであり、かかる金銭のうち、実際に自立更生のための用途にあてられる額を、収入として認定しないものとする。

この場合、支出目的として明示されている用途及びその用途に供される額の認定にあたっては、問40の答に示す基準によるものである。

したがって、地方公共団体又はその長が年末、盆、期末等の時期に支給する金銭は、次官通知第8の3の(3)のエによる取扱いは行わず同(2)のエの(イ)によって取り扱うこととなる。

問（第8の34） 局長通知第8の2の(4)のただし書きにいう「適当な者」とは、どのような者をいうか。

答 社会福祉法人、新聞社、当該被保護世帯の自立更生を援助するために特に設立された団体等金融機関

以外の者であって、当該金銭を安全に管理しうると認められるものをいう。

問（第8の26）市町村又は扶養義務者等が水洗便所設備費等の全部又は一部を助成又は援助する場合は、その助成費又は援助費をどのように取り扱うべきか。

答 当該助成費又は援助費については、これを局長通知第8の2の(4)に準じて収入として認定しないこととして差しつかえない。

なお、これらの費用は法による扶助の対象とはならないものである。

問（第8の53）保護開始前に臨時的に受けた災害等による補償金、保険金、見舞金又は死亡による保険金の全部又は一部を当該災害等による損失の原状回復等当該世帯の自立更生の用途にあてるべく保有している場合についても、次官通知第7の3の(3)のオ又はキに準じ収入として認定しない取扱いとすることは認められないか。

答 その目的とする自立更生の用途が世帯員の将来の就学等保護開始後でなければ実現し得ないものと認められる場合には、被保護世帯が補償金等を受けた場合と同様に取り扱って差しつかえない。

(6) 次官通知第8の3の(3)のケに掲げる金銭の取扱いについては、次によること。

ア 社会生活を営むうえで特に社会的な障害のある者の福祉を図るため地方公共団体又はその長が支給する金銭に該当するものは、次に掲げる金銭であること。

(7) 心身障害児（者）の福祉を図るために支給される金銭

(イ) 老人の福祉を図るために支給される金銭

(ウ) 母子世帯に属する者の福祉を図るために支給される金銭

(エ) 多子世帯に属する者の福祉を図るために支給される金銭

(オ) 災害等によって保護者を失った児童の福祉を図るために支給される金銭

(カ) (7)から(オ)までに掲げる金銭に準ずるもの

イ アの(カ)に該当するものとして取り扱う場合又は同一人に対しアの(7)から(カ)までに掲げる金銭が重複して支給される等特別な事由があり、特別な取

扱いを必要とすると認められる場合は、都道府県知事は、厚生労働大臣に情報提供すること。

(4) 勤労に伴う必要経費

ア 基礎控除

㉔ 第8-3-(4) 勤労に伴う必要経費

(1)のアからウ（勤労収入・農業収入・農業以外の事業収入）までに掲げる収入を得ている者については、勤労に伴う必要経費として別表「基礎控除額表」の額を認定すること。

㉕ 第8-3 勤労控除の取扱い

(1) 基礎控除

ア 基礎控除は、当該月の就労に伴う収入金額（賞与その他の臨時的な収入を分割して認定する場合は、各分割認定額をそれぞれの認定月の収入金額に加算して算定するものとする。）に対応する次官通知別表の基礎控除額表の収入金額別区分に基づき認定すること。

イ 基礎控除の収入金額別区分は、次官通知第8の3の(1)のイによる勤労（被用）収入については、通勤費等の実費を控除する前の収入額により、同イによる農業収入又は同ウによる農業以外の事業（自営）収入については、生産必要経費又は事業必要経費を控除した後の収入額によること。

ウ 世帯員が2人以上就労している場合には、イによる収入額の最も多い者については、次官通知別表の基礎控除額表の1人目の欄を適用し、その他の者については、それぞれ同表の2人目以降の欄を適用すること。

問（第8の49）在宅患者加算を認定されている者が、勤労収入を得ている場合には、勤労控除を適用してよいか。

答 真に栄養補給を必要とする者が社会生活適応のため実施機関の指定する医師の指導に基づき就労して勤労収入を得ている場合は、6か月間に限り、療養に専念しているものとみなしてお見込みのとおり取り扱って差しつかえない。

問（第8の50）雇用対策法等に基づく技能習得手当を受給しながら技能習得している者については、あわせて支給される基本手当又は寄宿手当に対し勤労収入に準じて基礎控除及び特別控除を適用してよろ

しいか。

答 お見込みのとおり取り扱って差しつかえない。

問(第8の20) 勤労控除の基礎控除と少額かつ不安定の収入控除とは重複して差しつかえないか。

答 次官通知第8の3の(1)のエにいう「その他不安定な就労による収入」は、同(1)のアからウまでの収入を得ていない者が得る収入をいうものである。したがって、勤労者が内職等により少額の収入を得ている場合は、少額不安定収入としての控除を行わず、勤労収入と当該内職等による収入を合算して、基礎控除を適用すべきである。

問(第8の32) 局長通知第8の1の(2)のキにより認定された収入が、同一月において重なった場合、基礎控除の適用は如何に行うべきか。また、同通知によって認定された農業収入が一以上あり、かつ、当該月において次官通知第8の3の(1)のア又はウに該当する収入(勤労(被用)収入又は農業以外の事業収入)がある場合、基礎控除の適用は如何に行うべきか。

答 御照会の場合には、いずれも局長通知第8の3の(1)のイによる収入額を合算し、当該合算額につき各月ごとに基礎控除を適用すること。

問(第8の18) 各種勤労控除の適用に当たり、農業又は農業以外の事業(自営業)を営んでいる場合であって、その事業に専ら従事する者が世帯内に2人以上いること等により、控除対象者の収入を明確に把握できないときは、これらの控除の適用は認められないと解してよいか。

答 同一の事業に従事する者が世帯内に2人以上いて、それぞれの収入を明確に把握できない場合であっても、当該者の申立てにより事業に従事する各稼働者の事業に対する寄与の割合が推定できるときは、世帯の収入額に推定した寄与率を乗じて得た額を、また、事業に対する寄与の割合が推定できないときは、世帯の収入額を事業に従事する稼働人員で除して得た額を、それぞれの稼働者の収入として取り扱うこととし、各種勤労控除を適用するようにされたい。

基礎控除額表……(略)

イ 特別控除

㊦ 第8-3-(4) 勤労に伴う必要経費

就労に伴う収入を得ている者については、特別控除として、年間を通じ次の表の額の範囲内において必要な額を収入から控除すること。

	1級地	2級地	3級地
	円	円	円
特別控除額	150,900	137,300	123,700

㊧ 第8-3

(2) 特別控除

ア 特別控除の年間控除額は、当該被保護者の収入年額の1割を限度とするが、年末における控除の適用に当り当該1割に相当する額が限度額をこえる被保護者で、就労の状態が良好であると認められる者については、限度額に1.3を乗じて得た額まで認定して差しつかえないこと。

イ 世帯員が2人以上就労している場合には、(1)のイによる収入年額の最も多い者については、アにより認定し、その他の者については、それぞれアにより算定した額に0.85を乗じた額を認定すること。

ウ 控除は、臨時的収入のあった場合等適宜の時期に年間控除額を1回ないし数回に行うことを原則とするが、収入の形態等により毎月控除することが適当である場合には、各月に分割して控除を行っても差しつかえないこと。

問(第8の28) 特別控除の適用にあたり被保護者の「収入年額」はどのように算定するか。

答 「収入年額」は、暦年を単位として、毎年1月から12月までの間における保護受給期間について収入認定上の基礎となった就労による収入総額(前年の収入が分割認定により繰り延べて認定されている額を除く。)をいうものである。

問(第8の44) 年末において特別控除を行うことを予定していたが、臨時収入がないか又は少額であるために年間控除額の限度額(収入年額の1割に相当する額又は次官通知第8の3の(4)に掲げる特別控除額のいずれか少ない額とする。ただし、当該1割に相当する額が上記特別控除額をこえる被保護者のう

ち、就労の状態が良好であると認められるものについては、当該特別控除額に1.3を乗じて得た額とする。また、世帯員が2人以上就労している場合には、局長通知第8の3の(2)のイにより当該世帯員についてそれぞれ得た額とする。)まで特別控除を適用することができない状態にある者については、12月の当該臨時収入をもって控除しきれなかった残額を、当該年度の末までの間に認定して差しつかえないか。

答 お見込みのとおりである。

問(第8の15) 授産施設で就労する者については、期末、賞与等の年間臨時収入がないが、この場合特別控除は月割で毎月行って差しつかえないか。

答 授産施設を利用して稼働収入を得ている場合であって年間1回ないし数回に控除を行うことが適当でない場合は、月割で控除して差しつかえない。

なお、授産施設を利用して稼働収入を得ている場合と同様な収入形態にある者についての特別控除も同様に月割で行って差しつかえない。

問(第8の16) 勤労控除中、特別控除を益及び歳末の2回に措置する場合には、ほぼ同額ずつとしてよいか。

答 社会生活の実態にかんがみ、益、歳末の控除額は、おおむね、1対2の比率によることが一応の基準として考えられる。

ウ 新規就労控除

㊦ 第8-3-(4) 勤労に伴う必要経費

新規に就労したため、特別の経費を必要とする場合は別に定めるところにより、月額10,400円をその者の収入から控除すること。

㊧ 第8-3

(3) 新規就労控除

ア 新規就労控除を適用する場合は、次の場合であること。

(7) 中学校等を卒業した者が継続性のある職業に従事し、収入を得るために特別の経費を必要とする場合

(4) 入院その他やむを得ない事情のためおおむね3年以上の間職業に従事することができなかつた者が継続性のある職業に従事し、収入を得るために特

別の経費を必要とする場合

イ 控除は、当該職業によって得られる収入につき、はじめて継続性のある職業について月(当該新規就労に伴う収入を翌月から認定することとするときは当該初回認定月)から6箇月間に限り行うものとする。

エ 未成年者控除

㊦ 第8-3-(4) 勤労に伴う必要経費

未成年者については、成年に達するまでの間、別に定めるところにより、月額11,600円をその者の収入から控除すること。

㊧ 第8-3

(4) 未成年者控除

ア 未成年者(20歳未満の者をいう。)については、その者の収入から月額11,600円を控除すること。ただし、次の場合は控除の対象としないものであること。

(7) 単身者

(4) 配偶者(婚姻の届出をしていないが、事実上婚姻関係と同様の事情にある場合を含む。以下同じ。)又は自己の未成熟の子とのみで独立した世帯を営んでいる場合

(4) 配偶者と自己の未成熟の子とのみで独立した世帯を営んでいる場合

イ 未成年者控除の適用を受けていた者が月の途中で成年に達したときは、その翌月から認定の変更を行うこと。

(5) その他の必要経費

㊦ 第8-3

(5) その他の必要経費

次の経費については、真に必要やむを得ないものに限られ、必要な最小限度の額を認定して差しつかえないこと。

ア 出かせぎ、行商、船舶乗組、寄宿等に要する一般生活費又は住宅費の実費

イ 就労に伴う子の託児費

ウ 他法、他施策等による貸付金のうち当該被保護世帯の自立更生のために当てられる額の償還金

エ 住宅金融公庫の貸付金の償還金

オ 地方税等の公租公課

カ 健康保険の任意継続保険料

キ 国民年金の受給権を得るために必要な任意加入保険料

◎ 第8

4 その他の控除

- (1) 出かせぎ、行商、船舶乗組、寄宿等に要する費用につき控除を行う場合は、一般生活費又は住宅費の実際必要額から、当該者の最低生活費として認定された一般生活費の額を差し引いて得た額を必要経費として認定すること。
- (2) 就労に伴う子の託児費については、その実費の額を収入から控除して認定すること。この場合において、委託された児童に対し受託者が提供する飲食物は、収入認定の対象としないこと。

問(第8の48) 次官通知第8の3の(5)のイにいう就労に伴う子の託児費には、保育所入所支度に要する費用及び市町村が実施する児童クラブに要する費用を含むものと解して差しつかえないか。

また、これが認められる場合、当該費用を入所月の収入から一括控除することができない場合には、月割にして控除して差しつかえないか。

答 いずれもお見込みのとおり取り扱って差しつかえない。

なお、児童クラブについては、「放課後児童健全育成事業の実施について」(平成10年4月9日児発第294号厚生省児童家庭局長通知)の別紙「放課後児童健全育成事業実施要綱」に基づき実施されるものに限られるものである。

問(第8の57) 国民年金に任意加入する場合の保険料の控除が認められる場合はどのような場合か。

答 年金の受給権を得るためのものに限り認められるものであり、将来の年金額を増やすためのものは認められない。

なお、任意加入しても過去の未納分を納付しないと年金受給権を得られない場合には、年金受給権を得るために必要な限度で未納分の保険料についても控除して差し支えない。

- (3) 貸付資金のうち当該被保護世帯の自立更生のために当てられる額の償還については、償還が現実に行われることを確認したうえ、次に掲げるものについて、当該貸付資金によって得られた収入(修学資金又は奨学

資金については、当該貸付を受けた者の収入、結婚資金については、当該貸付を受けた者又は当該貸付資金により結婚した者の収入、医療費又は介護費貸付資金、住宅資金、転宅資金、老人又は身体障害者等が機能回復訓練器具及び日常生活の便宜を図るための器具を購入するための貸付資金、配電設備、給排水設備又は暖房設備のための貸付資金並びに国民年金の受給権を得るために必要な任意加入保険料のための貸付資金については、当該世帯の全収入)から控除して認定すること。

ア 国若しくは、地方公共団体により行われるもの又は国若しくは地方公共団体の委託事業として行われるものであって、償還の免除又は猶予が得られなかったもの。ただし、医療費又は介護費貸付資金については、保護の実施機関の承認のあったものに限ること。

イ ア以外の法人又は私人(絶対的扶養義務者を除く。)により貸し付けられたもののうち、貸付けを受けるについて保護の実施機関の事前の承認のあったものであって、償還の免除又は猶予が得られなかったもの。ただし、事前の承認を受けなかったことについてやむを得ない事情があり、かつ、当該貸付資金が現にその者の自立助長に役立っていると認められ、事後において承認することが適当なものについても同様とする。

ウ アに該当する技能修得資金とともに、当該技能修得期間中、貸付けを受けた生活資金については、貸付けを受けるについて保護の実施機関の事前の承認のあったものであって、償還の免除又は猶予が得られなかったもの。

- (4) 住宅金融公庫法による貸付資金の償還については、当該貸付資金によって建築した住宅の一部を活用して収入を得ている場合に限り、当該収入の額の範囲内において、当該償還金を控除して認定すること。
- (5) 次に掲げる貸付資金は、国若しくは地方公共団体により行われるもの又は国若しくは地方公共団体の委託事業として行われるものに該当するものとして取り扱うこと。ただし、生活福祉資金貸付制度要綱に基づく貸付資金については、当該被保護世帯の自立更生のために当てられるものに限る。

ア 母子及び寡婦福祉法による貸付資金

イ 生活福祉資金貸付制度要綱に基づく貸付資金

- ウ 婦人更生資金制度要綱に基づく貸付資金
 - エ 引揚者給付金等支給法に基づく国債を担保として、国民金融公庫から貸し付けられる生業資金
 - オ 自作農維持資金融通法に基づく農林漁業金融公庫の各種貸付資金
 - カ 開拓者資金融通法に基づく政府（地方農地事務局）の貸付資金
 - キ 天災による被害農林漁業者等に対する資金の融通に関する暫定措置法に基づく農業協同組合、森林組合又は金融機関の貸付資金
 - ク 農業近代化資金助成法に基づく農業協同組合、農業協同組合連合会又は農林中央金庫の貸付資金
 - ケ 国民金融公庫からの低所得者に対する更生貸付資金
 - コ 住宅資金又は転宅資金であつて、国若しくは地方公共団体により行われる貸付資金又は国若しくは地方公共団体の委託事業として行われる貸付資金
- (6) 生業資金の貸付けをうけた後、事業の失敗等により他の事業を営んでいる場合であつて、その事業の資金の全部、または一部が、当該貸付金によりまかなわれているときは、変更した事業によって得られる収入から償還金を控除して認定して差しつかえないこと。

問（第8の23） 被保護者が就労に必要な自転車又は原動機付自転車を購入する場合、その購入額を月割にして、その収入から必要経費として控除して差しつかえないか。

答 当該職業に必要不可欠な場合であつて、社会通念上ふさわしい程度の購入費であり、かつ、その購入によって収入が増加すると認められるときは、通常、交通費、運搬費等として計上されるべき額の範囲内で必要経費として認定して差しつかえない。また、通勤用に使用する場合においても、通常、交通費等として計上される程度の額の範囲内で認定して差しつかえない。

第9 保護の開始申請等

㊦ 第9

生活保護は申請に基づき開始することを原則としており、保護の相談にあたっては、相談者の申請権を侵害しないことはもとより、申請権を侵害していると疑われるような行為も厳に慎むこと。

㊦ 第9

1 保護の相談における開始申請の取扱い

生活保護の相談があつた場合には、相談者の状況を把握したうえで、他法他施策の活用等についての助言を適切に行うとともに生活保護制度の仕組みについて十分な説明を行い、保護申請の意思を確認すること。また保護申請の意思が確認された者に対しては、速やかに保護申請書を交付するとともに申請手続きについての助言を行うこと。

2 要保護者の発見・把握

要保護者を発見し適切な保護を実施するため、生活困窮者に関する情報が保護の実施機関の窓口につながるよう、住民に対する生活保護制度の周知に努めるとともに、保健福祉関係部局や社会保険・水道・住宅担当部局等の関係機関及び民生委員・児童委員との連絡・連携を図ること。

問（第9の1） 生活保護の面接相談においては、保護の申請意思はいかなる場合にも確認しなくてはならないか。

答 相談者の保護の申請意思は、例えば、多額の預貯金を保有していることが確認されるなど生活保護に該当しないことが明らかな場合や、相談者が要保護者の知人であるなど保護の申請権を有していない場合等を除き確認すべきものである。なお、保護に該当しないことが明らかな場合であっても、申請権を有する者から申請の意思が表明された場合には申請書を交付すること。

問（第9の2） 相談段階で扶養義務者の状況や援助の可能性について聴取することは申請権の侵害に当たるか。

答 扶養義務者の状況や援助の可能性について聴取すること自体は申請権の侵害に当たるものではないが、「扶養義務者と相談してからではないと申請

を受け付けない」などの対応は申請権の侵害に当
たるおそれがある。

また、相談者に対して扶養が保護の要件である
かのごとく説明を行い、その結果、保護の申請を
諦めさせるようなことがあれば、これも申請権の
侵害にあたるおそれがあるので留意されたい。

第10 保護の決定

1 年齢改定

◎ 第10

1 年齢改定

(1) 保護を継続して受ける者について、基準生活費の算
定に係る満年齢の切替えは、毎年1回4月1日に行
うことができること。

(2) 4月1日に行う切替えは、3月31日までに基準生
活費の変更を必要とする満年齢に達した者について
行うこと。

問(第10の13) 局長通知第10の1の(2)により年齢
改定を行う場合、4月1日生れの者についてどう取
り扱うのか。

答 4月1日生れの者については、年齢計算に関する
法律(明治35年法律第50号)及び民法(明治29
年法律第89号)第143条の規定により、前日であ
る3月31日をもって満年齢に達した者として取り
扱うこととなる。

2 保護の要否及び程度の決定

◎ 第10

保護の要否及び程度は、原則として、当該世帯につき
認定した最低生活費と第8によって認定した収入(以下
「収入充当額」という。)との対比によって決定すること。
また、保護の種類は、その収入充当額を、原則として、
第1に衣食等の生活費に、第2に住宅費に、第3に教育
費及び高等学校等への就学に必要な経費に、以下介護、
医療、出産、生業(高等学校等への就学に必要な経費を
除く。)、葬祭に必要な経費の順に充当させ、その不足す
る費用に対応してこれを定めること。

◎ 第10

2 保護の要否及び程度の決定

(1) 保護の要否の判定は原則としてその判定を行う日の
属する月までの3箇月間の平均収入充当額に基づい
て行うこととする。

ただし、常用勤労者について労働協約等の実態か
ら賞与等を含む年間収入が確実に推定できる場合で
あって、次官通知第8の2の「長期間にわたって収
入の実情につき観察することを適当とするとき」に
該当するときは保護の申請月以降1年間において確
実に得られると推定される総収入(収入を得るため
の必要経費の実費及び勤労に伴う必要経費のうち基
礎控除額に70%を乗じて得た額を控除した額)の平
均月割額をその月の収入充当額と定め保護の要否を
判定すること。この取扱いにより保護を要すると判
定された者に係る保護の程度の決定は常用収入につ
いて第8の1の(1)のAに定める取扱いにより行うこ
と。

問(第10の4) 保護開始時の要否判定を行う際、次
官通知第10にいう「当該世帯につき認定した最低生
活費」とは具体的に如何なる費目を指すのか。

答 次に掲げる費目を指すものであること。

ア 告示別表第1生活扶助基準(ただし、同第1章
の1の(2)の期末一時扶助及び同第3章の4の移送
費であって局長通知第7の2の(7)のAの(ウ)以下の
場合のものを除く。)並びに局長通知第7の2の(6)
のAの(カ)(ただし、紙おむつ、貸おむつ又はおむ
つの洗濯代が必要と認められる場合に限る。)

イ 告示別表第2教育扶助基準及び局長通知第7の
3の(2)

ウ 告示別表第3住宅扶助基準並びに局長通知第7
の4の(1)のオ(ただし、敷金、契約更新料及び住
宅維持費を除く。)

エ 告示別表第4医療扶助基準

オ 告示別表第5介護扶助基準(住宅改修を除く。)

カ 告示別表第6出産扶助基準並びに局長通知第7
の7の(1)及び(2)

キ 告示別表第8葬祭扶助基準並びに局長通知第7
の9の(1)、(2)、(3)及び(4)

問(第10の5) 保護開始時の要否判定を行う際、次
官通知第10にいう「第8によって認定した収入」を
算定するときには、いかなる経費を必要経費として

認定すべきか。

答 次官通知第8の3により、勤労（被用）収入、農業収入、恩給年金等の収入等、収入の種類ごとに定められた当該収入を得るための必要経費の実費及び同第8の3の(5)その他の必要経費のうちア、イ、オに掲げる費用の実費並びに勤労に伴う必要経費のうち局長通知第8の3の(1)によって認定された基礎控除額に70%を乗じて得た額（世帯員が2人以上就労している場合には、それぞれの基礎控除額に70%を乗じて得た額の総額）を認定するものであること。

問（第10の6） 保護受給中の者の収入が保護開始時の要否判定に用うべき最低生活費をこえるに至り保護の廃止を必要とする際には、最低生活費及び収入については開始時と同様の取扱いによって認定して保護の要否判定を行うものであるか。

答 保護開始時と異なり、現に保護受給中の者については、保護の実施要領の定めるところに従い当該時点において現に生じている需要に基づいて認定した最低生活費と収入充当額との対比によって、判定するものであること。

問（第10の7） 局長通知第10の2の(1)のただし書にいう「常用勤労者」とは如何なる勤労形態にあるものをいうか。

答 「常用勤労者」とは期間を定めず、又は1箇月をこえる期間をきめて雇われ、かつ、月々一定の給与が支給されている者をいう。したがって、就労日に対応して賃金が支払われている者は常用勤労者には該当しないものである。常用勤労者であるかないかの判断に当たっては、日雇健康保険を除く各種被用者保険加入の有無を一応の目安とすることも考えられる。

問（第10の8） 局長通知第10の2の(1)のただし書にいう「労働協約等の実態」には、給与、賃金、期末手当、賞与等の額及び支払方法が法律、条例、労使間の覚書等によって定められている場合、又は明文のとりきめはないが雇用慣習上確定していると認められる場合も含まれるものと解してよいか。また、賞与等を含む年間収入には定期昇給分、勤勉手当等確実に予測できるものは含めてよいか。

答 お見込みのとおりである。

問（第10の9） 他の実施機関の管内で保護を受けて

いた者が転入してきた場合、その者にかかる保護の要否判定及び程度の決定は、保護受給中の者に対する取扱いと同様に行って差しつかえないか。

答 お見込みのとおりである。

ただし、この取扱いは、当該転入した要保護者の保護の継続の要否について審査を要しないことを意味すると解してはならないので、念のため。

問（第10の10） 恩給、年金等の受給者が保護を申請した場合において、保護の要否判定は申請直前に受給した恩給、年金等の額を、次官通知第8収入の認定、局長通知第8収入の認定及び本職通知第8収入の認定により、各月に分割して認定した額をもって行うこととし、また保護の程度の決定に際して収入充当額として認定すべき恩給、年金等の額は、保護の開始時に現に所有する当該恩給、年金等の残額によることとして差しつかえないか。

答 お見込みのとおりである。

問（第10の10-2） 保護開始時に保有する手持金は全て収入認定しなければならないか。

答 一般世帯はもちろん被保護世帯においても繰越金を保有しているという実態及び生活費は日々均等に消費されるものではないということ等から、保護開始時に保有する金銭のうちいわゆる家計上の繰越金程度のものについては、程度の決定に当たり配慮する面がある。

したがって、健全な家計運営については自立助長を考慮し、保護の程度の決定に当たり認定すべき手持金は次によることとされたい。

なお、この取扱いは要否判定の結果保護要とされた世帯についての開始月における程度の決定上の配慮であり、要否判定、資産・収入の調査についての取扱いを変える趣旨のものではない。

1 手持金の認定

保護開始時の程度の決定に当たって認定すべき手持金は、当該世帯の最低生活費（医療扶助及び介護扶助を除く。）の5割を超える額とする。

2 月の途中で開始する場合における当該月の程度の決定方式

(1) 勤労収入

最低生活費と収入の対比により、1ヶ月分の扶助額又は本人支払額を算定した後、月末までの保護受給日数により扶助別に日割りする。

ただし、一時扶助、教育扶助等については日割りしない。

$$\frac{(\text{最低生活費} - \text{平均収入}) \times \text{月末までの日数} (\times \text{日})}{30 \text{ 日}}$$

$$\text{程度の決定にあたり認定すべき額} = \boxed{\text{開始月扶助額}}$$

$$\text{程度の決定にあたり認定すべき額} = \text{手持金総額} - \left[\text{給与の残額} + \text{家計上の繰越金として保有を容認する額} \alpha \text{円} \right]$$

給与の残額については、平均収入として既に評価済みであるから、開始月において給与の残額たる現金を保有していても再度資産として評価しない。

どれが給与の残額であるか判然としないときは、次の算式により推計する。

$$\text{給与総額} \times \left(1 - \frac{\text{給与日から経過日数}}{30 \text{ 日}} \right) = \text{給与残額推計額}$$

(2) 年金収入

年金の残額については、手持金から繰越金とて容認する額を控除した残りの額を次回受給月前月までに分割して（少額の場合は当月分の）入充当額に計上する。

$$\frac{\text{最低生活費} \times \frac{X \text{ 日}}{30 \text{ 日}} - \text{手持金} (\text{年金残額を含む}) - \alpha \text{円}}{\text{次回受給月の前月までの月数}} = \boxed{\text{開始月扶助額}}$$

(3) 農業収入

年金収入の例による。

ただし、経常収入については勤労収入の例による。

(4) 無収入

$$\frac{\text{最低生活費} \times \frac{X \text{ 日}}{30 \text{ 日}} - (\text{手持金} - \alpha \text{円})}{\text{}} = \boxed{\text{開始月扶助額}}$$

問（第10の18） 局長通知第7の2の(9)に定める「ひ

とり親世帯就労促進費」は、保護開始時の要否判定に用いないこととしてよろしいか。

答 お見込みのとおりである。

ひとり親世帯就労促進費は、保護開始時の要否判定には用いないこととし、要否判定の結果保護要とされた世帯の程度の決定に際して用いることとされたい。

(2) 農業収入又は年間の一時期のみの収穫による収入のある世帯については、保護の申請月以後1箇年間に於ける収穫予想高（前年における収穫高を基とし、平年作の程度、災害の有無、豊凶予想等収穫高の予想増減を勘案したもの）の平均月割額をその月の収入充当額として認定して保護の要否を判定し、保護を要すると判定されたものについては、現在の収入について第8（収入の認定）により認定した額に基づいて、保護の程度を決定すること。

ただし、これによりがたい場合は、次の収穫を認定する時期まで、一般の要否判定の要領により、その要否及び程度を決定して差しつかえないこと。

(3) 医療予定期間が4箇月未満の短期傷病を理由として医療扶助のための保護の申請があった場合には、医療予定期間に2箇月を加えた月数の間における最低生活費と収入充当額（農業収入又は年間の一時期のみの収穫による収入については、(2)による平均月割額、(1)のただし書により収入を推定すべき常用勤労者の収入については、同ただし書により推定された総収入の平均月割額を基礎として算定した額、(4)において同じ。）との対比によって、保護の要否を判定し、保護を要すると判定されたものについては、第8により認定した収入によって保護の程度を決定すること。

なお、傷病の医療予定期間が4箇月以上6箇月未満である場合においては、6箇月間における最低生活費と収入充当額との対比により、同様に扱うこと。

問（第10の1） ある世帯につき、世帯員の疾病（医療期間2箇月）による医療扶助の要否を局長通知の特例により判定した結果、否と決定され、その後1箇月経過したときに別の世帯員が疾病（医療期間2箇月）にかかった場合においては、要否判定のため

の収支認定は、どのようにしたらよいか。

答 設例の場合においては、最初の疾病に関する要否判定において医療費を4箇月に分割して支出の認定をしてあるから、最初の疾病につき2人目の申請時までに支払われるべきであった医療費の額をこえる額は、2人目の疾病の医療費の額に加算してこの疾病の医療扶助の要否を判定する。

たとえば、世帯の収入月 13,000 円、同最低生活費（医療費を除く。）月 8,000 円、最初の疾病の医療費計 18,000 円、2人目の疾病の医療費計 15,000 円の場合には、最初の疾病については、収入 13,000

円 $\times (2 + 2)$ ^{医療期間} > 支出 8,000 円 $\times (2 + 2)$ ^{医療期間} 医療費総計 18,000 円となり、医療扶助は否と決定するものであり、2人目の疾病については、収入は 13,000 円 $\times (2 + 2)$ ^{医療期間} と計算し、支出は、8,000 円 $\times (2 + 2)$ ^{医療期間} + 医療費総計 15,000 円 + 18,000 円 - (13,000 円 - 8,000 円) $\times 1$ ^{支払済期間} と計算する。したがって、2人目の疾病については、医療扶助は要と決定される。

なお、前記の例において、保護の程度を決定するに際しては、最初の疾病の医療費については、

18,000 円 - (13,000 円 - 8,000 円) $\times 1$ ^{支払済期間} を支出として認定するものとする。

(4) 保護の要否判定を行う際に算定する障害者自立支援法に規定する障害福祉サービス及び自立支援医療に要する費用は、概算障害福祉サービス所要額及び概算自立支援医療所要額によるものとし、次により算定すること。

ア 障害福祉サービス

障害福祉サービスの利用に係る負担上限月額（個別減免等を受けている者については、個別減免等が適用された後における負担上限月額）と食費等実費負担月額（補足給付等を受けている者については、補足給付等を適用した後における食費等実費負担月額）の合計額を上限として算定した1ヶ月あたりの平均負担額

イ 自立支援医療

自立支援医療の利用に係る負担上限月額と食費の実費負担額を上限とした1ヶ月あたりの平均負担額

(5) 保護の要否判定を行う際に算定する介護費は、概算介護所要額によるものとし、概算介護所要額は次により算定すること。

なお、介護保険の被保険者については、アからエまでにつき、それぞれのサービスに係る介護保険給付の利用者負担分を限度とする。

ア 居宅介護（イを除く。）

居宅介護支援計画に基づき、当該者の要介護（支援）状態区分に応じた介護保険の居宅介護サービス費区分支給限度基準額を上限として算定した1ヶ月あたりの平均介護費用

イ 特定施設入所者生活介護及び認知症対応型共同生活介護に係る居宅介護

当該者の要介護（支援）状態区分に応じた1ヶ月あたりの介護費用

ウ 施設介護

当該者の要介護状態区分に応じた1ヶ月あたりの施設介護費用（食事の提供に要する費用を含む。）

エ 福祉用具購入

介護扶助の対象となる福祉用具であって、当該者の心身の状況から必要となると判断されるものの購入費について、介護保険の居宅介護（支援）福祉用具購入費支給限度額を1.2で除して得た額を上限として算定した1ヶ月あたりの費用

問（第10の15） 居宅療養管理指導に係る居宅介護については、概算介護所要額をどのようにして算定すべきか。

答 原則として、申請日以降の利用に係る本人からの申し立てを基に、利用する予定の指定介護機関及び主治医の意見を確認し、必要と認められる場合には、必要な額を算定すべきである。

ただし、過去の利用実績等から利用の必要性を判断できる場合には、介護保険の1ヶ月あたり上限回数を基に介護費用を算定し、主治医の意見を省略して差し支えない。

(6) 保護施設等の取扱い

ア 救護施設・更生施設及び宿所提供施設

救護施設、更生施設又は宿所提供施設に入所することを必要とする者の収入充当額が最低生活費認定額以下の場合又はその者の収入充当額が最低生活費認定額を超過する場合であって、その超過額が保護施設事務費に満たない場合は、その者を被保護者と決定し又は被保護者とみなして、最低生活費認定額と保護施設事務費との合算額から収入充当額を差し引いた額を保護費及び保護施設事務費支出額として決定すること。

イ 救護施設及び更生施設が行う通所事業

救護施設及び更生施設が行う通所事業を利用する者に係る保護施設事務費支出額の決定は次により行うこと。

(7) その世帯の収入充当額が最低生活費認定額以下の場合、その者を被保護者と決定し、当該月の保護施設事務費の額をもって保護施設事務費支出額と決定すること。

(4) (7)に該当しない場合であっても、その世帯の収入充当額が最低生活費認定額を超過する場合であって、その超過額が保護施設事務費に満たない場合は、当分の間、その者を被保護者とみなして、当該月の保護施設事務費の額をもって保護施設事務費支出額として決定して差しつかえないこと。

また、上記に該当しない場合であっても、その世帯の収入充当額が最低生活費認定額に保護施設事務費の2倍に相当する額を加えた額以下であるときは、当分の間、その者を被保護者とみなし、最低生活費認定額に保護施設事務費の2倍に相当する額を加えた額と収入充当額との差額をもって保護施設事務費支出額として決定して差しつかえないこと。

ウ 授産施設

授産施設を利用する者の生業扶助の決定は次により行うこと。

(7) その世帯の収入充当額が最低生活費認定額と保護施設事務費（家庭授産を利用する場合は、家庭授産の事務費の額）の合算額以下の場合、その者を被保護者と決定し、当該月の保護施設事務費の額をもって保護施設事務費支出額と決定すること。

(4) (7)に該当しない場合であっても、その世帯の収

入充当額が最低生活費認定額に保護施設事務費（家庭授産を利用する場合であっても施設授産の事務費の額とする。）の2倍に相当する額を加えた額（以下「限度額」という。）以下であるときは、当該世帯の自立助長を考慮してその者を被保護者とみなし、当該月の保護施設事務費の額をもって保護施設事務費支出額と決定すること。

また、現に授産施設を効果的に利用している者については、収入充当額が限度額をこえる場合であっても、当分の間、その者を被保護者とみなし、そのこえる額と当該月の保護施設事務費との差額をもって保護施設事務費支出額として決定して差しつかえないこと。

エ アからウの場合の保護施設事務費は、施設入所の属する月の翌月（初日に入所する場合は当該月）から退所の日の属する月まで月を単位として算定し、支出決定すること。

ただし、新たに事業を開始した施設であって事業開始後3箇月を経過する日の属する月の末日が経過していない施設に月の中途で入退所する者の保護施設事務費は、入退所の日を含めた入所日数に応じ日割計算により算定すること。

オ アからウの場合において最低生活費認定額をこえる収入充当額があるため保護施設事務費の範囲内で生ずる本人支払額は、施設入所の属する月の翌月（初日に入所する場合は当該月）から退所の日の属する月まで月を単位として算定すること。

ただし、新たに事業を開始した施設であって事業開始後3箇月を経過する日の属する月の末日が経過していない施設に月の中途で入退所する者の本人支払額は、当該月の収入充当額に基づき算定すること。

(7) 扶助費支給額又は本人支払額の算定（以下「支給額の算定」という。）は、次により行うこと。

ア 収入額が月により変動しない定期的収入については、その月額を基礎として支給額の算定を行うこと。

イ 収入額が月によりある程度の変動が予想されるが、一定期間について観察すれば安定した継続的収入が得られると認められる場合は、3箇月をこえない期間ごとに認定した収入の平均月割額を基礎として支給額の算定を行うこと。

ウ 農業収入又は年間の一時期のみの収穫による収入については、原則として12分の1相当額をもって支

給額の算定を行うこととするが、これによることが適当でないと認められる場合は、イにより支給額の算定を行うこと。

エ 賞与、期末手当等については、その収入月及び収入額が確実に握できるときは、その収入額を認定のうえ、これを基礎として支給額の算定を行うこと。この場合、当該算定にかかる収入の額と、扶助費支給後に認定された収入額とに差を生じたときは、収入月以降の収入額に加減して支給額の算定を行うこと。

オ アからエまでによることが適当でないと認められるときは、客観的根拠により推定できる収入額を基礎として支給額の算定を行うこと。

なお、保護継続中の者が新たに就労した場合であって、当該新規就労による収入を当該月の収入として計上することが不適当であると認められる場合に限り、当該収入をその翌月の収入として計上して支給額の算定を行うこと。

また、この取扱いの適用をうけた者にかかる翌月以降の収入の認定は、当該月の収入をその翌月の収入とみなして取り扱うものであること。

(8) 最低生活費又は収入充当額の認定を変更すべき事由が事後において明らかとなった場合は、法第 80 条を適用すべき場合及び(7)のエによるべき場合を除き、当該事由に基づき扶助費支給額の変更決定を行えば生ずることとなる返納額（確認月及びその前月までの分に限り、）を次回支給月以後の収入充当額として計上して差しつかえないこと。（この場合、最低生活費又は収入充当額の認定変更に基づく扶助費支給額の遡及変更決定処分を行うことなく、前記取扱いの趣意を明示した通知を發して次回支給月以後の扶助費支給額決定処分を行えば足りるものであること。）

問（第10の11） 局長通知第10の2の(8)では、最低生活費又は収入充当額の認定を変更すべき事由が事後において明らかとなった場合の被保護者からの返納額の取扱いを示しているが、実施機関からの追加支給を行うべき場合においても同様に考えて、次回支給月以後の収入充当額を減額することによって調整して差しつかえないか。

答 次回支給月以後の収入充当額を減額することによって調整することは認められないものであり、最低

生活費又は収入充当額の認定変更に基づき、扶助費支給額の変更決定を行って追加支給すること。

この場合、扶助費支給額の変更決定を行うべき時点は、保護の基準、次官通知、局長通知に定めるところのほか、次に掲げるところを基準とされたい。

1 予測し得ない事情の変化により、当該月の収入認定額よりも実際の収入額が著しく過少となり、かつ、当該月内において以後必要な追加収入額が得られないと認められる等、扶助費追加支給の必要があると認められる場合は、その事実を確認した日に直ちに所要の変更手続をとること。

2 収入額の変動があった場合であって1以外のときは、法第 61 条により、被保護者から当該月の収入の変動があった旨の届出があった場合であって、当該月の実収入総額を確認したうえ、次官通知第8の2に示す収入額の認定の原則、局長通知第8及び第10等に示すところによって認定した収入額と比較し、かつ、その他の事情をも勘案した結果、当該世帯の最低生活の維持に著しい支障をきたす事実を確認したときに所要の変更手続をとること。

(9) 中国残留邦人等の円滑な帰国の促進及び永住帰国後の自立の支援に関する法律第 13 条に定める特定中国残留邦人等（以下「特定中国残留邦人等」という。）及び同法第 14 条に定めるその者の配偶者（以下「その者の配偶者」という。）と同居している場合であって、特定中国残留邦人等及びその者の配偶者が支援給付を受給しない場合における保護の要否の判定は、まず、当該要保護世帯と当該特定中国残留邦人等及びその者の配偶者とを同一世帯とみなした場合に算出される当該基準生活費の額と、収入充当額との対比により行うこと。

この場合、当該特定中国残留邦人等及びその者の配偶者の収入充当額の算定については、支援給付の実施要領の定めるところにより行い、当該要保護世帯の収入充当額の算定については、本通知の定めるところにより行うこと。なお、要否の判定にあたり、特定中国残留邦人等とその者の配偶者の資産については考慮する必要がないものであること。

この判定の結果要となった場合には、さらに局第7-2-(1)-コによる当該要保護世帯の最低生活費と、

当該要保護世帯の収入充当額との対比により保護の要否判定及び程度の決定を行うこと。この場合、当該特定中国残留邦人等及びその者の配偶者の収入のうち支援給付の最低生活費を超える額については、収入として認定しないこと。

なお、要否の判定は保護の開始申請時のほか、年1回6月に行うこと。

3 保護の開始時期

㊦ 第10

3 扶助費の再支給

保護の開始時期は、急迫保護の場合を除き、原則として、申請のあった日以降において要保護状態にあると判定された日とすること。なお、町村長経由の申請の場合には、町村長が申請書を受領した日を、それぞれ申請のあった日として取り扱うこと。

問（第10の2） 土曜日の夕方急病で入院した要保護者から月曜日に保護の申請があったが、土曜日に遡って保護を適用して差し支えないか。

答 医療扶助の適用については、説例の場合のように、急病等のため申請遅延につき真にやむを得ない事情のあったことが立証される場合には、必要最小限度で申請時期から遡って保護を開始して差し支えない。

4 扶助費の再支給

㊦ 第10

4 扶助費の再支給

前渡された保護金品又は収入として設定された金品（以下「前渡保護金品等」という。）を失った場合で、次のいずれかに該当するときは、失った日以後の当該月の日数に応じて算定された額の範囲内において、その世帯に必要な額を特別基準の設定があったものとして認定できるものであること。

(1) 災害のために前渡保護金品等を流失し、又は紛失した場合

(2) 盗難、強奪その他不可抗力により前渡保護金品を失った場合

問（第10の16） 扶助費の再支給を行うにあたり、留意すべき事項を示されたい。

答 次の点に留意すること。

1 盗難、強奪その他不可抗力の認定

(1) 盗難、強奪

金額の多寡を問わず、警察に被害届を出し捜査依頼を必ず行わせること。

(2) その他不可抗力

その他としては遺失等が考えられるが、社会通念上一般に要求される程度の注意をしたにも関わらず、遺失したことが挙証されない限り不可抗力とは認められない。遺失の場合も、警察に遺失届の提出を必ず行わせること。

2 調査及び指導等

(1) 事実の調査

被保護者から扶助費の再支給の申請があった場合には本人及び関係者等から事情を詳細に聴取するとともに、必要に応じて実地調査等を行い、失った理由、金額、当時の手持金等について十分に確認すること。

(2) 扶養義務者に対する扶養依頼等の指導

盗難等により保護金品を失ったという特別な事情があるので、通常の扶養は期待できない者も含め援助を受けることを指導し、扶養依頼を行うこと。

3 金品管理等生活指導

一般に、保護費を紛失し再支給を申請するケースは、保護費の大部分を携帯し金銭管理に注意を欠く例が多いので、生活上の指導を十分にを行い、必要以上の金品を携帯することのないよう配慮すること。

4 預貯金の活用

被保護者が預貯金を有しており、これを充てれば最低生活が可能と認められる場合は、自己の急迫・緊急状態を回避するため、最優先として預貯金を生活維持に充てさせること。

問（第10の3） 保護台帳、収支認定表等について、一般住民より閲覧の申出があったが、これを認めて差しつかえないか。

答 認めるべきではない。

保護の決定実施に際しては、その事務の性質上

要保護者にとっては隠したい個人的な秘密にわたる事項まで調査することがあるが、これらの事項につきその秘密を厳守することは、国民の福祉事務所に対する信頼を確保するうえから欠くことができないのみならず、法律上の義務でもある（地方公務員法第34条参照。なお、国家公務員法第100条、民生委員法第15条及び刑事訴訟法第144条に同趣旨の規定がある。）。したがって、これらの事項を記録した保護台帳等の閲覧は許されない。

ただし、保護の実施機関が、当該地方公共団体の個人情報保護条例に基づき、自己を本人とする保護台帳、収支認定表等の個人情報の開示を請求された場合は、同条例の定めるところにより適切に対応されたい。

なお、保護について不服があれば不服申立てによるべきであり、また一般住民が保護の実施機関の法律執行につき疑義をもつときは、監査請求（地方自治法第75条）によるべきである。

5 保護の停廃止

問（第10の12） 法第26条の規定により保護の停止又は廃止を行う場合の取扱いの基準を示されたい。

答 被保護者が保護を要しなくなったときには、法第26条の規定により保護の停止又は廃止をおこなうこととなるが、保護を停止すべき場合又は廃止すべき場合は、原則として、次によられたい。

1 保護を停止すべき場合

（1）当該世帯における臨時的な収入の増加、最低生活費の減少等により、一時的に保護を必要としなくなった場合であって、以後において見込まれるその世帯の最低生活費及び収入の状況から判断して、おおむね6箇月以内に再び保護を要する状態いなることが予想されるとき。

なお、この場合には、以後において見込まれる当該世帯の最低生活費及び収入充当額に基づき、停止期間（原則として日を単位とする。）をあらかじめ定めること。

（2）当該世帯における定期収入の恒常的な増加、

最低生活費の恒常的な減少等により、一応保護を要しなくなったと認められるがその状態が今後継続することについて、なお確実性を欠くため、若干期間その世帯の生活状況の経過を観察する必要があるとき。

2 保護を廃止すべき場合

（1）当該世帯における定期収入の恒常的な増加、最低生活費の恒常的な減少等により、以後特別な事由が生じないかぎり、保護を再開する必要がないと認められるとき。

（2）当該世帯における収入の臨時的な増加、最低生活費の臨時的な減少等により、以後おおむね6箇月を超えて保護を要しない状態が継続すると認められるとき。

なお、以上の場合における保護の停止又は廃止は保護を要しなくなった日から行うことを原則とする。

ただし、当該保護を要しなくなった日の属する月が、保護の停止又は廃止を決定した日の属する月の前々月以前であるときは、保護を要しなくなった日まで遡及して保護の停廃止を行うことなく、保護を要しなくなった日から前々月までの間にかかる保護の費用について、法第63条又は法第78条の規定により費用を徴収することとし、前月の初日をもって保護の停廃止を行うこと。

問（第10の12-2） 保護受給中の者が、要保護世帯向け長期生活支援資金を利用した場合には、必ず保護の廃止によらなければならないか。生活実態の把握が必要な場合等世帯の状況によっては停止とすることも可能か。

答 生活福祉資金の要保護世帯向け長期生活支援資金を利用した場合には、当該貸付資金が貸付を利用しなければ要保護状態となる世帯を対象としていることから、貸付の利用が終了した後は生活保護の適用となる可能性が高い世帯であることを踏まえ、当該貸付資金の利用者については、保護の廃止ではなく、保護の停止を行うこととしても差しつかえない。

問（第10の12-3） 保護受給中の者から「保護を辞退する」旨の意思を示した書面（以下「辞退届」という。）が提出された場合には、これに基づき保護を廃止しても差し支えないか。

答 被保護者から提出された「辞退届」が有効なものであり、かつ、保護を廃止することで直ちに急迫した状況に陥ると認められない場合には、当該保護を廃止して差し支えない。

ただし、「辞退届」が有効となるためには、それが本人の任意かつ真摯な意思に基づくものであることが必要であり、保護の実施機関が「辞退届」の提出を強要してはならないことは言うまでもなく、本人が「保護を辞退する義務がある」と誤信して提出した「辞退届」や、本人の真意によらない「辞退届」は効力を有せず、これに基づき保護を廃止することはできないものである。

また、「辞退届」が本人の任意かつ真摯な意思に基づいて提出された場合であっても、保護の廃止決定を行うに当たっては、例えば本人から自立の目的を聴取するなど、保護の廃止によって直ちに急迫した状況に陥ることのないよう留意すること。

さらに、保護の廃止に際しては、国民健康保険への加入など、保護の廃止に伴い必要となる諸手続についても助言指導すること。

第11 保護決定実施上の指導指示及び 検診命令

1 保護申請時における助言指導

㊦ 第11

1 保護申請時における助言指導

- (1) 要保護者が、保護の開始の申請をしたときは、保護の受給要件並びに保護を受ける権利と保護を受けることに伴って生ずる生活上の義務及び届出の義務等について十分説明のうえ適切な指導を行うこと。
- (2) 要保護者が、自らの資産能力その他扶養、他法等利用しうる資源の活用を怠り又は忌避していると認められる場合は、適切な助言指導を行うものとし、要保護者がこれに従わないときは、保護の要件を欠くものとして、申請を却下すること。

なお、要保護者が自らの資産、能力等の活用により最低生活の需要を満たすことができると認められる場合には、保護を要しないものとして申請

を却下すること。

2 保護受給中における指導指示

㊦ 第11

2 保護受給中における指導指示

- (1) 保護受給中の者については、随時、1と同様の助言、指導を行うほか、特に次のような場合においては必要に応じて法第27条による指導指示を行うこと。
 - ア 傷病その他の理由により離職し、又は就職していなかった者が傷病の回復等により就労(そのために必要な訓練等につくことを含む。)を可能とするに至ったとき。
 - イ 義務教育の終了又は傷病者の介護もしくは乳児等の養育にあたることを要しなくなったため就労が可能となったとき。
 - ウ 現に就労の機会を得ていながら、本人の稼働能力、同種の就労者の収入状況等からみて、十分な収入を得ているものとは認めがたいとき。
 - エ 内職等により少額かつ不安定な収入を得ている者について、健康状態の回復、世帯の事情の改善等により転職等が可能となるとき。
 - オ 就労中であつた者が労働争議参加等のため現に就労収入を得ていないとき。
 - カ アからオまでに掲げる場合のほか、資産、扶養、他法他施策による措置等の活用を怠り、又は忌避していると認められるとき。
 - キ 次官通知第8の1による収入に関する申告を行わないとき。
 - ク 世帯の変動等に関する法第61条の届出の義務を怠り、このため保護の決定実施が困難になり、又は困難になるおそれがあるとき。
 - ケ 主治医の意見に基づき、入院、転院又は退院が必要であると認められるとき。
 - コ 施設に入所させ、又は退所させる必要があると認められるとき。
 - サ 施設入所者が施設の管理規程に従わないため、施設運営上困難を生じている旨当該施設長から届出があつたとき。
 - シ キからサまでに掲げる場合のほか最低生活の

維持向上又は健康の保持等に努めていない等被保護者としての義務を怠っていると認められるとき。

ス その他、保護の目的を達成するため、又は保護の決定実施を行うため、特に必要があると認められるとき。

(2) (1)のアからオまでによる指導指示を行うにあたっては、本人又は親族、知己による求職活動をうながし、これに適切な助言、指導又はあっせんを行うこととするが、これによることが適当でない場合は、公共職業安定所への連絡、紹介等について必要な指導指示を行うものとする。

なお、被保護者の就労又は収入の増加を図るために必要があると認められるときは、生業扶助の適用等の措置について配慮すること。

(3) 指導指示を行うにあたっては、必要に応じて、事前に調査、検診命令等を行い状況の把握に努めるとともに本人の能力、健康状態、世帯の事情、地域の慣行等について配慮し、指導指示が形式化することのないよう十分留意すること。

(4) 法第27条による指導指示は、口頭により直接当該被保護者(これによりがたい場合は、当該世帯主)に対して行うことを原則とするが、これによって目的を達せられなかったとき、または目的を達せられないと認められるとき、及びその他の事由で口頭によりがたいときは、文書による指導指示を行うこととする。当該被保護者が文書による指導指示に従わなかったときは、必要に応じて法第62条により所定の手続を経たうえ当該世帯又は当該被保護者に対する保護の変更、停止又は廃止を行うこと。

3 保護停止中における助言指導等

㊦ 第11

3 保護停止中における助言指導等

保護停止中の被保護者についても、その生活状況の経過を把握し、必要と認められる場合は、生活の維持向上に関し適切な助言指導を行う等、所要の措置を講ずること。

4 検診命令

㊦ 第11

4 検診命令

(1) 検診を命ずべき場合

次のような場合には、要保護者の健康状態等を確認するため検診を受けるべき旨を命ずること。なお、この場合事前に嘱託医の意見を徴することとし、さらに必要と認められる場合には都道府県(指定都市及び中核市にあつては市本庁とする。)の技術的助言を求めること。

ア 保護の要否又は程度の決定に当たって稼働能力の有無につき疑いがあるとき。

イ 障害者加算その他の認定に関し検診が必要と認められるとき。

ウ 医療扶助の決定をしようとする場合に、要保護者の病状に疑いがあるとき。

エ 現に医療扶助による給付を受けている者につき当該給付の継続の必要性について疑いがあるとき。

オ 介護扶助の実施にあたり、医学的判断を要するとき。

カ 現に医療扶助の適用を受けている者の転退院の必要性の判定を行うにつき、検診が必要と認められるとき。

キ 自立助長の観点から健康状態を確認する必要があるとき。

ク その他保護の決定実施上必要と認められるとき。

(2) 医師又は歯科医師の選定及び連絡

検診を行う医師又は歯科医師は、嘱託医、公的医療機関に勤務する医師等であつて要保護者の当該疾病につき、正確かつ適切な診断を行い得ると判断されるものの中から指定すること。この場合、指定しようとする医師または歯科医師に対して、検診すべき要保護者の氏名、期日、場所、方法、報酬等をあらかじめ連絡し、その了解を得ること。了解を得た場合は検診書及び検診料請求書を発行して交付すること。

(3) 検診命令書の発行

(1)により検診を受けるべき旨を命じようとするときは、検診を受けるべき者に検診命令書を発行して行うものとする。

この場合、原則として検診命令書は検診を受ける者に直接交付するものとし、交付に当たっては、検診命令について詳細に説明するとともに、これに従わないときは、保護の申請が却下され、又は保護の変更、停止若しくは廃止される旨伝えること。

(4) 検診書の検討及び受理

検診を行った医師等から検診書の送付を受けたときは、その記載内容について検討し、不明な点があればその検討を行った医師または歯科医師に照会して(1)の各号の疑いを明らかにしたうえ、これを受理すること。

(5) 検診料の支払

検診を行った医師等から検診料請求書を受け取ったときは、その内容を審査してこれを確認し、検診料を当該医師又は歯科医師に支払うこと。

なお、検診料は原則として法による診療方針及び診療報酬の例によるものとする。ただし、検診結果を施行細則準則に定める様式以外の書面により作成する必要があると認められる場合は、検診料のほかに4,500円の範囲内(ただし、障害認定に係るものについては5,800円の範囲内)で特別基準の設定があったものとして必要な額を認定して差しつかえない。

(6) 検診命令に従わない場合の取扱い

検診命令に従わない場合において必要があると認められるときは、法第28条第4項に定めるところにより当該保護の開始若しくは変更の申請を却下し、又は保護の変更、停止若しくは廃止を行うこと。

問(第11の1) 被保護者が書面による法第27条の規定による指導指示に従わない場合の取扱いの基準を示されたい。

答 被保護者が書面による指導指示に従わない場合には、必要と認められるときは、法第62条の規定により、所定の手続を経たうえ、保護の変更、停止又は廃止を行うこととなるが、当該要保護者の状況によりなお効果が期待されるときは、これらの処分を行うに先立ち、再度、法第27条により書面による指導指示を行うこと。なお、この場合において、保護の変更、停止又は廃止のうちいずれを適用するかについては、次の基準によること。

1 当該指導指示が比較的軽微な場合は、その実情に応じて適当と認められる限度で保護の変更を行うこと。

2 1によることが適当でない場合は保護を停止することとし、当該被保護者が指導指示に従ったとき、又は事情の変更により指導指示を必要とした事由がなくなったときは、停止を解除すること。

なお、保護を停止した後においても引き続き指導指示に従わないでいる場合には、さらに書面による指導指示を行うこととし、これによってもなお従わない場合は、法第62条の規定により所定の手続を経たうえ、保護を廃止すること。

3 2の規定にかかわらず、次のいずれかに該当する場合は保護を廃止すること。

(1) 最近1年以内において当該指導指示違反のほかに、文書による指導指示に対する違反、立入調査拒否若しくは検診命令違反があったとき。

(2) 法第78条により費用徴収の対象となるべき事実について以後改めるよう指導指示したにもかかわらず、これに従わなかったとき。

(3) 保護の停止を行うことによっては当該指導指示に従わせることが著しく困難であると認められるとき。

なお、1から3に掲げる保護の変更、停止又は廃止は、当該処分を行うことを実際に決定した日から適用することを原則とするが、あらかじめ履行の期限を定めて指導指示を行った場合にはその指定期限の翌日まで遡及して適用して差しつかえない。

問(第11の2) 要保護者が法第28条による検診命令に従わなかった場合の取扱いの基準を示されたい。

答 設問のような場合にはその必要があると認められるときは法第28条第4項により保護の開始若しくは変更の申請を却下し、又は保護の変更、停止若しくは廃止を決定すること。

なお、法第28条第4項により処分を行う場合は、次によること。

1 保護の開始申請に伴い、保護の要否を判定するため必要な検診である場合には、当該開始申請を却下すること。

2 保護の変更申請に伴い必要な検診である場合に

は当該変更申請を却下すること。

3 要保護者が検診を受けなかったため、特定の費用について必要性の有無が判断できないときは、最低生活費の算定に際し、当該費用を計上しないこと。

4 2又は3によりがたい場合は保護を停止することとし、当該被保護者が検診を受け、かつ、その結果保護を要することが明らかになったとき、又は検診を受けさせる必要がなくなったときには停止を解除すること。

なお、保護を停止した後、再度検診命令を行い、なおこの命令にも従わないときは、法第28条第4項により保護を廃止すること。

5 4にかかわらず、最近1年以内において当該検診命令違反のほか、文書による指導指示に対する違反、立入調査拒否若しくは検診命令違反があったとき、又は停止によっては、当該要保護者をして検診命令に従わせることが著しく困難であると認められるときは、保護を廃止すること。

なお、4及び5に掲げる保護の変更、停止又は廃止は処分を行うことを決定した日から適用することを原則とするが、あらかじめ期日を定めて検診命令を行った場合にはその指定期日の翌日まで遡及して適用して差しつかえない。

第12 調査及び援助方針等

1 訪問調査

◎ 第12

1 訪問調査

要保護者の生活状況等を把握し、援助方針に反映させることや、これに基づく自立を助長するための指導を行うことを目的として、世帯の状況に応じ、訪問を行うこと。訪問の実施にあたっては、訪問時の訪問調査目的を明確にし、それを踏まえ、年間訪問計画を策定のうえ行うこと。なお、世帯の状況に変化があると認められる等訪問計画以外に訪問することが必要である場合には、随時に訪問を行うこと。また、訪問計画は被保護者の状況の変化等に応じ見直すこと。

(1) 申請時等の訪問

保護の開始又は変更の申請等のあった場合は、申請書等を受理した日から1週間以内に訪問し、実地に調査すること。

(2) 訪問計画に基づく訪問

訪問計画は、次に掲げる頻度に留意し策定すること。

ア 家庭訪問

少なくとも1年に2回以上訪問すること。

イ 入院入所者訪問

(7) 入院している患者については、少なくとも1年に1回以上、本人及び担当主治医等に面接して、その症状等を確認すること。

(4) 生活扶助を目的とする施設若しくは介護施設に入所している者又は保護施設通所事業を利用している者については、1年に1回以上訪問すること。

(3) 臨時訪問

次に掲げる場合については、臨時に訪問を行うこと。

ア 申請により保護の変更を行う場合

イ 生業扶助により就労助成を行った場合

ウ 水道設備、電灯設備又は家屋補修に要する経費を認定した場合（事後確認）

エ 保護が停止されている場合

オ その他指導若しくは助成又は調査の必要のある場合

問（第12の1） 実施機関において、被保護世帯の世帯類型や助言指導の必要性等に応じた統一的な訪問基準を作成し、それに基づいて訪問計画を策定することとして差しつかえないか。

答 訪問調査については、①生活状況の把握、②保護の要否及び程度の確認、③自立助長のための助言指導などを目的として実施することが考えられるところであるが、これらの訪問目的を達成するために考慮された訪問基準であれば、お見込みのとおり取り扱って差しつかえない。

なお、上記の訪問基準の設定を行った場合であっても、被保護者の個々の状況に応じて、適宜、必要

な訪問調査の実施に留意されたい。

2 関係機関調査

㊦ 第12

2 関係機関調査

保護の決定実施上必要があるときは、社会保険事務所、公共職業安定所、事業主、保健所、指定医療機関、指定介護機関等の関係機関について、必要事項を調査すること。

3 課税調査

㊦ 第12

3 課税調査

被保護者の収入の状況を客観的に把握するため、年1回、税務担当官署の協力を得て被保護者に対する課税の状況を調査すること。

4 援助方針

㊦ 第12

4 援助方針

(1) 援助方針の策定

訪問調査や関係機関調査によって把握した要保護者の生活状況を踏まえ、個々の要保護者の自立に向けた課題を分析するとともに、それらの課題に応じた具体的な援助方針を策定すること。また、策定した援助方針については、原則として要保護者本人に説明し、理解を得るよう努めること。

(2) 援助方針の評価と見直し

被保護世帯に対する指導援助の結果を適宜適切な時期に評価し、援助方針の見直しを行うこと。

援助方針の見直しは、世帯の状況等の変動にあわせて行うほか、世帯の状況等に変動がない場合であっても少なくとも年に1回以上行うこと。

5 関係機関との連携

㊦ 第12

5 関係機関との連携

被保護世帯への指導援助にあたっては、関係部局、民生委員・児童委員、保健所、児童相談所、公共職業安定所、医療機関、介護機関、地域包括支援セン

ター、障害福祉サービス事業者、学校、警察等の関係機関と必要な連携を図ること。

第13 その他

1 国民年金保険料の取扱い

㊦ 第13

1 国民年金保険料の取扱い

国民年金保険料の取扱いは、次のとおりであるので、これを踏まえ、被保護者の自立助長を図られたい。

- (1) 生活扶助を受ける者については、国民年金法第89条の規定により、生活扶助を受けるに至った日の属する月の前月からこれに該当しなくなる日の属する月までの期間に係る保険料はすでに納付されたもの及び前納されたものを除き納付することを要しないものであること。
- (2) 生活扶助以外の扶助を受けるものについては、国民年金法第90条の規定により、社会保険庁長官は、その指定する期間に係る保険料は、すでに納付されたもの及び前納されたものを除き、納付することを要しないものとするができること。この場合において、被保護者から申請があったときは、直ちに免除の認定が行われるべきであるとされていること。なお、社会保険庁長官の指定する期間とは、申請のあった日の属する月の直前の7月からその翌年の6月までの期間において必要と認める期間である。

2 放送受信料

㊦ 第13

2 放送受信料

(省 略)

3 国民年金（福祉年金）及び児童扶養手当の取扱い

㊦ 第13

3 国民年金（福祉年金）及び児童扶養手当の取扱い

(省 略)

第14 施行期日等

(省 略)

医療扶助運営要領



現 行	改 正 案
<p>第二 医療扶助運営体制</p> <p>1 都道府県、指定都市及び中核市の本庁関係</p> <p>(4) ア 審議事項</p> <p>(ア) 結核入院院要否判定</p> <p>(イ) 精神疾患入院院要否判定</p> <p>(ウ) 結核、精神疾患以外の傷病による入院要否の判定</p> <p>(エ) (老人)訪問看護の要否判定</p> <p>(オ) 在宅患者加算等各種給付の要否の判定</p> <p>(カ) その他必要と認められるもの</p> <p>2 福祉事務所関係</p> <p>(6) 手続書類</p> <p>エ 保護変更申請書(傷病届)及び(老人)訪問看護要否意見書(様式第一七号)</p> <p>オ～ク (略)</p> <p>ケ (老人)訪問看護に係る利用料請求書(様式第二三号の七)</p> <p>(7) 本省に対する情報提供</p> <p>保護の実施機関は、国民健康保険、健康保険、老人保健の診療における取扱い等により難いものについては、医療扶助の特別基準設定につき情報提供すること。なお、その際には次の事項に関する書類を添付すること。</p> <p>ア 特別基準を必要とする理由</p> <p>イ 特別基準の申請額およびこれが最低限度の額であること</p> <p>ウ 関係専門医等の意見を証する書類</p> <p>エ その他アに関連して参考となる資料</p>	<p>第二 医療扶助運営体制</p> <p>1 都道府県、指定都市及び中核市の本庁関係</p> <p>(4) ア 審議事項</p> <p>(ア) 結核入院院要否判定</p> <p>(イ) 精神疾患入院院要否判定</p> <p>(ウ) 結核、精神疾患以外の傷病による入院要否の判定</p> <p>(エ) 訪問看護の要否判定</p> <p>(オ) 在宅患者加算等各種給付の要否の判定</p> <p>(カ) その他必要と認められるもの</p> <p>2 福祉事務所関係</p> <p>(6) 手続書類</p> <p>エ 保護変更申請書(傷病届)及び訪問看護要否意見書(様式第一七号)</p> <p>オ～ク (略)</p> <p>ケ 訪問看護に係る利用料請求書(様式第二三号の七)</p> <p>(7) 本省に対する情報提供</p> <p>保護の実施機関は、国民健康保険及び健康保険の診療における取扱い等により難いものについては、医療扶助の特別基準設定につき情報提供すること。なお、その際には次の事項に関する書類を添付すること。</p> <p>ア 特別基準を必要とする理由</p> <p>イ 特別基準の申請額およびこれが最低限度の額であること</p> <p>ウ 関係専門医等の意見を証する書類</p> <p>エ その他アに関連して参考となる資料</p>

第三 医療扶助実施方式

1 医療扶助の申請

(1) 保護開始申請(入院・入院外)

法による保護を受けていない者が、医療扶助のみ又は医療扶助と同時に他の扶助を申請する場合には、保護申請書の一般的記載事項のほか、申請の事由欄に当該傷病の部位、発病時期、病状、社会保険の被保険者又は被扶養者たる資格の有無、老人保健法の医療受給者証の有無、その他参考事項を記載したうえ福祉事務所長に提出させること

(2) (略)

(3) 各給付要否意見書の発行

ア 医療扶助の開始につき申請があった場合には、申請者の実情に応じ、医療要否意見書、精神疾患入院要否意見書又は保護変更申請書(傷病届)・(老人)訪問看護要否意見書(以下「医療要否意見書等」という。)に福祉事務所又は町村の担当員が必要事項を記載の上、申請者に対してこれらの取扱について十分説明し、速やかに指定医療機関において所要事項の記入を受け、福祉事務所長又は町村長に提出するよう指導して発行するものとする。

2 医療扶助の決定

(1) 決定の際の留意事項

ウ 入院等に関する都道府県本庁に対する技術的助言の求め
一般入院要否判定基準及び老人訪問看護要否判定基準並びに精神医療取扱要領に基づく判定の結果、入院等の要否についてなお疑義のある場合は都道府県知事に技術的な助言を求めること。

第三 医療扶助実施方式

1 医療扶助の申請

(1) 保護開始申請(入院・入院外)

法による保護を受けていない者が、医療扶助のみ又は医療扶助と同時に他の扶助を申請する場合には、保護申請書の一般的記載事項のほか、申請の事由欄に当該傷病の部位、発病時期、病状、社会保険の被保険者又は被扶養者たる資格の有無、後期高齢者医療制度の被保険者資格の有無、その他参考事項を記載したうえ福祉事務所長に提出させること

(2) (略)

(3) 各給付要否意見書の発行

ア 医療扶助の開始につき申請があった場合には、申請者の実情に応じ、医療要否意見書、精神疾患入院要否意見書又は保護変更申請書(傷病届)・訪問看護要否意見書(以下「医療要否意見書等」という。)に福祉事務所又は町村の担当員が必要事項を記載の上、申請者に対してこれらの取扱について十分説明し、速やかに指定医療機関において所要事項の記入を受け、福祉事務所長又は町村長に提出するよう指導して発行するものとする。

2 医療扶助の決定

(1) 決定の際の留意事項

ウ 入院等に関する都道府県本庁に対する技術的助言の求め
一般入院要否判定基準、訪問看護要否判定基準並びに精神医療取扱要領に基づく判定の結果、入院等の要否についてなお疑義のある場合は都道府県知事に技術的な助言を求めること。

また、福祉事務所の所在する都道府県等の区域外にある医療機関に患者を委託する場合の医療機関の選定について疑義がある場合も同様とすること。

工 (略)

才 訪問看護要否判定基準

訪問看護は、疾病又は負傷により居室において継続して療養を受ける状態にある者に対し、その者の居室において看護婦等が行う療養上の世話又は診療の補助を必要とする場合に限り認められること。

なお、利用者の選定に係る営業時間外等の訪問看護は、これを必要とする真にやむを得ない事由が認められる場合に限ること。

力 老人訪問看護要否判定基準

老人訪問看護は、疾病、負傷等により、寝たきりの状態にある老人又はこれに準ずる状態にある老人に対し、その者の家庭において看護婦等が行う療養上の世話又は診療の補助を必要とする場合に限り認められること。

なお、利用者の選定に係る営業時間外等の老人訪問看護は、これを必要とする真にやむを得ない事由が認められる場合に限ること。

キ

保護施設等における医療の取扱い

救護施設、更生施設、養護老人ホーム、特別養護老人ホーム及び介護老人福祉施設における入所者の医療については、原則として、医療扶助は適用しないこと。ただし、病状によってはこの原則を貫くことが困難な場合も予想されるので真に当該施設においては措置できないと認められる場合に限り、医療扶助を適用して差しつかえないこと。

(2) (略)

(3) 医療扶助の変更に關する決定

また、福祉事務所の所在する都道府県等の区域外にある医療機関に患者を委託する場合の医療機関の選定について疑義がある場合も同様とすること。

工 (略)

才 訪問看護要否判定基準

訪問看護は、疾病又は負傷により居室において継続して療養を受ける状態にある者に対し、その者の居室において看護婦等が行う療養上の世話又は診療の補助を必要とする場合に限り認められること。

なお、要介護者又は要支援者に対する訪問看護は、介護保険又は介護扶助による給付が優先されるため、医療扶助による給付は、急性増悪時の訪問看護及び末期がん・難病等に対する訪問看護に限られるものであること。

力 保護施設等における医療の取扱い

救護施設、更生施設、養護老人ホーム、特別養護老人ホーム及び介護老人福祉施設における入所者の医療については、原則として、医療扶助は適用しないこと。ただし、病状によってはこの原則を貫くことが困難な場合も予想されるので真に当該施設においては措置できないと認められる場合に限り、医療扶助を適用して差しつかえないこと。

(2) (略)

(3) 医療扶助の変更に關する決定

キ 診療中に(老人)訪問看護、治療材料、施術または移送の給付を必要とすることを確認したとき、又はこれらの給付につき変更すべきことを確認したとき

(4) (略)

(5) 医療券の発行

工

(カ) 七五歳以上の者(平成一四年九月三〇日において七〇歳以上である者(同年一〇月一日において七五歳以上である者を除く。以下「経過措置対象者」という。)を含む。)及び六五歳以上七五歳未満の者(経過措置対象者を除く。)であって老人保健法施行令(昭和五七年一二月政令第二九三号)別表第一に定める程度の障害の状態にあるもの(以下「七五歳以上の者等」という。)についての医療券には、「備考」欄の余白に七五歳以上の者等に該当するに至った日の属する月の翌月(その日が月の初日であるときは、その日の属する月)から(老保)と表示すること。

3 医療扶助の継続等

(1) 医療券によって医療扶助を受けている者が、引き続き翌月にわたって医療を必要とするときは、第三の2の(5)に定めるところにより、翌月分の医療券を発行すること。

ただし、その者が引き続き三か月(第三の1の(3)のウの(ウ)に該当するもの(以下「併給入院外患者」という。)及び(老人)訪問看護の利用者は、六か月)を超えて医療を必要とするときは、第四分(併給入院外患者及び(老人)訪問看護の利用者は、第七月分)の医療券を発行する前にあらかじめ第三の1の(3)の(ア)に定めるところに準じて発行した医療券要否意見書等により第四以降(併給入院外患者及び(老人)訪問看護の利用者は、第七月以降)における医療扶助継続の要否を十分検討することとし、さらに引き続き医療を必要

キ 診療中に訪問看護、治療材料、施術または移送の給付を必要とすることを確認したとき、又はこれらの給付につき変更すべきことを確認したとき

(4) (略)

(5) 医療券の発行

工

(カ) 七五歳以上の者及び六五歳以上七五歳未満の者であって高齢者の医療の確保に関する法律施行令別表に定める程度の障害の状態にあるもの(被用者保険の加入者を除く。(以下「七五歳以上の者等」という。))についての医療券には、「備考」欄の余白に七五歳以上の者等に該当するに至った日の属する月の翌月(その日が月の初日であるときは、その日の属する月)から()と表示すること。

3 医療扶助の継続等

(1) 医療券によって医療扶助を受けている者が、引き続き翌月にわたって医療を必要とするときは、第三の2の(5)に定めるところにより、翌月分の医療券を発行すること。

ただし、その者が引き続き三か月(第三の1の(3)のウの(ウ)に該当するもの(以下「併給入院外患者」という。)及び訪問看護の利用者は、六か月)を超えて医療を必要とするときは、第四分(併給入院外患者及び訪問看護の利用者は、第七月分)の医療券を発行する前にあらかじめ第三の1の(3)の(ア)に定めるところに準じて発行した医療券要否意見書等により第四以降(併給入院外患者及び訪問看護の利用者は、第七月以降)における医療扶助継続の要否を十分検討することとし、さらに引き続き医療を必要とするときは、三か月(併

給入院患者及び訪問看護の利用者は、六か月)を経過することと同様の手続により医療扶助継続の要否を十分検討すること。

この場合において、福祉事務所長は、医療扶助を受けている者(併給入院外患者及び訪問看護の利用者を除く。)につき、嘱託医の意見により、四か月以上引き続き医療を必要とすると認めるときは、本項ただし書き前段の規定にかかわらず、四か月以上六か月以内の期間ごとに発行する医療要否意見書等により医療扶助継続の要否を検討することとして差つかえないこと。

なお、併給入院外患者及び訪問看護の利用者については、医療開始後第六月までに限り、他の方法により引き続き翌月にわたって医療の必要の有無を検討することができるときは、医療要否意見書の提出を求めるとなく翌月の医療券を発行して差つかえないこと。

4 一般診療に関する診療方針および診療報酬並びに指定医療機関の請求

(3) 病院又は診療所への入院及びその療養に伴う世話その他の看護のうち食事の提供たる療養及び温度、照明及び給水に関する適切な療養環境の形成たる療養に係る診療報酬については、入院時食事療養費に係る食事療養及び入院時生活療養費に係る生活療養の費用の額の算定に関する基準(平成十八年三月厚生労働省告示第九九号)の例による。

また、健康保険法による訪問看護に係る費用については、訪問看護療養費に係る指定訪問看護の費用の額の算定方法(平成十八年三月厚生労働省告示第一〇二号)の例によることとし、訪問看護の基本利用料以外の利用料に相当する費用については、必要最小限度の実費の額とすること。

とすときは、三か月(併給入院外患者及び(老人)訪問看護の利用者は、六か月)を経過することと同様の手続により医療扶助継続の要否を十分検討すること。

この場合において、福祉事務所長は、医療扶助を受けている者(併給入院外患者及び(老人)訪問看護の利用者を除く。)につき、嘱託医の意見により、四か月以上引き続き医療を必要とすると認めるときは、本項ただし書き前段の規定にかかわらず、四か月以上六か月以内の期間ごとに発行する医療要否意見書等により医療扶助継続の要否を検討することとして差つかえないこと。

なお、併給入院外患者及び(老人)訪問看護の利用者については、医療開始後第六月までに限り、他の方法により引き続き翌月にわたって医療の必要の有無を検討することができるときは、医療要否意見書の提出を求めるとなく翌月の医療券を発行して差つかえないこと。

4 一般診療に関する診療方針および診療報酬並びに指定医療機関の請求

(3) 病院又は診療所への入院及びその療養に伴う世話その他の看護のうち食事の提供たる療養及び温度、照明及び給水に関する適切な療養環境の形成たる療養に係る診療報酬については、入院時食事療養費に係る食事療養及び入院時生活療養費に係る生活療養の費用の額の算定に関する基準(平成十八年三月厚生労働省告示第九九号)の例による。

また、健康保険法による訪問看護に係る費用については、訪問看護療養費に係る指定訪問看護の費用の額の算定方法(平成十八年三月厚生労働省告示第一〇二号)の例によることとし、(老人)訪問看護の基本利用料以外の利用料に相当する費用については、必要最小限度の実費の額とすること。

(4) 老人保健の例による診療方針及び診療報酬(保険外併用療養費の支給に係るものを除く。)は、七五歳以上の者等に該当するに至った日の属する月の翌月(その日が月の初日であるときは、その日の属する月)から適用するものとす。

また、「六五歳以上七五歳未満の者(経過措置対象者を除く。)であつて老人保健法施行令別表第一に定める程度の障害の状態にあるもの」に該当するか否かの認定は、国民健康保険法第六号の規定により同法の適用を除外されている者の場合は福祉事務所長が行うこととなるが、原則として生活保護法による保護の基準(昭和三八年四月厚生省告示第一五八号)別表第一第二章4障害者加算の例によること。

(5) 通算対象入院料(一般病棟入院基本料(特別入院基本料及び老人特定入院基本料を含む。)、特定機能病院入院基本料(一般病棟の場合に限る。)、専門病院入院基本料及び老人一般病棟入院医療管理料をいう。)を算定する病棟に一八〇日を超えて入院している患者で厚生労働大臣が別に定める患者に該当しない者のうち、いかなる方法によつても退院後の受入先が確保できない者であつて真にやむを得ないと判断される者については、別に定めるところにより、受入先が確保されるまでの間、当該患者が一八〇日経過するまでに保険給付の対象とされていた入院基本料の範囲内において必要な額を認定して差し支えないこと。

(6) 指定医療機関が、医療券によつて診療を行なつた場合には、診療報酬明細書又は(老人)訪問看護療養費明細書に必要事項を記載して発行した福祉事務所ごとにとりまとめ、当月診療分を所定の様式による診療報酬請求書を添えてこれらの書類を翌月一〇日までに当該指定医療機関の所在す

(4) 後期高齢者医療の例による診療方針及び診療報酬(保険外併用療養費の支給に係るものを除く。)は、七五歳以上の者等に該当するに至った日の属する月の翌月(その日が月の初日であるときは、その日の属する月)から適用するものとする。

また、「六五歳以上七五歳未満の者であつて高齢者の医療の確保に関する法律施行令別表に定める程度の障害の状態にあるもの」に該当するか否かの認定は、国民健康保険法第六号の規定により同法の適用を除外されている者の場合は福祉事務所長が行うこととなるが、原則として生活保護法による保護の基準(昭和三八年四月厚生省告示第一五八号)別表第一第二章4障害者加算の例によること。

(5) 通算対象入院料(一般病棟入院基本料(特別入院基本料及び一般病棟の場合に限る。)、特定機能病院入院基本料(一般病棟入院医療管理料をいう。)を算定する病棟に一八〇日を超えて入院している患者で厚生労働大臣が別に定める患者に該当しない者のうち、いかなる方法によつても退院後の受入先が確保できない者であつて真にやむを得ないと判断される者については、別に定めるところにより、受入先が確保されるまでの間、当該患者が一八〇日経過するまでに保険給付の対象とされていた入院基本料の範囲内において必要な額を認定して差し支えないこと。

(6) 指定医療機関が、医療券によつて診療を行なつた場合には、診療報酬明細書又は訪問看護療養費明細書に必要事項を記載して発行した福祉事務所ごとにとりまとめ、当月診療分を所定の様式による診療報酬請求書を添えてこれらの書類を翌月一〇日までに当該指定医療機関の所在する都道

る都道府県の社会保険診療報酬支払基金の支部(以下「支払基金」という。)に提出させるものとする。

5～8 (略)

9 移送の給付

移送の給付につき、申請があった場合には、給付要否意見書(移送)に必要事項を記載のうえ、すみやかに指定医療機関及び取扱業者において所要事項の記入を受け、福祉事務所長又は町村長に提出するよう指導して発行すること。

ただし、医療要否意見書等により移送を要することが明らかなる場合で、かつ、移送に要する交通費等が確実に確認できるときは、給付要否意見書(移送)の提出を求めない必要はないこと。

なお、医療扶助による移送は、適当な交通機関により患者を輸送し、乗車券を与え、または必要金銭を給付する等の方法で行ない、その旨の記録を保存し、原則として領収書を徴すること。

移送の給付を行なうにあたって留意を要する点は次のとおりであること。

(1) 給付要否意見書(移送)の発行要保護者の申請に基づき、給付要否意見書(移送)を発行するものとする。

(2) 移送給付方針および移送費

ア 給付方針

最低限度の移送を、原則として現物給付するものとし、その範囲は次によること。

府県の社会保険診療報酬支払基金の支部(以下「支払基金」という。)に提出させるものとする。

5～8 (略)

9 移送の給付

(1) 給付の範囲

ア 一般的給付

移送の給付については、国民健康保険の例により、次に掲げる範囲の移送について給付を行うものとする。

(ア) 負傷した患者が災害現場等から医療機関に緊急搬送される場合

(イ) 離島等で疾病にかかり、又は負傷し、その症状が重篤であり、かつ、傷病が発生した場所の付近の医療機関では必要な医療が不可能であるか又は著しく困難であるため、必要な医療の提供を受けられる最寄りの医療機関に移送を行う場合

(ウ) 移動困難な患者であつて、患者の症状からみて、当該医療機関の設備等では十分な診療ができず、医師の指示により転院する場合

(エ) 移植手術を行うために、臓器等の摘出を行う医師等の派遣及び摘出臓器等の搬送に交通費又は搬送代が必要な場合(ただし、国内搬送に限る。)

イ 例外的給付

上記アの範囲で対応が困難な場合には、個別にその内容を審査し、次に掲げられる事項に該当するものとして真にやむを得ないと認められる場合には例外的に支給を認めずして差し支えないこととする。

なお、その場合でも通院等を行う医療機関については、

(ア) 入院、転院、退院、通院、検診命令による受診又は外泊(病院長が精神疾患等入院患者の治療効果を判定するた
めに、当該患者を一時外泊させてその病状の経過を観察す
ることが適当であると認められた場合に限る。)に伴う移送の
ための交通費(付添、供血又は死体腎の移植を必要とする
真にやむを得ない事情があるときは、付添人、供血者又は
腎摘出のため派遣された医師についても認められること。)

(イ) 医療機関の自家用車およびこれに準ずるもの以外の交
通機関による往診等のための交通費

(ウ) 医療機関の自家用車による往診等の場合は、その燃料
代

(エ) 死体腎を移植するため摘出腎を搬送した場合は、そ
の搬送代(ただし、国内搬送に限る。)

イ 費用

最小限度の実費(弁当代または付添者の日当等を必要とす
る場合は、これらを含む。)の額とすること。

原則として福祉事務所管内の医療機関に限るものであるこ
と。

また、給付については、療養に必要な最小限度の日数に
限り、傷病等の状態に応じて最も経済的な経路及び交通手
段によって行うものであること。

(ア) 身体障害等により、電車・バス等の利用が著しく困
難な者であって、当該者が最寄りの医療機関に通院等を行
う際に交通費が必要な場合

(イ) へき地等により最寄りの医療機関に電車・バス等で
通院する場合であっても、当該費用の負担が著しく高額に
なる場合

(ウ) 検診命令により検診を受ける際に交通費が必要とな
る場合

(エ) 医師の往診等に係る交通費又は燃料費が必要な場合

(2) 給付手続き

ア 一般的給付

被保護者から申請があった場合、福祉事務所において、
内容を確認の上、給付の決定を行うこと。

なお、緊急の場合であって、事前の申請が困難なやむを得
ない事由があると認められる場合については、事後の申
請であっても内容確認の上、給付決定を行って差し支えな
いこと。

イ 例外的給付

被保護者から申請があった場合、主治医からの要否意見
書の提出及びその内容に関する囑託医協議、必要に応じて
検診命令を行い、次に掲げる事項を把握した上で福祉事務
所において必要性を判断し、給付の対象となる医療機関、
日数、経路及び利用する交通機関を決定すること。

(ア) 病状等から徒歩又は電車・バスを利用して通院する

ことが可能かどうか

(イ) 通院先の医療機関は、必要な医療の提供が可能な医療機関のうち最寄りの医療機関であるか

なお、移送の際に利用する交通機関については、地域の実態料金や複数事業者の見積等により検討を行った上で、最も経済的な交通機関を福祉事務所において決定すること。

また、福祉事務所において給付決定をする以前に交通機関を利用した際の交通費や福祉事務所において決定した内容と医療機関、日数、経路、交通機関が異なる場合の交通費については、原則として給付の対象にならないものであること。

(3) 費用

ア 移送に要する費用は、傷病等の状態に応じ、最も経済的な方法及び経路により移送を行ったものとして算定される交通費とすること。

なお、身体障害者等の割引運賃が利用できる場合には、当該割引運賃を用いて算定した額とすること。

イ 当該料金の算定にあたっては、領収書、複数業者の見積書、地域の実態料金等の挙証資料に基づき、額の決定を行うこと。

第四 医療扶助指定機関

1 医療機関指定基準

イ 老人保健法第二五条第三項第二号の規定による定め

ウ 感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法

第四 医療扶助指定機関

1 医療機関指定基準

イ 感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法

律第三七条の二に規定する内容の医療を行う医療機関にあつては、同法第三八条第一項の規定による指定

第五 診療報酬の審査および支払

1 診療報酬の審査および支払

(3) 審査および支払の事務処理

都道府県知事および市町村長は、支払基金事務所の支部から送付された診療報酬明細書若しくは(老人)訪問看護療養費明細書又は併用分患者についてはこれらに代えて作成された連名簿(以下「明細書等」という。)を、医療券を発行した福祉事務所に送付すること。

2、3 (略)

4 診療報酬以外の費用の支払等

(1) 治療材料費、施術料、看護料等の支払

治療材料費、施術料及び(老人)訪問看護における基本利用料以外の利用料に相当する費用については、福祉事務所長は、請求関係書類を審査し、請求額を確認した上、これを請求者に支払うこと。

なお、(老人)訪問看護における基本利用料以外の利用料に相当する費用については、指定訪問看護事業者に利用料請求書を当月分について作成させ、翌月一〇日までに医療券を発行した福祉事務所長に提出させるものとする。

律第三七条の二に規定する内容の医療を行う医療機関にあつては、同法第三八条第一項の規定による指定

第五 診療報酬の審査および支払

1 診療報酬の審査および支払

(3) 審査および支払の事務処理

都道府県知事および市町村長は、支払基金事務所の支部から送付された診療報酬明細書若しくは訪問看護療養費明細書又は併用分患者についてはこれらに代えて作成された連名簿(以下「明細書等」という。)を、医療券を発行した福祉事務所に送付すること。

2、3 (略)

4 診療報酬以外の費用の支払等

(1) 治療材料費、施術料、看護料等の支払

治療材料費、施術料及び訪問看護における基本利用料以外の利用料に相当する費用については、福祉事務所長は、請求関係書類を審査し、請求額を確認した上、これを請求者に支払うこと。

なお、訪問看護における基本利用料以外の利用料に相当する費用については、指定訪問看護事業者に利用料請求書を当月分について作成させ、翌月一〇日までに医療券を発行した福祉事務所長に提出させるものとする。

改正案

様式第17号

保護変更申請書(傷病届)

※指定医療機関名	※発行年月日	※受理年月日
利用者氏名	居住地	生・住・教・医・その他
世帯主氏名	現在受けている扶助	
病状及び理由		年 月 日
上記のとおり生活保護法による保護の変更を申請します。		
福祉事務所長 殿		
申請者 氏名		住所
福祉事務所長 殿		利用者との関係

訪問看護要否意見書(新規・継続)

※利用者氏名	※生年月日	年 月 日
主たる病名	訪問看護開始年月日	年 月 日
病状・治療状態 (改善の見込み等)	訪問看護 1 1回 4 4回以上 2 2回 5 その他 3 3回 (週当たり)	
訪問看護見込期間	か月 見込回数 (週当たり)	
要給が適当と思われる 訪問看護事業者	所在地 名称	
上記のとおり訪問看護を(1)要する(2)要しないと認めます。	福祉事務所長 殿	年 月 日
福祉事務所長 殿	指定医療機関の所在地及び名称 指定医療機関の長又は施設者氏名	
※福祉事務所嘱託医 意見	訪問看護の要否(ア)要する(イ)要しない	
	1 訪問看護見込期間(か月)	
	2 訪問看護見込回数(週当たり 回)	
	3 訪問看護見込回数(週当たり 回)	
	4 参考意見	
	嘱託医	年 月 日

(注意) 1 ※印の欄は福祉事務所で記入します。

現行

様式第17号

保護変更申請書(傷病届)

※指定医療機関名	※発行年月日	※受理年月日
利用者氏名	居住地	生・住・教・医・その他
世帯主氏名	現在受けている扶助	
病状及び理由		年 月 日
上記のとおり生活保護法による保護の変更を申請します。		
福祉事務所長 殿		
申請者 氏名		住所
福祉事務所長 殿		利用者との関係

訪問看護要否意見書(新規・継続)
老人訪問看護

※利用者氏名	※生年月日	年 月 日
主たる病名	訪問看護開始年月日	年 月 日
病状・治療状態 (改善の見込み等)	訪問看護 1 1回 4 4回以上 2 2回 5 その他 3 3回 (週当たり)	
訪問看護見込期間	か月 見込回数 (週当たり)	
要給が適当と思われる 訪問看護事業者	所在地 名称	
上記のとおり訪問看護を(1)要する(2)要しないと認めます。	福祉事務所長 殿	年 月 日
福祉事務所長 殿	指定医療機関の所在地及び名称 指定医療機関の長又は施設者氏名	
※福祉事務所嘱託医 意見	訪問看護の要否(ア)要する(イ)要しない	
	1 訪問看護見込期間(か月)	
	2 訪問看護見込回数(週当たり 回)	
	3 訪問看護見込回数(週当たり 回)	
	4 参考意見	
	嘱託医	年 月 日

(注意) 1 ※印の欄は福祉事務所で記入します。

「訪問看護 老人訪問看護」の部分は、不要なものをで消してください。

現 行

改 正 案

様式第23号の7

様式第23号の7

訪問看護に係る利用料請求書
老人訪問看護

訪問看護に係る利用料請求書

(年 月分・訪問回数 回)

基本利用料以外の利用料	単位	単価	金額	摘要
	回	円	円	
合計金額		請求	※ 決 定	
			円	円

(利用者氏名) _____ に係る上記明細書による訪問看護に係る利用料を請求します。
平成 年 月 日
福祉事務所長 殿 住所 事業者名 ㊦

請求書

(注) 1 ※印の欄は、福祉事務所で記入します。
2 要欄には利用料の内容が分かるように具体的に記入してください。
3 「訪問看護」の部分には、不要なものを「—」で消してください。

(老人)訪問看護に係る利用料明細書

(年 月分・訪問回数 回)

基本利用料以外の利用料	単位	単価	金額	摘要
	回	円	円	
合計金額		請求	※ 決 定	
			円	円

(利用者氏名) _____ に係る上記明細書による訪問看護に係る利用料を請求します。
平成 年 月 日
福祉事務所長 殿 住所 事業者名 ㊦

請求書

(注) 1 ※印の欄は、福祉事務所で記入します。
2 要欄には利用料の内容が分かるように具体的に記入してください。

別紙第1号 医療係等の行なうべき職務内容

2 福祉事務所関係

(2) 地区担当員

オ アから工までの事務を行うのに必要な各給付要否意見書
等並びに診療報酬明細書及び(老人)訪問看護療養費明細書の
の検討

(3) 嘱託医

ウ 診療報酬明細書及び(老人)訪問看護療養費明細書の内容
の検討

別紙第2号 他法関係

(7) 国民健康保険法関係

社会保険関係のうち、国民健康保険法関係は、次によって
取り扱うこと。

ア 法による保護を受けた世帯の世帯員は、その世帯が保護
を受けなくなるまでは、保護を停止されている間を除き、
市町村又は特別区が行なう国民健康保険の被保険者となる
ことはできないから、国民健康保険が行なわれている市町
村又は特別区の区域内に住所を有する者に係る保護の開始、
停止又は廃止の処分が行なわれたときは、その旨を市町村
又は特別区の長に連絡すること。

この場合、「保護」とは、法第一一条第一項に規定する
扶助をい、施設事務費のみの対象となるもの(昭和三八年
四月一日社発第二四六号本職通知「生活保護法による保護
の実施要領について」第八の2の(4)のウの(ア)に該当する
ものを除く。)は含まれないものであること。

イ 国民健康保険法第六号の規定により同法の適用を
除外されている世帯で、本人支払額が国民健康保険料相当
額等(国民健康保険法の適用を受けた場合の保険料及び自己
負担額並びに医療扶助の対象とならない治療材料及び医師

別紙第1号 医療係等の行なうべき職務内容

2 福祉事務所関係

(2) 地区担当員

オ アから工までの事務を行うのに必要な各給付要否意見書
等並びに診療報酬明細書及び訪問看護療養費明細書の検討

(3) 嘱託医

ウ 診療報酬明細書及び訪問看護療養費明細書の内容検討

別紙第2号 他法関係

(7) 国民健康保険法及び高齢者の医療の確保に関する法律関

係

社会保険関係のうち、国民健康保険法及び高齢者の医療
の確保に関する法律関係は、次によって取り扱うこと。

ア 法による保護を受けた世帯の世帯員は、その世帯が保護
を受けなくなるまでは、保護を停止されている間を除き、
市町村又は特別区が行なう国民健康保険及び後期高齢者医
療広域連合が行う後期高齢者医療の被保険者となることは
できないから、市町村、特別区又は広域連合の区域内に住
所を有する者に係る保護の開始、停止又は廃止の処分が行
なわれたときは、その旨を市町村、特別区又は広域連合の
長に連絡すること。

この場合、「保護」とは、法第一一条第一項に規定する
扶助をい、施設事務費のみの対象となるもの(昭和三八年
四月一日社発第二四六号本職通知「生活保護法による保護
の実施要領について」第八の2の(4)のウの(ア)に該当する
ものを除く。)は含まれないものであること。

イ 国民健康保険法第六号及び高齢者の医療の確保に
関する法律第五十一条の規定により同法の適用を除外され

が往診する際の交通費)を上回るに至った世帯については、生活保護法による保護を廃止して国民健康保険に加入させること。

(8) 老人保健法関係

社会保険の加入者で七五歳以上の者等に対しては、老人保健法による医療が行われるので、次の各号に留意の上、これが活用に配慮すること。

ア 福祉事務所長は、医療扶助によって医療を受けようとする要保護者が七五歳以上の者等であると認められるときは、老人保健法による医療を受けることができるか否かを必要に応じ市町村長に確認すること。

イ 老人保健法による医療を受ける者は、一部負担金を支払うこととなるが、当該一部負担金等は医療扶助の対象となるものであること。

ウ 当該老人保健法による高額医療費支給制度が当該要保護者に適用されているかどうか確認すること。

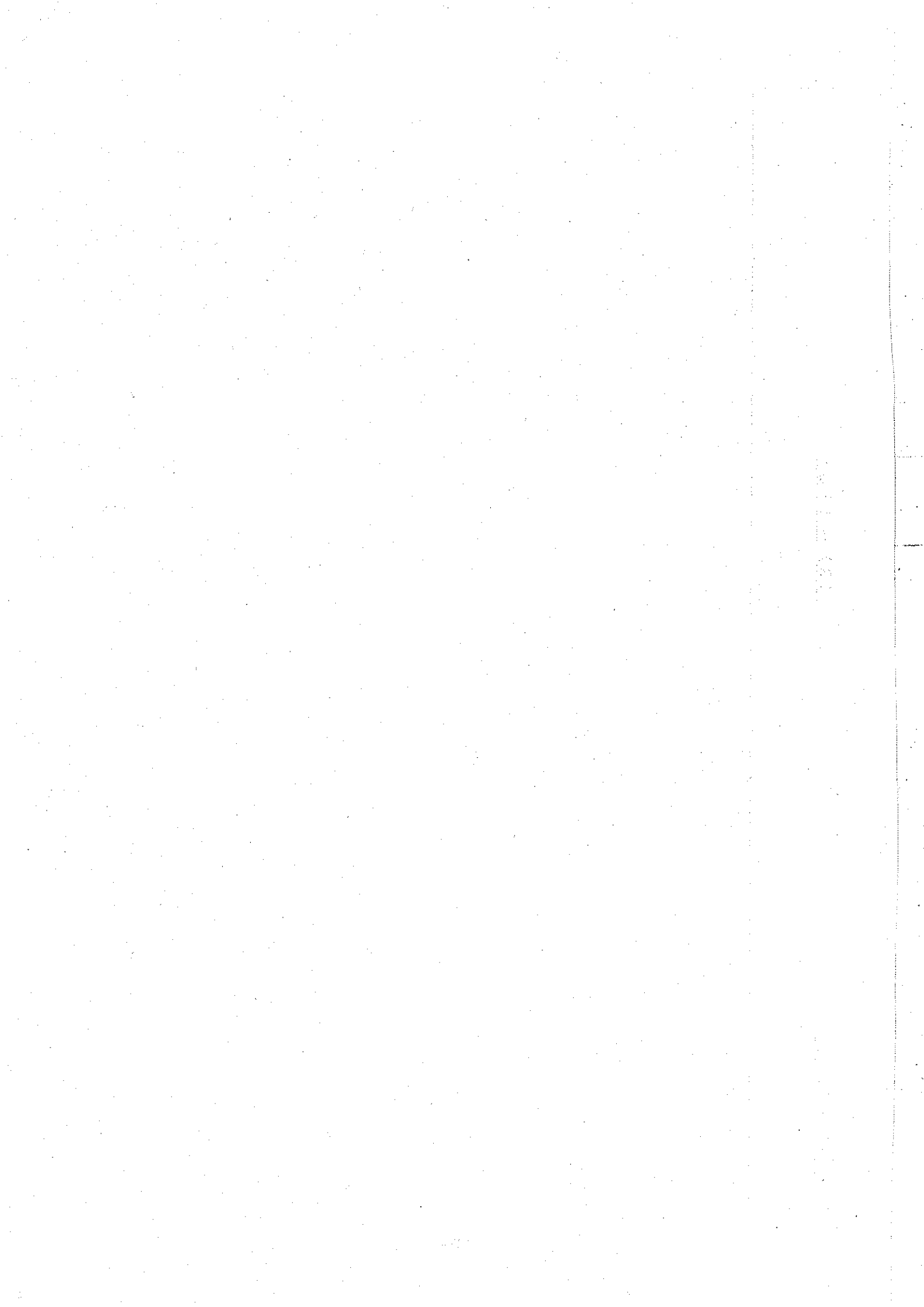
なお、福祉事務所長は高額医療費支給制度の適用により保護を要しなくなる者については、保護の申請を却下し、又は保護を廃止することとなるが、その場合は、この措置が要保護者の利益となることを十分説明するとともに、高額医療費支給制度の適用が償還払いにより行われるときは、その間生活に困窮する場合が生ずることも考えられるので、他法、他施策の活用あつせん等の援助について十分配慮すること。

ている世帯で、本人支払額が国民健康保険料又は後期高齢者医療の保険料相当額等(国民健康保険法の適用を受けた場合の保険料及び自己負担額並びに医療扶助の対象とならない治療材料及び医師が往診する際の交通費)を上回るに至った世帯については、生活保護法による保護を廃止して国民健康保険又は後期高齢者医療に加入させること。

(削除)

(9) ~ (11)

(8) ~ (10)



都道府県
各 指定都市 生活保護担当課（部） 御中
中核市

厚生労働省社会・援護局保護課

健康保険法等の一部を改正する法律（平成18年法律第83号）の一部施行に伴う
生活保護制度及び医療保険制度の適用関係等について

生活保護の適正な運営につきましては、平素より格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、平成20年4月より、健康保険法等の一部を改正する法律（平成18年法律第83号）の一部が施行されることに伴い、老人保健法（昭和57年法律第80号）の一部が改正され、題名が「高齢者の医療の確保に関する法律」となるとともに、後期高齢者医療制度が創設されますが、高齢者の医療の確保に関する法律（昭和57年法律第80号。以下「高齢者医療確保法」という。）の規定により、生活保護法（昭和25年法律第144号）による保護を受けている世帯に属する者（その保護を停止されている世帯を除く。以下「被保護者」という。）については、後期高齢者医療制度の適用除外とされることとなります。

今般、健康保険法等の一部を改正する法律の一部施行に伴う生活保護制度及び医療保険制度の適用関係等について、下記のとおり整理を致しましたので、ご確認いただくとともに、管内福祉事務所への周知についてよろしくお願いいたします。

記

1. 生活保護制度及び医療保険制度の適用関係について

(1) 75歳以上の者

平成20年4月以降、75歳以上の者は、高齢者医療確保法第50条第1号の規定により、後期高齢者医療制度の被保険者となるが、被保護者については、高齢者医療確保法第51条第1号の規定により、後期高齢者医療制度の適用除外とされる。

また、同号の規定により適用除外となる者については、健康保険法等の一部を改正する法律第3条による改正後の健康保険法（大正11年法律第70号。以下「平成20年改正後健保法」という。）第3条第1項第7号、第2項、第4項及び第7項等の規定により、健康保険等の被用者保険においても適用除外とされる。

したがって、同年4月以降、75歳以上の被保護者については、医療保険制度から保険給付を受けることはなく、必要な医療費の全額について、生活保護の医療扶助が行われることとなる。

(2) 65歳以上75歳未満の者

65歳以上75歳未満の者については、後期高齢者医療広域連合（以下「広域連合」という。）の障害認定（※1）を受けることにより後期高齢者医療制度の被保険者とな

ることが可能（高齢者医療確保法第50条第2号）であるが、当該認定を受けた後期高齢者医療制度の被保険者であるか否かによって、生活保護制度との適用関係が以下のとおりとなる。

ア 広域連合の障害認定を受け、後期高齢者医療制度の被保険者となった者が生活保護の適用を受ける場合

（1）と同様に、医療保険制度の適用除外となることから、生活保護の適用後は、必要な医療費の全額について医療扶助が行われることとなる。

イ 広域連合の障害認定を受けておらず、健康保険等の被用者保険の被保険者又は被扶養者である者が生活保護の適用を受ける場合

平成20年改正後健保法第3条第1項第7号等の規定による適用除外には該当しないことから、生活保護の適用を受けることとなっても、健康保険等の被用者保険の被保険者等の資格を喪失せず、必要な医療費のうち、健康保険等の被用者保険からの保険給付を除いた自己負担分（※2）についてのみ、生活保護の医療扶助が行われることとなる。

（※1） 同年3月以前に受けた老人保健法に基づく市町村長の障害認定も、同年4月以降、広域連合から受けたものとみなされる（健康保険法等の一部を改正する法律附則第37条第2項）。

（※2） 65歳以上70歳未満の者については医療費総額の3割、70歳以上75歳未満の者については2割

2. 後期高齢者医療制度の施行（平成20年4月1日）にあたっての留意点

（1）75歳以上の被保護者

後期高齢者医療制度の適用除外となることから、各福祉事務所においては、これに該当する被保護者について、住所地を管轄する広域連合にその旨の情報提供を行われない。

（2）65歳以上75歳未満の者で、同年3月以前に老人保健法に基づく市町村長の障害認定を受け、老人医療受給対象者となっている被保護者

被保護者は上記1（2）アのとおり、同年4月以降は医療保険制度の適用除外となり、必要な医療費の全額について医療扶助が行われることとなるが、同年3月末までに、障害認定の申請を撤回した場合は、上記1（2）イのとおり、同年4月以降も健康保険等の被用者保険の被保険者等の資格を喪失せず、医療扶助は自己負担分についてのみ行われることとなる。

したがって、各福祉事務所においては、老人医療主管課等と連携の上、該当する被保護者に対して制度の説明を行うとともに、同年3月末までに障害認定の申請の撤回を行うかどうか、被保護者の意思を確認の上、手続きの援助等の必要な措置を講じられたい。

担当：厚生労働省社会・援護局保護課
医療係

電話：03-5253-1111（内線2829）

FAX：03-3592-5934

【参照条文】

○ 高齢者の医療の確保に関する法律（昭和57年法律第80号）（抄）

第五十条 次の各号に掲げる者は、後期高齢者医療広域連合が行う後期高齢者医療の被保険者とする。

- 一 後期高齢者広域連合の区域内に住所を有する七十五歳以上の者
- 二 後期高齢者医療広域連合の区域内に住所を有する六十五歳以上七十五歳未満の者であつて、厚生労働省令で定めるところにより、政令で定める程度の障害の状態にある旨の当該後期高齢者医療広域連合の認定を受けたもの

第五十一条 前条の規定にかかわらず、次の各号に掲げる者は、後期高齢者医療広域連合の行う後期高齢者医療の被保険者としない。

- 一 生活保護法（昭和二十五年法律第百四十四号）による保護を受けている世帯（その保護を停止されている世帯を除く。）に属する者
- 二 （略）

○ 高齢者の医療の確保に関する法律施行規則（平成19年厚生労働省令第129号）（抄）

第八条 法第五十条第二号の規定による後期高齢者医療広域連合の認定（以下「障害認定」という。）を受けようとする者は、障害認定申請書に、令別表に定める程度の障害の状態にあることを明らかにすることができる国民年金の年金証書、身体障害者手帳その他の書類を添付して、後期高齢者医療広域連合に申請しなければならない。

- 2 前項の規定による申請をした者は、いつでも、将来に向かってその申請を撤回することができる。

○ 健康保険法（大正11年法律第70号）（平成20年4月改正後）（抄）

第三条 この法律において「被保険者」とは、適用事業所に使用される者及び任意継続被保険者をいう。ただし次の各号のいずれかに該当する者は、日雇特例被保険者となる場合を除き、被保険者となることができない。

一～六（略）

七 後期高齢者医療の被保険者（高齢者の医療の確保に関する法律（昭和五十七年法律第八十号）第五十条の規定による被保険者をいう。）及び同条各号のいずれかに該当する者で同法第五十一条の規定により後期高齢者医療の被保険者とならないもの（以下「後期高齢者医療の被保険者等」という。）

八（略）

2 この法律において「日雇特例被保険者」とは、適用事業所に使用される日雇労働者をいう。ただし、後期高齢者医療の被保険者等である者又は次の各号のいずれかに該当する者として社会保険庁長官の承認を受けたものは、この限りでない。

一～三（略）

3（略）

4 この法律において「任意継続被保険者」とは、適用事業所に使用されなくなったため、又は第一項ただし書に該当するに至ったため被保険者（日雇特例被保険者を除く。）

の資格を喪失した者であつて、喪失の日の前日まで継続して二月以上被保険者（日雇特例被保険者、任意継続被保険者又は共済組合の組合員である被保険者を除く。）であつたもののうち、保険者に申し出て、継続して当該保険者の被保険者となつた者をいう。ただし、船員保険の被保険者又は後期高齢者医療の被保険者等である者は、この限りでない。

5・6 (略)

7 この法律において「被扶養者」とは、次に掲げる者をいう。ただし、後期高齢者医療の被保険者等である者は、この限りでない。

一～四 (略)

8～10 (略)

○ 健康保険法等の一部を改正する法律（平成18年法律第83号）（抄）

附 則

第三十七条 (略)

2 第七条の規定の施行の際現に受けている平成二十年四月改正前老健法第二十五条第一項第二号の規定による市町村長の認定（高齢者医療確保法第五十一条各号のいずれかに該当する者に係るものを除く。）は、高齢者医療確保法第五十条第二号の規定により後期高齢者医療広域連合から受けた認定とみなす。

別 冊 問 答



生活保護手帳（別冊問答） の改正

第3 資産の活用

（問135） 全面削除

〔新設〕

（問）〔公共交通機関の利用が著しく
困難な地域〕

課第3の9中の2及び3にいう「公共交通機関の利用が著しく困難な地域」とは、具体的にはどのような地域か。

（答）「公共交通機関の利用が著しく困難」であるか否かについては一律の基準を示すことは困難であるが、例えば、駅やバス停までの所要時間や、公共交通機関の1日あたりの運行本数、さらには当該地域の低所得者世帯の通勤実態等を勘案したうえで、自動車によらずに通勤することが現実に可能かどうかという観点から実施機関で総合的に判断されたい。

〔新設〕

（問）〔保育所等の送迎のための
通勤用自動車の保有〕

自宅から勤務先までは公共交通機関等での通勤が可能であるが、子の託児のために保育所等を利用しており、保育所等へ送迎して勤務するためには自動車による以外に通勤する方法が全くないか、又は通勤することがきわめて困難である場合には、課第3の9中の3に該当するものとして、通勤用自

動車の保有を認めて差し支えないか。

（答）自宅から勤務先までの交通手段が確保されている場合には、まず公共交通機関等の利用が可能な保育所等への転入所や、転職による方法を検討すべきである。

しかしながら、課第3の9の答に示された要件に加え、次の要件のいずれをも満たす場合においてはお見込みのとおり取り扱って差し支えない。

- 1 当該自治体の状況等により公共交通機関の利用が可能な保育所等が全くないか、あっても転入所がきわめて困難であること。
- 2 転職するよりも現在の仕事を継続することが自立助長の観点から有効であると認められること。

〔新設〕

（問）〔障害者の通院等の用途
の自動車の維持費〕

障害者の通院等の用途の自動車保有に際し、維持費について援助が可能な扶養義務者等がない場合、障害者加算の範囲で維持費を賄うことは認められるか。

（答）維持費について確認のうえ、障害者加算（他人介護料を除く）の範囲で賄われる場合については、課第（第3の12）の（4）の他法他施策の活用等の等に含まれるものとして、お見込みのとおり取り扱って差し支えない。

〔新設〕

（問）〔オートバイ及び原動機
付自転車の保有〕

生活用品としてオートバイ及び原動機付自転車の保有は認められるか。

(答) 総排気量125ccを超えるオ

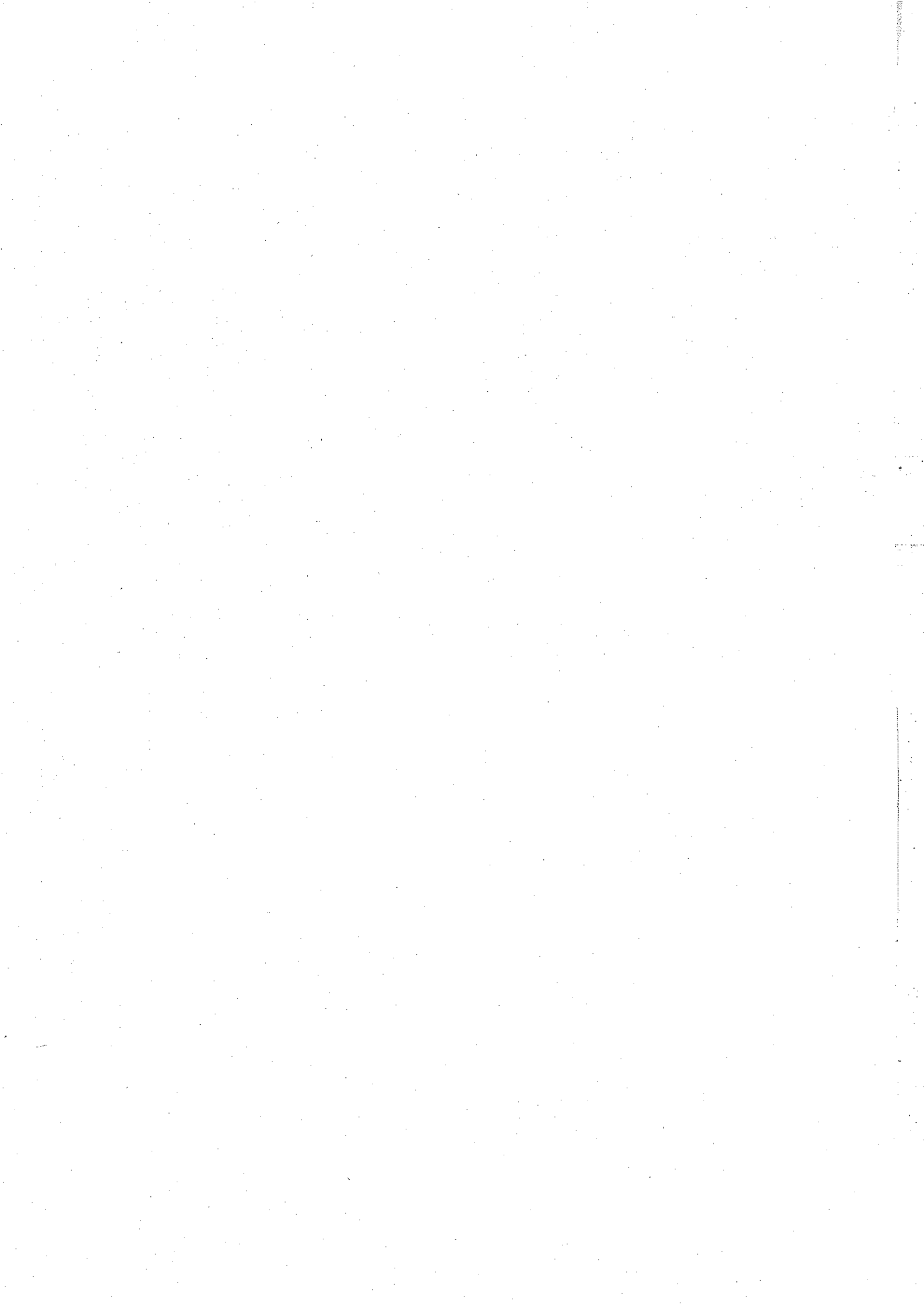
ートバイについては、生活用品としての必要性は低く、自動車の取扱いに準じて取り扱うべきものである。

したがって生活用品としての保有は認められない。

総排気量125cc以下のオートバイ及び原動機付自転車については、その処分価値及び主な用途等を確認したうえで、次のすべての要件を満たすものについては保有を認めて差し支えない。

- 1 当該オートバイ等が現実に最低生活維持のために活用されており、処分するよりも保有している方が生活維持及び自立助長に実効があがっていると認められること。
- 2 保有を認めても当該地域の一般世帯との均衡を失することにならないと認められること。
- 3 自動車損害賠償責任保険及び任意保険に加入していること。
- 4 保険料を含む維持費についての捻出が可能であると判断されること。

参 考



参 考

【1級地-1】

(平成20年4月1日現在)

都道府県・市町村名	都道府県・市町村名	都道府県・市町村名	都道府県・市町村名	都道府県・市町村名
埼玉県 川口 さいたま市 東区 八立 武三 府昭 調町 小	東京都 玉川 京の 存王 する 子川 野鷹 中島 布田 井	神奈川県 小田原 日東 国福 狛東 清東 多稲 西	神奈川県 平野 山村 立生 江和 瀬留 摩城 東京	神奈川県 神奈川 横川 鎌藤 逗大 三葉 愛名 京
大阪府 大塚 豊池 吹高 守枚 茨八 寝松 大箕	大阪府 阪中 田田 槻口 方木 尾川 屋原 東面	大阪府 大塚 豊池 吹高 守枚 茨八 寝松 大箕	大阪府 大塚 豊池 吹高 守枚 茨八 寝松 大箕	大阪府 大塚 豊池 吹高 守枚 茨八 寝松 大箕
大阪府 門田 東	大阪府 真津 大坂 庫戸 崎宮 屋丹 塚西	大阪府 門田 東	大阪府 門田 東	大阪府 門田 東

【1級地-2】

都道府県・市町村名	都道府県・市町村名	都道府県・市町村名	都道府県・市町村名	都道府県・市町村名
北海道 札幌 宮仙 埼 所蔵 戸鳩 朝和 新	北海道 千歳 市船 松習 浦	千葉県 千葉 市船 松習 浦	千葉県 千葉 市船 松習 浦	千葉県 千葉 市船 松習 浦
東京都 海峴 別城 台玉 沢田 ヶ霞 光座	東京都 葉川 橋戸 志安 京梅 村山 川賀 須塚 原崎	東京都 葉川 橋戸 志安 京梅 村山 川賀 須塚 原崎	東京都 葉川 橋戸 志安 京梅 村山 川賀 須塚 原崎	東京都 葉川 橋戸 志安 京梅 村山 川賀 須塚 原崎
東京都 北宮 埼	東京都 千歳 市船 松習 浦	東京都 千歳 市船 松習 浦	東京都 千歳 市船 松習 浦	東京都 千歳 市船 松習 浦

【2級地-2】

都道府県・市町村名		都道府県・市町村名		都道府県・市町村名		都道府県・市町村名		都道府県・市町村名				
北	海	道	岐	阜	兵	庫	川	福	岡	京	都	郡
夕岩登	張見別	道市市	大多瑞土各	垣治	加高加	古	川	大直飯田行中筑春大太宗古福筑	方塚川橋間	長	田	町
宮	城	市市市	静	浪岐原	奈	砂古磨	島	那	紫野幸	熊	保	市
茨	城	市市市	三富	岡島士	岡	良原	山	那	日城府	荒	海	市
栃	立浦河手	市市市	瀨豊安東大岩豊清北	知	玉	山	島	糟	像賀津紫珂屋	美栗免惠宮山屋	本尾	市
新	木利	市市市	三松桑	戸川城海府倉明須古	三尾府大廿安	島	原道中竹芸田	宇篠志須新久粕	川	屋	尾	市
石	湯岡	市市市		重阪名	宇防岩周	口	部府国南	芦水岡遠	那	賀	尾	市
長	川松野	市市市		屋		山			那	賀	尾	市
	野	市市市		重阪名		山			那	賀	尾	市
	田谷訪	市市市				山			那	賀	尾	市

都道府県・市町村名	都道府県・市町村名	都道府県・市町村名	都道府県・市町村名	都道府県・市町村名
出大指西垂薩日 霧南奄始 沖 宜石浦名糸沖う官 水口宿 表 内 木野 之 水川置 申島つ美良 治 良 摩 ち さ 加 繩 野 湾 垣添護満繩 主島 る古 島 市市市市市市市市市市市市 郡町 県市市市市市市市市市市				

都道府県・市町村名			都道府県・市町村名			都道府県・市町村名			都道府県・市町村名			都道府県・市町村名		
印	旗	郡	石	川	県	北	佐	久	上	水	内	志	太	郡
本	本	村	羽	咋	郡	北	佐	久	信	州	郡	岡	部	町
香	本	村	志	賀	町	小	御	代	信	濃	町	大	井	郡
山	栄	町	宝	志	町	青	立	科	小	川	町	吉	原	町
	神	町	中	島	町	長	長	木	飯	条	町	川	田	町
	多	町	鹿	能	町	原	訪	和	水	網	町	根	本	町
	東	町	鳳	珠	町	伊	那	訪	内	内	町	智	本	町
	武	町	穴	水	町	飯	島	那	郡	郡	町	周	根	町
横	取	町	能	登	町	南	輪	那	市	市	町	森	智	町
大	取	町	福	井	町	中	川	島	市	市	町			
九	古	町	今	立	町	宮	田	輪	市	市	町	愛	知	市
芝	庄	町	池	田	町	伊	那	川	市	市	町	北	設	市
一	武	町	美	方	町	松	川	森	市	市	町	豊	根	市
睦	光	町	高	浜	町	高	川	南	市	市	町	い	重	市
長	里	町	お	飯	町	阿	森	内	市	市	町	多	な	市
白	芝	町	方	お	町	清	南	智	市	市	町	明	気	市
長	生	町	若	上	町	阿	路	谷	市	市	町	大	和	市
長	宮	町	梨	狭	町	平	内	羽	市	市	町	度	台	市
大	沢	町	ア	梨	市	根	智	條	市	市	町	玉	会	市
御	生	町	ル	杜	市	下	谷	木	市	市	町	度	紀	市
安	子	町	八	代	市	壳	條	龍	市	市	町	大	伊	市
	柄	町	市	三	市	天	龍	阜	市	市	町	南	牟	市
	南	町	巨	摩	市	泰	阜	木	市	市	町	紀	牟	市
	喜	町	増	穂	市	喬	鹿	曾	市	市	町	御	紀	市
	宿	町	早	川	市	豊	鹿	曾	市	市	町			
	房	町	身	延	市	大	曾	松	市	市	町	新	賀	市
	南	町	都	部	市	上	木	祖	市	市	町	阿	島	市
	南	町	道	留	市	南	王	滝	市	市	町	南	原	市
	喜	町	西	志	市	木	大	桑	市	市	町	胎	生	市
	喜	町	忍	野	市	筑	筑	摩	市	市	町	北	土	市
	野	町	山	湖	市	麻	生	績	市	市	町	西	野	市
	沼	町	鳴	沢	市	生	山	坂	市	市	町	聖	王	市
	原	町	富	口	市	山	朝	形	市	市	町	蒲	知	市
	原	町	都	留	市	朝	筑	日	市	市	町	蒲	上	市
	賀	町	北	菅	市	筑	安	北	市	市	町	阿	郷	市
	島	町	小	波	市	安	池	曇	市	市	町	三	良	市
	崎	町	丹	山	市	池	松	田	市	市	町	出	賀	市
	沼	町			市	白	白	川	市	市	町	川	井	市
	南	町	長	野	市	小	小	馬	市	市	町	津	北	市
	船	町	南	久	市	高	高	谷	市	市	町	魚	香	市
	川	町	南	海	市	高	高	井	市	市	町	魚	月	市
	島	町	北	上	市	山	山	内	市	市	町	関	之	市
	浦	町		牧	市	木	木	平	市	市	町	粟	本	市
				相	市	野	野	泉	市	市	町		井	市
				相	市				市	市	町			市

都道府県・市町村名	都道府県・市町村名	都道府県・市町村名	都道府県・市町村名	都道府県・市町村名
京 都 府 市 郡 町 村 名 京相 丹 樂 後 置 東 城 波 根 野 笠和南 山井丹謝 伊与 兵 篠養丹南朝淡宍加多 多 市福神 赤 佐 美 香新 山 宇 吉 奈 山 宇 吉	和 歌 山 県 市 郡 町 村 名 紀伊 有 日 由 印 み 日 西 上 古 北 取 美 頭 桜 頭 伯 朝 梨 浦 栄 伯 山 部 著 野 南 野 府 島 岩 八 若 智 八 三 湯 琴 北 大 南 伯 日 日 江 雲 仁 飯 飯 斐 川 根 南 多 出 石 南 川 川 智 本	美 郷 町 郡 町 郡 町 郡 町 村 名 鹿 隱 津 吉 海 西 知 山 庭 作 氣 庭 庄 田 野 田 央 義 田 粟 米 米 咲 賀 備 中 央 岡 真 美 和 真 新 鏡 勝 奈 西 久 美 加 吉 山 安 北 大 世 神 神 大 熊 阿 島 豊 世 神 山 大 熊 阿	徳 島 川 県 市 市 郡 町 郡 町 郡 町 郡 町 村 名 吉阿美三勝 勝上 佐 石 神 那 那 牟 美 海 板 松 北 藍 板 上 美 三 東 香 東 三 小 木 綾 仲 愛 宇 八 大 伊 西 東 越 島 野 波 馬 好 浦 浦 勝 東 河 西 井 山 賀 賀 部 岐 波 陽 野 茂 島 住 野 板 馬 好 ぎ じ 川 か ぬ 豊 豆 庄 島 木 歌 川 度 の う 媛 和 幡 洲 子 温 智	都 道 府 県 ・ 市 町 村 名 町 郡 町 郡 町 郡 町 郡 町 郡 町 郡 町 村 名 上 浮 久 万 予 松 砥 喜 内 伊 字 松 鬼 宇 愛 室 安 南 土 須 宿 土 四 香 香 安 東 奈 田 安 北 馬 芸 本 大 土 大 吾 高 仁 中 佐 越 構 日 津 四 島 穴 高 原 予 前 部 多 子 和 方 和 野 北 和 南 知 戸 芸 国 佐 崎 毛 清 南 美 芸 洋 利 野 田 川 路 西 岡 山 豊 佐 川 川 の 淀 岡 土 川 知 原 高 野 万 十 高 室 安 南 土 須 宿 土 四 香 香 安 東 奈 田 安 北 馬 芸 本 大 土 大 吾 高 仁 中 佐 越 構 日 津 四

都道府県・市町村名	都道府県・市町村名	都道府県・市町村名	都道府県・市町村名	都道府県・市町村名
沖 豊南国 国大東今本恩宜金伊 中 説嘉北北中西 島 与南久渡座粟渡南北伊伊八 官 八 竹与 繩見城 城頭頭 頭宜 仁 部 納 野 武江 頭 谷 手 谷 中 城 原 尻 那 風 米 嘉 間 国 名 大 大 平 是 重 古 良 間 山 富 那 県市市郡村 村 村 町 村 町 村 郡 町 町 村 村 町 郡 町 郡 村 郡 町				

